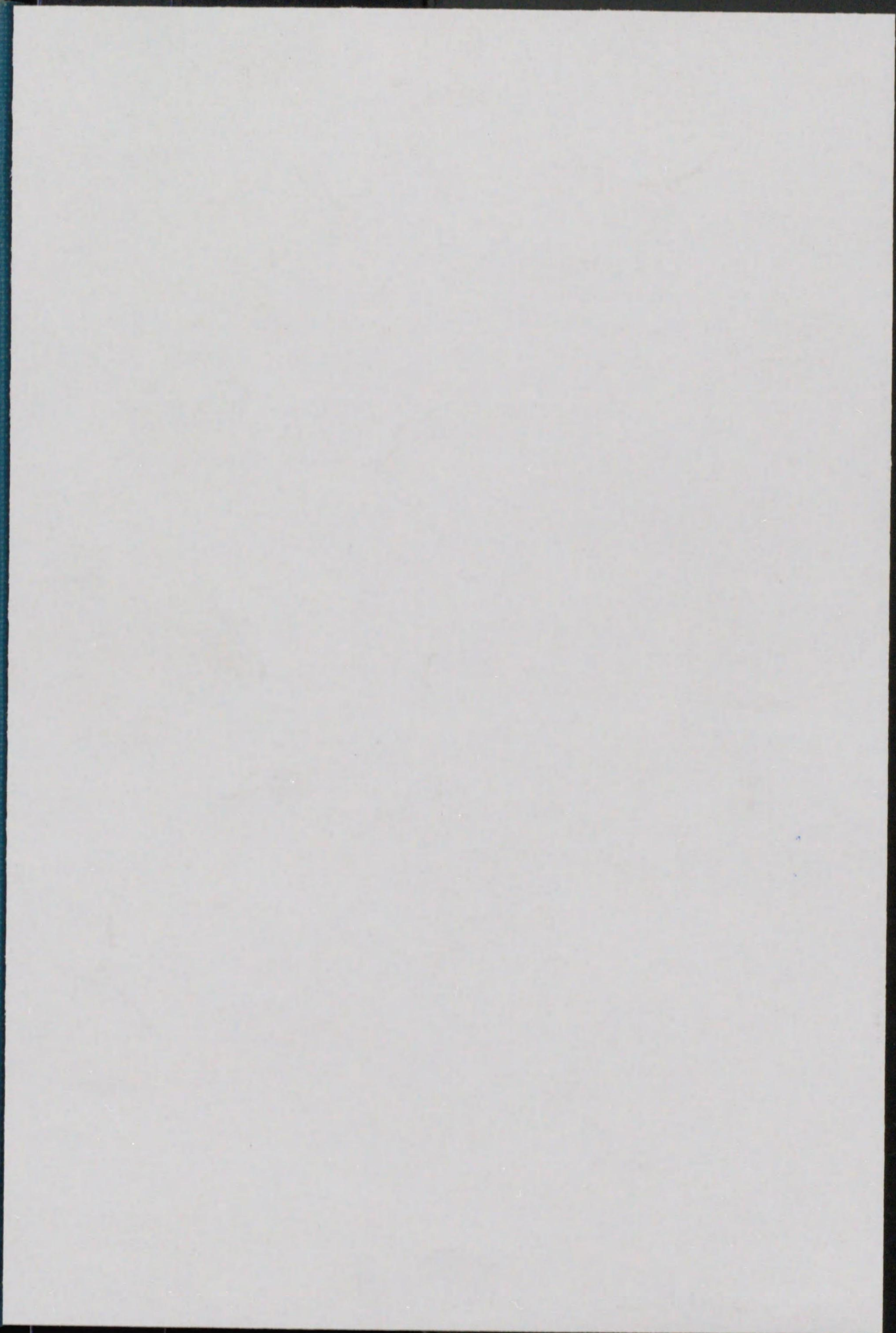
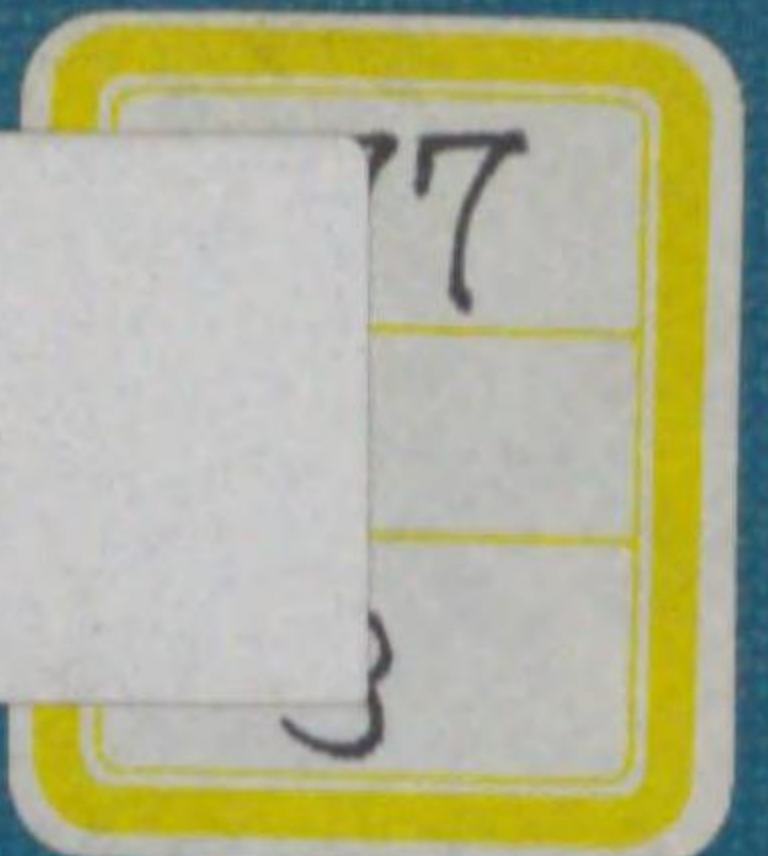


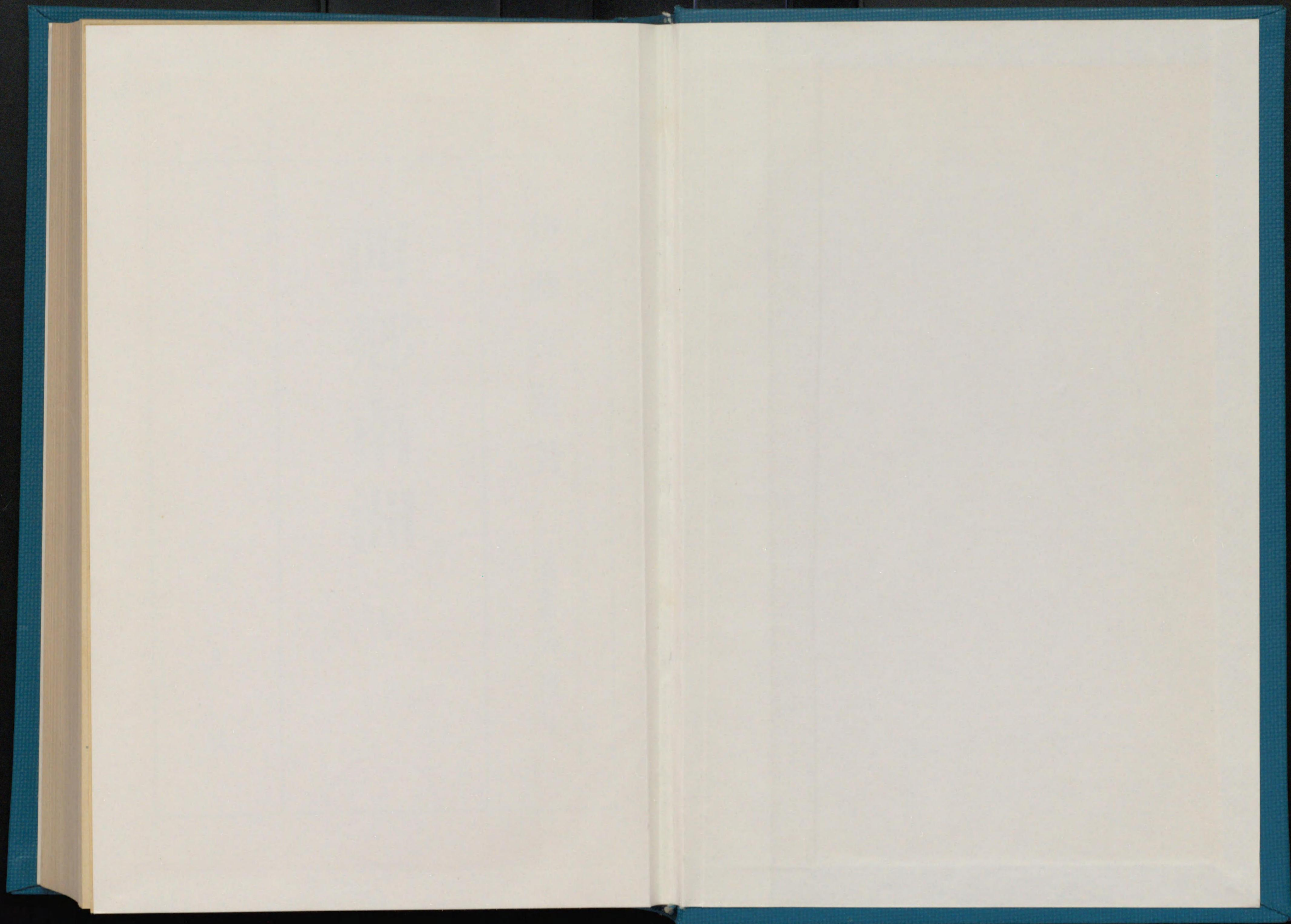
677-3



1200501576542









212B68



西鄉南洲

上

伊藤痴遊著

實錄維新十傑 第一卷

平  
凡  
社





677-3

1

次 目

第一卷 西郷南洲 前篇 目次

序 詞(二一四)……………

嘉永年間の近藤崩れ(二一六)……………

初出府(二一三)……………

儒傑 藤田東湖(二一四)……………

島津 齊彬……………

齊彬と幕府(二一四)……………

將軍繼嗣の問題(二一四)……………

吉之助の奔走と齊彬の死(二一三)……………

安政疑獄の發端(二一五)……………

二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇



安政疑獄の側面(二一六)……………二六

月照薩摩落(二一九)……………二八二

大島の南洲(二一五)……………二六六

戊午疑獄後の三年(二一三)……………二七九

久光の上洛と南洲(二一五)……………二八六

寺田屋の血闘(二一六)……………二九八

孤島生活の南洲(二一三)……………三二四

赦免の運動(二一五)……………三三二

薩長の反目と京都の戦(二一九)……………三三三

最初の長州征伐(二一二)……………三五五

長州再征の失敗(二二三)……………三六一

征長中止の談判(二二三)……………四一

五卿勅座と勅勘赦免(二一四)……………四四

毛利赦免と討幕密勅(二一五)……………四五

政權返上の真相(二一二)……………四六三

政見返上の前後(二一八)……………四八九

領土返納の朝議と容堂(二二三)……………五〇七

伏見鳥羽の激戦(二二〇)……………五三七

敗戦後の慶喜(二一四)……………五九六

大阪城の受授と征討軍の進發(二一四)……………五九六

征討令と新政府の財政(二一五)……………六〇六



西郷南洲 前篇

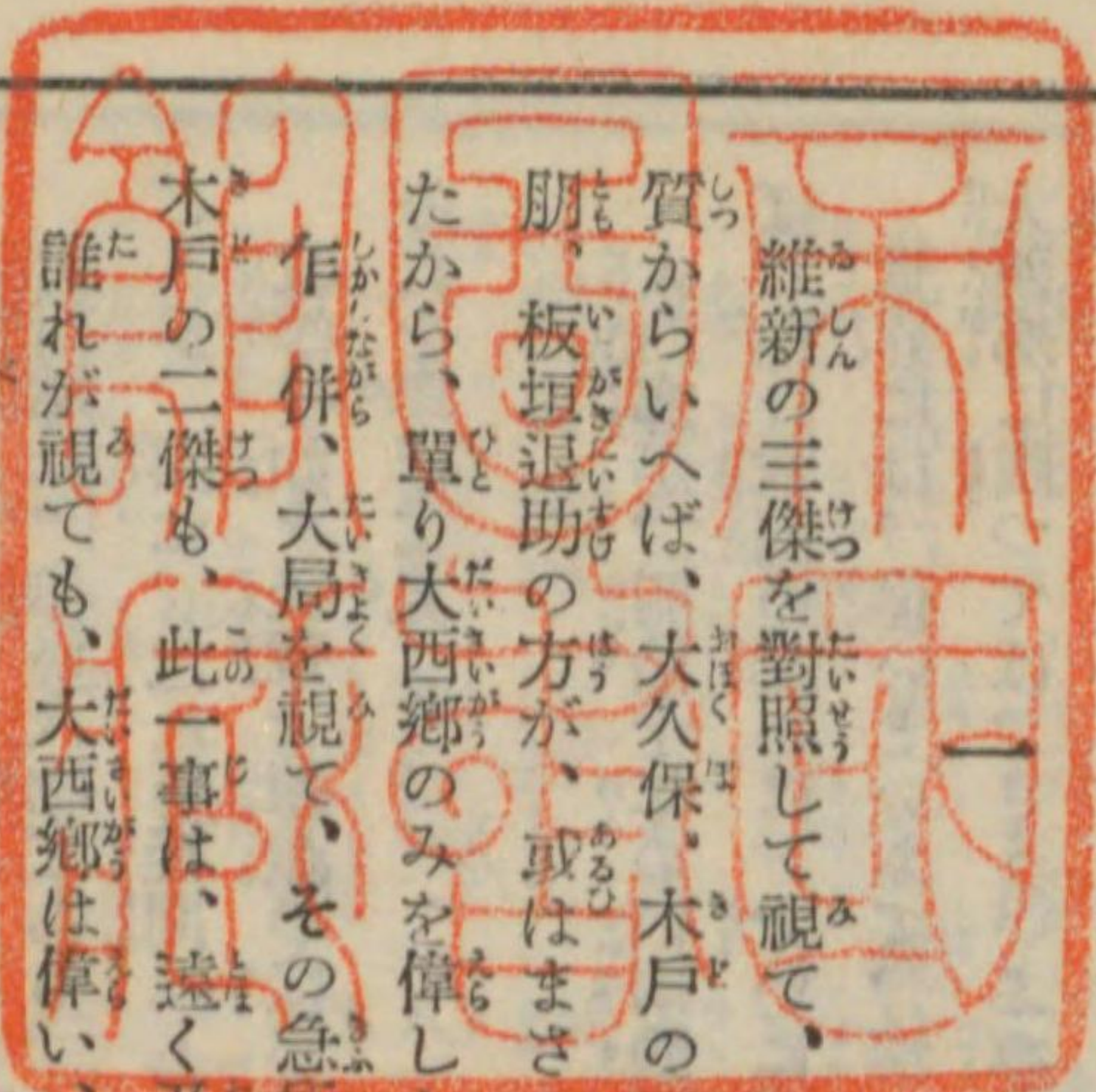


西郷南洲の傳記(一)の……  
西郷南洲の傳記(二)の……  
西郷南洲の傳記(三)の……  
西郷南洲の傳記(四)の……  
西郷南洲の傳記(五)の……  
西郷南洲の傳記(六)の……  
西郷南洲の傳記(七)の……  
西郷南洲の傳記(八)の……  
西郷南洲の傳記(九)の……  
西郷南洲の傳記(十)の……



西 嶽 南 將 前 編

序 詞



維新の三傑を對照して視て、いづれを優り、いづれを劣れり、といふ事は容易に言明し得ぬが、政治家としての實質からいへば、大久保・木戸の二傑が、すぐれて居たやうに思はれる。若し夫れ、一個の軍將として視れば、山縣有朋、板垣退助の方が、或はまさつて居たかも知れない。また軍制上の權威としては、大村益二郎、津田出の兩人が居たから、單り大西郷のみを偉しとして、他の人々を貶すことは出来ぬ。

作 併、大局を視て、その急所を通さぬ點と、人徳の充實して居た事は、とても大西郷にまさる人無く、大久保、木戸の二傑も、此一事は、遠く及ばなかつた。維新の大勢は、此人あつて定まれり、と言ふて然る可きであらう。誰れが視ても、大西郷は偉い、と言ふし、何人も、之れに對して、否と言ひ得ない所に、大西郷の人徳はあつた、といふ可きである。

世間に、若し大人物といふものがある、とすれば、即ち大西郷其人の事であらう。遠く離れて居て、一度も其顔を見ない人が、大西郷は偉い、と極めてしまふ。近く寄つて詞を交した者は、直に其風格に打たれて、頭を下げてしまふ。斯ういつた所に、大西郷の爲人が、偲ばれるではないか。

どうせ人間のことであるから、その缺點を拾ひ擧ぐれば、大西郷にも、批議すべき點はあらう。けれども、萬人が



視て、日月の如く、敬仰したのは何が爲めであらうか。此一事は、誰れも知つて置く必要がある。

如何なる場合にも、至誠を以て事に當り、赤心を以て、人に接する、といふ所が、大西郷の風格であつた。

政治を取扱ふ伎倆が、どれ程であつたか、といふやうな事や、軍事に關して、どの程度迄、すぐれて居たか、といふが如きは、抑も末節のことである。維新の風雲を捲起して、六百年來の武家政治を破り、王政復古の鴻業を爲す上に、最も必要なことは、これに當る人の風格が、第一である。

大西郷は、偉い人物である。大西郷は、大きい人物である。後世、これに比す可きものが、果して出るであらうか

どうか、僕は、之れを疑問にして居るのだ。

我等の如き後輩、薄識の徒が、彼是れいふよりか、維新當時の人傑が、大西郷に對して、何といふて居るか、先づ

それを擧げて見よう。

大西郷が、明治十年の西南戦争で、最期を遂げられた時は、まだ五十二歳であつたから、若し此事なく過ぎたならば、猶ほ我國の爲めに、大いに盡されたことであらう、と考へると、如何にも其死は、惜むべきの至りであつた。

世界には、偉いといふて、褒められる人も澤山あるが、必ず其半面には、反對の批評が伴ふものである。然るに、大西郷に限つては、さういふ事がなく、誰れても、偉いと云つて、感服して居たのであるから、よく偉かつたに違ひない。

多くの人が、偉いといふから、どれほど偉いかと思つて、さて會つて見ると、さほどでない人がある。又、多くの人が、ひどく悪くいふから、そんなにつまらない人か、と思つて、會つて見ると、存外によい人物もある。

要するに、人に對する批評は、その批評をする人の、立場と性格の相異から、起つて來るものが多いから、さういふ事にもなるのだらう、と思ふが、大西郷に對する批評に限つては、どういふものか、さうした事が更にならないのだから、實に不思議と云ふ外はない。

前年のことであるが、頭山滿翁に對して、或人が、

『西郷先生の死なれた時に、あなたは、どういふお感じがありましたか』

と、尋ねた時に、頭山翁は、例の態度で、ムズ／＼して居たが、暫くして、

『千年も、二千年も、年を経た神木が、根元から折れて、どツと音のした時のやうな感じがしたよ』

と答へた、といふ事を聞いて居るが、流石に、外の人とは違つて、翁のことであるから、言葉少なに、巧い事を云はれたものだ、と思つて、僕は、非常に感心したのであるが、此短い言葉の中に、千萬無量の意が含まれて、大西郷の偉大なる人格が、彷彿として居るではないか。

又、豊後の竹田から出た人で、小河彌右衛門一敏といふ人があつた。此人は、廣瀬中佐の父、武重と共に、佐幕派に傾いた藩論に反抗して、勤王の大義を唱へ、それが爲めに、入獄の憂き目を見たが、後には勅命に依つて、獄から赦され、維新の事に従つた人であるから、當時の事情を調べて居る者には、相當に知られて居る人であつた。

けれども、大久保利通と氣の合はなかつた爲めに、その出世は、泉州の堺縣令が行止りであつた。

此人の、先生を批評した手紙が残つて居るから、其一節を掲げてみよう。

今夜深更、薩州より大島三右衛門、村田新八、二十二日に森山一同に、又々白石家にて面會致候。大島は、元西郷吉之助と云ふて、彼の月照と一旦海に投じ候得共、引上げられて蘇生したる男にて、偕も斯る勇夫大膽の人、今の世に可有とは思ひも寄らざる程の人に御座候。

西郷、其後、菊地源吾と更名、今又大島三右衛門と改む、大島は極めて大事を成す人と奉 存 候。斯る勇士も有れば有るものと感服仕候。しかし猪武者にては無之候。

此手紙は、文久二年の頃に書いたものであるから、大西郷の年は、三十歳を出たばかりの時である。古人は、三十



にして家を成す、と云つて居るけれど、實は、その位の年頃には、まだ本當の人物には、爲り得ない者が多い。殊に昨今の人間を見ると、此感が深くなる。維新前後の人物は、實に大西郷ばかりではなく、大概な者は、その年頃には天下の大事に當つて、相當の働きを爲して居たものである。けれども、大西郷の如く、一見して直ちに、相手方を感服させて、かういふ批評までさせる、といふ程の人物は、さう澤山には無かつたのである。

土佐の陸援隊長、中岡慎太郎といふ人は、又の名を石川誠之助と稱して、阪本龍馬と並び稱された人物であつて、阪本が遭難の砌、その場に居合せて、阪本と枕を並べて斃されたが、此人の、大西郷に對する批評の書面から、其一節を抜いてみよう。

當時、洛西の人物を論じ候へば、薩藩には西郷吉之助、爲人肥大にして、御免の要石にも不劣、古の阿部貞任などは如此者かとも思ひやられ候。

此人、學識あり、膽略あり、常に寡言にして、最も思慮雄斷に長じ、偶ま一言を出せば、確然人腸を貫く、且徳高くとして、人を服し、屢々艱難を経て、頗る事に老練す。其誠實、武市に似て、學識あることは、實に知行合一の人物なり、此則、當世洛西第一の英雄に御座候。

此書面の中、御免の要石とあるは、土佐の御免といふ土地に居た、有名な力士である。又武市といふのは、例の半平太を指していふたのである。

又、明治天皇に永く仕へて、その學識と人格は、當代稀れに見るの人だといはれた、元田永孚が、嘗て大西郷に關する批評をした。それには斯う書いてある。

余、在藩之日、夙聞知南洲翁之爲人、後、相見於小倉軍營、歎曰、翁者振古之豪傑也、其胸、實脫酒死生之外、富貴貧賤威武不能移其志矣。

至復王政於千古、欲與海外萬國抗衡於中原、則其志膽之雄大、足以凌駕宇內也、所謂大丈夫者非翁而誰乎。

以上の批評は、すべて一見してから後のものであつて、永く交つて、よく其爲人を知つてから、批評したのとは違ふ。

而も其批評は、今日に至るも、動かすことの出来ぬ、立派な批評なのであるから、たゞ驚くの外はない。

しかし乍ら、大西郷と、最もよく相知つて、互に許し合つた人としては、勝海舟が第一番であらう、と思ふ。大西郷と海舟は、全然その立場を異にして、利害相反するの身であつたにも拘らず、相互にその腹の底までも知り合つて、乾坤一擲の仕事をや、り遂げた所に、面白味はあるのだが、その海舟の批評は、實によく大西郷の爲人を盡して居るから、それを引いて見よう。

俺は、これほどの古物だが、今日まで、西郷ほどの人物を、二人と見たことがない、どうしても、西郷は大きい。妙な處で隠れて、一向その奥行が知れない。

何事も知らない風をして、獨り局外に超然として居ながら、而も、よく大局を制する手腕のあつたのは、西郷一人だ。

世が文明になると、皆神經過敏になつて、馬鹿の眞似は出来ないから困る。

西郷に面會したら、意見や議論は、俺の方が寧ろ勝るほどだつた。けれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して此西郷ではあるまいかと、窃に恐れたよ。

西郷に及ぶことが出来ないのは、大膽識と大誠意とにあるのだ。戊辰之時、俺の一言を信じて、江戸城に乘込む。俺だつて、事に處して、多少の權謀を用ゐないことはないが、此西郷の至誠は、俺をして、相欺くに忍びざらしめた。

彼の時に際し、小策淺略を事とするのは、却つて此人の爲に、腸を見すかされるばかりだ、と思つて、俺は、至誠を以て江戸城を受渡し、あの通り立談の間に濟んだ。



西郷の人物を知るには、西郷くらゐな人物でなければ不可ない。俗物にやア到底解りツこはないよ。あれは、政治家や役人ぢやない、一個の高士ぢや。古人は、棺を蓋うて名始めて定まる、といつて居るが、大概の人は、死んでから後でなければ、その人物としての眞價や批評は、定まらぬものだが、獨り大西郷にあつては、此諺の必要もなく、まだ若い時分から、かういふ風に見られて居たのだから、どう考へても、偉い人であつたには違ひない。

此外にも、これに似通ふた批評は、多くあるけれど、殊に、島津齊彬が、松平春嶽へ、送つた書面のうちに、『薩藩に、吉之助の在るは、猶ほ國寶あるが如し』といふ事が書いてある位で、三百諸侯を通じて、第一の賢君と謂はれたほどの齊彬でさへ、斯くいふて居るのであるから、如何に西郷の人格が、すぐれて居たか、といふ事が、思ひやられる。

一一

上野の公園へ、廣小路から三橋を眞直に渡つて、爪先上りになつて居るところを、俗に袴腰と謂つて、昔は、其正面に、例の黒門が在つた。今の石段を登り切つた所を、山王臺と稱したのである。彰義隊士の墓と、其前に、西郷隆盛の銅像が、建てられて在る。幾分でも、維新の歴史を繕いて居るものには、深い感興を起させるのが、此二つである。

憶へば、戊辰の歳、今から算へて六十年前の夢の跡、降りしきる五月雨の中を、眞一文字に、此山王臺へ攻めかゝつた、官軍の大參謀は、即ち西郷吉之助であつたが、討伐の策戦を廻らしたものは、長州藩の大村益二郎であつた。この戦さが、其日のうちに片付かぬ時は、それこそ、由々敷き一大事になるのであるから、此點については、流石

の西郷も、容易ならぬ苦心であつた。それを承知の上で、大村は、此一戦を引受けたのである。

若し、此戦さが長引いて、日暮れにもなつたら、江戸に住んで居る幕臣や、各藩の脱走兵士が、四方から火を放ち、その混雜に乗じて、上野へ駆付けけるに極まつて居る。さうなつた時には、勝敗の數、容易に量るべからず、或は全國の佐幕派と、薩長二藩にたいして強い反感を有つ諸藩が、一時に奮ひ起つて、容易ならぬ大事になつたかも知れない。

されば、大村の策戦は、どうでも日没前に、攻落してしまはうといふのであつた。従つて、彰義隊の方では、如何に悪戦苦闘しても、日暮までは持ち堪へやうとして、必死の奮戦を續けたのであつた。

所が、大體に於て、幕臣は、順逆の名分から見て、大なる不利があつた。錦の御旗の向ふ所、六十餘州の草木、悉く風靡するの概があつて、朝敵の名を受けては、如何に勇士揃ひの幕臣でも駄目であつた。

殊に、彼我の人數と武器が、餘りに隔絶つて居つた。假りに、東臺の地利が、守るに適當であつたにもせよ、要するに、あれだけの土地である。假令半日でも守れたのは、全く幕臣の粹を抜いた、彰義隊士の死守、奮闘の結果と視る可きであつて、勝敗の分は、疾く判つて居たのである。

左様した戦跡に、西郷の銅像と、彰義隊士の墓があるのであるから、苟も此處に杖を曳く者は、いづれも無量の感慨に打たれる。

また、九段坂の上、招魂社頭には、大村の銅像がある。これは、湯島天神の境内から、上野の吉祥閣に、火焰の騰るのを見て、思はず膝を打つて『先づ可し』といふた、其時の雄姿を、其儘に寫したものだ、遠く上野の森を睨んで居る、那の形に、何ともいへぬ餘情の籠つて居るのは、當然の事である。

西郷の銅像を見て、更に彰義隊の墓を見る。その間に、無限の感慨の起るのは、誰れにしても同じであらう。併し



人間生れて西郷ほどの大仕事を、やつて退けるものがあるにしても、その死後には、決して銅像などになるものではない。

時は、彌生の春、雪かと思ふ落花のうちに、大きな眼玉を光らして、集り来る士女を睨んで居る。無風流な銅像も、何となく詩趣を帯びて、慕はしいやうな氣も起るが、何時も、腰の邊りには、無数の紙屑が吹付けられて、頬や額にも、二つ三つは、附着いて居る。學生達の惡戯で、誰れの呼吸が一番強いか、といふ試験に吹きつけるのだ。それに尙ほ甚だしいのは、女學生までが吹きつける。これは心に思ふ人と、添ひ透げられるか如何か、鼻の頭なり額の上なり、自分の心的とした所へ、巧く當れば此戀は成る、といふやうな譯で、戀の試験に、紙屑を吹付けられる、といふに至つては、實に呆れ返つた話ぢやないか、千古稀有の英雄も、こんな目標にされては、迷惑至極であらう。

二一

薩藩の微臣から身を起して、後には陸軍大將近衛都督兼參議正三位といふのだから、唯それだけでも偉いものだ。けれども、世間にはよくある事で、僥倖の運兒とか謂つて、他の汗水流して、搗いた餅を、窃と手を出して喰ふ奴がある。それがまた、不思議と運が好くて、トン／＼拍子に昇りつめ、所謂人臣の榮を、極めて居るものもあるが、どうして斯んなに昇進したのか、自分にも判らないから、況して、他人に判らう筈もなく、有りもせぬ家系や履歷をつくつて、胡麻化して居るものさへあるのだから、世は種々だ。

併し、西郷はそんなのぢやない。

永い年月の間には、意外にも他から押付けられた功名もあらうが、その代りには、また迷惑千萬な冤罪もあらう。兎に角、その一生を通じて波瀾の多い、且つ興味のある履歷に富んで居るものは、維新の功臣としてはこの人が第一である。

それに政治だとか、戦争だとかいふやうな、世間並のことに離れて、裸の人間として見て、この位偉い人は、ひろい世界にも多く其比を視ない。

敢て自ら求めずして、他を牽付ける力を持つて居るのは、所謂英雄の上乗なるものである。學んで其處に至るのも偉いが、自然に其徳の備はつて居るのは、一層尊いと思ふ。西郷の自然に持つて居た徳、即ち他を心服させて、何となく、慕はしいやうな氣を起させるのは、それが更にわざとでなく、自然にさうなるのだから、一度信じて服従したものは、一生を誓ふといふやうになつて仕舞ふのだ。明治十年の擧兵に、一萬八千の子弟が、この人の爲めに、生涯を犠牲にしてしまつたのだから、實に驚入る。

縱令、その裏面には、新舊思想の衝突や、時代の刺激を受けて、無謀の兵を起したのだ、といふやうな、非難も聞くが、兎に角、一人の動きによつて、二萬の勇士が集まるといふ、そんな事が、容易にあるものではない。

今の世に、多くの政治家があり、また大きい實業家もあるが、みな豪さうな面はして居ても、生死を共にするといふやうな立派な覺悟の乾兒を持つて居るものが、果して、幾人あるだらうか。乾兒はさて置いて、借老同穴の契りある筈の妻君でさへ、その點になれば、頗る疑はしいのである。星亨が死んで、その乾兒が、墓前に庵室をつくり、一年間墓守をした、といふ丈けてさへ、世間の人は、事珍らしさうに、語り傳へて、當代の美談としたではないか。是等のことに比べて考へても、西郷は、慥かに偉人たるに相違ない。

天の一方に、怪しい星が現はれると、忽ち西郷星の名が附く。露西亞のニコラス皇太子が来る、と聞いて、西郷が供奉で来る、と傳へられた。明治十年に、城山の露と消えた西郷が、更に十五年も経つてから、出て来る譯がない。けれども、西郷は死んで居らぬ、といふ信念が、却々弘まつて居て、下層の人は、之を深く信じて居たものだ。これは偏に、生前の徳望なるものが、死後に迄も、長くつゞいた證據で、謀叛をして逆賊の名を得たものが、これだけの人氣を占め得た、といふのも、畢竟は、西郷の人格が高かつたからである。自分の愛子が、その戦争で討死して居



るのに、それでも、西郷先生は偉い、といふて、少しも怨みとしなかつたのみならず、却つて西郷の無事生還を望んだ、といふのは、千古を通じて、多く無い事である。

四

西郷が、ニコラス皇太子の供奉をして、歸つて來るとの評判は、日に益々高くなつて來た。時は明治二十五年で、國會が開けてから三年目だ。然るに、こんな馬鹿々々しいことが、遂に問題となつて、果は、相當の資格ある人までが、小首を傾けるやうになり、蟬鼓町の相場師は、これに就いて、眞偽の賭をする。東京の市街は、この噂で持ち切つて居た。

兩國橋に近い、横山町の或大店で、土藏の建前があつた。出入の職人は三四十人、消防夫もあれば大工もあり、左官は勿論のこと、その賑かなことは一通りでない。午後の煙草憩みに始まつたのが、例の西郷生還論であつた。勇俠の消防夫は、頻りに西郷様の生還を主張して居るが、固より證據も理窟もないのだ。

「西郷様ほどの豪え人が、何て討死なんかするもんか、政府にしたつて、滅多に殺すもんぢやア無えや」といふのが、生還論の本旨であつた。

「オイ、頭ツ」

呼びかけたのは、左官の親方だ。

「何てえ」

「何てえぢやア無えや、そんな事を言ふと笑はれるぜ」

「何ツ、何を誰れが笑ふのだ」

「何をツて……死んだ西郷が、歸えつて來る譯は無え」

「死んで居りやア歸えらねえが、生きてるんだから歸えると、言ふのだ」

「ハツハ、……西郷が生きてるツて、何うして生きてるのかね」

「何うしてツて、生きてるから生きてるんだ」

「それやア理窟が合はねえ。西郷は、討死して居るのだ。朝廷様の帳面にも、さうなつて居るのだ。今更ら生きてるなんて言つたツて、そりやア駄目だ」

「駄目だア、何だ」

「駄目だから、駄目だツて言ふのだ。ヘン、箱根から東に、幽霊と化物は、無え筈だ」

「オヤ、この土捏奴ツ、妙なことを吐かしやアがツたな。幽霊だア誰れのこツた。化物だア誰れのこツた。さア、それを吐かせツ、返辭によつちやア勘辨しねえぞ」

「誰れツて、そりやア、西郷のことだ。死んだものが歸える譯が無えぢやねえか。もし歸えりやア、それこそ化物か幽霊だ」

「コン畜生ツ……」

氣早の消防夫は、左官の親方に飛びかゝつたが、親方も、負けては居ない。

「何だ、この青二才奴ツ」

と立上つた。

今迄は、この論判を、面白さうに聞いて居た連中も、まさかと思つて居るうちに、喧嘩の花が咲いたので、ひとしく總立ちになつた。

「きヤツ」

と叫んで、親方が倒れた。



見ると、消防夫は、鋏を持って、立つて居た。親方は血だらけになつて、呻吟つて居るのは、その鋏でなぐられたのである。さア騒動は大きくなつて、店の旦那も出て来れば、醫者もかけつけた。療治は届いたが、却々の重傷である。その場は濟んだが、翌日になると、警察沙汰になつた。双方を取調べると、前の通りの次第で、實に無邪氣なことでだから、署長も、此處分には窮した。

この時の署長は、大庭知榮と謂つて、顔を見れば、髯、ムシヤの鐘馗面だが、生れは生粹の江戸ツ子で、元は、植木屋の職人であつたが、邏卒から仕上げて、署長に迄、昂り詰めたといふ、變り者であつた。これが若しも、普通の署長なら、消防夫を、牢へぶつ込んでしまふのだが、この連中の内情を、よく知つて居る大庭には、それが出来なかつた。

そこで、種々苦心の末、若者の家へ使ひをよこした。大至急相談があるから来てくれ、といふのであつたから、著者は、早速駆けつけると、大庭は、此事情を打明けて、是非仲裁をしてくれといふのであつた。幸ひな事には、どちらも著者の知つて居る人であるから、示談は、すぐに運んで、消防夫からは詫證を出して、それを著者が、預かる事になり、又大庭が、治療代五圓を出して、僕も五圓、本人からも五圓出させて、都合十五圓を、親分に渡して、これで愈々示談は濟んだが、著者は、大庭の精神が、實に嬉しく思はれた。此人は、後に日本橋區長になつたが、死ぬ迄續いて、勤めて居た。

斯うした逸話もあつて、西郷生還の噂は、それからそれへ傳へられた。ニコラス皇太子は、噂の通りやつて来たが、西郷は、終に影も見せなかつた。

僕が、初めて南洲傳を書いた時、畏友福本日南は、拙著に對する、紹介の辭となす可く、左の如き一章を寄せられたから、茲に改めて掲げる事にした。

昔者楚相孫叔敖、楚王を輔けて天下に覇たらしむ。後世王を稱して五霸の一と爲す者は、實に叔敖の力なり。既にして叔敖死す。其子窮困して薪を負へり。優孟之を憐み、即ち叔敖の衣冠を着け、抵掌談論すること一歳餘、宛として叔敖の如し。一日楚王置酒して大會す。優孟衣冠を整へ、前みて王の壽を爲す。王見て大に驚き、叔敖復生したりと爲し、用ひて相と爲さんと欲す。優孟辭して曰く、楚相は眞平御免なり。叔敖の相たるや、忠を盡し、誠を容れ、王以て覇たるを得たまへり。今叔敖死して、其子は貧困薪を負へり。必らず叔敖が如くなるならば、自殺するには如かずと。因りて恍惚歌を歌ふ。王聽きて立ちどころに感悟し、乃ち叔敖が子を召して、之を寢丘に封じたりと。今に至るまで傳へて以て美談と爲せり。

西郷南洲は不世出の英雄なり。予嘗て之を論じて言へることあり。曰く、  
 『陛下は天授、人力の能く及ぶ所に非ず』との語に當る可き人を思へば、明治の天地、獨り、西郷隆盛あるのみ。大凡人の豪とせられ、偉とせらるゝは、概ね多少の事業を成し、功名を立てたる後に在るも、西郷に至りては則ち然らず、其の茶坊主たるや、島津齋彬早く之を器とし、滿城の健兒夙に之を畏る。其の出で、四方に遊ぶや、海内の志士皆之を敬へり。水戸の藤田東湖は傲岸にして人に許可せざるの士なり。然も一見して豪と爲せり。豊後の小河一敏は有志の士なり。文久の初之と會するや、其日記に筆し『初て三右衛門に面會するに、勇威逞しく、膽略世に勝れたるさま、斯る人の今の世に在るべしとは思はざりき』といへり。石見の福羽美静子も亦庸人には非ず、其の始めて西郷大久保を見たる際の感想なりとて、嘗て予に語りて曰く『美静が讀みたる千卷の書よりも、大久保が讀みたる十卷の書用を爲し、大久保が讀みたる十卷の書よりも、西郷が讀みたる一巻の書用を爲す可きを思ひたりと。其人となりの如何も、亦以て想見す可きなり。』

慶應の末年、幕府の紀綱頽廢したりと雖も、尙三百年、十五世、積威の在るあり。勤王の公卿諸侯より、草莽の



志士に至るまで、頗る討幕の成功を疑へり。是に於て朝廷密かに西郷、大久保、小松、木戸、廣澤等を召し、勅して其意見を問はせらる。西郷對して曰く『成算疑なし。只だ宸斷を待つのみ』と。事乃ち決せり。既にして返くや、大久保以下交々問て曰く『公何の成算ありて、奉答則ち然るや』と。西郷曰く『有ること没し』一座色動く。西郷曰く『我黨多年勤王を唱へ、肝膽を國事に摧くものは、今日あらんが爲には非ずや。今忝くも勅問に對す。宸斷を請はずして何をか爲さん』と。維新中興の大業は實に此奉答に定まれり。此他廢藩置縣の擧の如き、木戸之を策せりと雖も、西郷の一諾を待ちて、始めて決定したる、人々の知れる所の如し。

予又之を福羽子に聞く。維新の初、子は西郷と朝に在り。一日西郷從容として語りて曰く『人皆王政の復古と言ふ。復古乎。復古乎。王政の昔、三韓は、我版圖なりき』と。明治六年西郷の廟堂に在りて、征韓の議を主張したる、業に已に偉とするに足りて、而も此議を懷抱せしは、一世蹟々、國政の統一をすら危疑したる維新の當時に在りしを思へば、更に偉として又大とせざるを得んや。

南洲逝きてより茲に三十四年、一世の風潮は滔々として智巧に走り、謂ふ所の明は秋毫の末をも察して、輿梓の大を睹ざる者、比々皆是ならんとせり。梅園翁が微辭諷し得て妙なり。其辭に曰く、

『餘りにも瑕あらせじと思ふより、小さくなりぬ可憐眞玉は』

と。是れ豈此本國の爲に、寔に可惜々々しき事には非ずや。

仁太君痴遊は其れ今の優孟なる乎。國人の概ね楚王となりて、我孫叔敖を忘れんとするを慨し、即ち南洲の意氣を學び、抵掌談論するもの茲に數歳。乃ち其語を哀めて、本傳を立つ。之を繕げば、南洲性々、我前に在すが如し。國人幸ひに之に感悟せば、南洲の再生、其れ庶幾す可き歟。吁、後の南洲其れ庶幾す可き也。

日南學人

### 嘉永年間の近藤崩れ

西郷が幕末から明治の初期へかけて、最も重要な位置を占めて居たことは、既に多くの人は知つて居るが、今、その履歴を、詳述するに當つては、先づ嘉永年間の近藤崩れから、始めるのが、順序である。

近藤崩れといふのは、島津家に起つた相續争ひで、即ち、齊彬と久光の間に、深刻な相續争ひの起つた事を、指して謂ふのであるが、齊彬は、正妻の腹から出た人で、而かも長男であるから、正統の嫡子として、島津家の相續權は當然、此人に歸すべきものである事は、殆んど争ふ餘地はなかつたのである。

久光は、妾腹に生れた次男で、幼少の時に、一門の重富家へ、養子に行つてしまふたのであるから、それで相續争ひの種は、既に斷れて居た筈であるにも拘らず、その争ひの起つた事は、不可思議千萬と思ふ外はないが、すべて大名の御家騒動なるものは、斯うした無理を、押通さうとする所から起るもので、争ふべからざる事を争へばこそ、御家騒動も起る譯で、齊彬附の家來と、久光附の家來が、鎬を削つて争ふに至つた事は、島津家の歴史に、大きい汚點を残した譯にもなるのだ。

その中心人物になつたのが、齊彬派では、近藤隆左衛門であつた。又、久光派は國老の島津將曹(後の豊後)であつた。結局は、齊彬派の勝利に歸したけれど、一時は、齊彬派の重立ちたるものは、すべて嚴罰に處せられて、閉息



するに至つた程の険しい争ひであつた所から、薩藩の人は、これを近藤崩れといふたのである。

徳川幕府の三百年間を通じて、大名の御家騒動は、少なからずあつたが、其中に於て、最も有名なものは、伊達、榊原、池田、前田、福島等の家に起つたものが、殊に大なるものであつた。少し小さい所では、仙石、森家等の事件をはじめ、其他にも多くあつたけれど、實は、島津家の騒動は、此等の事件に比べると、頗る大きいものであつた。それほどに大きい騒動が、ひろく世に傳へられず、長い間、全く秘密に葬られて居たのは、不思議といふ外なく、従つて、芝居にも上らず、また講談物語の種にもされなかつたのは、島津家の爲めに、幸福であつたとも言へるが、昨今に至つては、これに關する傳説も、各方面の人から、やうやく披露されるやうになつて、今では、可成り多くの人に知られて來たが、之れを一般の人に傳ふべく、一つの物語として公けにしたのは、僕が、最初の一人であつた。島津家では、此騒動が片付くと同時に、一切の記録を、燒棄した上に、苟も領内の士女には、如何なる場合にも、此事件の噂をする事さへ、嚴重に禁止してしまつたので、それが爲めに、多くの御家騒動中、最も複雑にして、且つ興味の多い事件が、長く煙滅して居たのは、誠に残念な次第であつた。

僕が、此事件のあつた事を、稍や詳しく知り得たのは、長谷場純孝が、衆議院へ出て來た當時に、不圖した座談から、ヒントを得たのが原因で、これからは、各方面の醫人に就いて、いろ／＼と聞き糺し、やうやく其形を作り得て、更に鹿兒島へも、幾度か出掛けて、その材料を得べく、随分熱心に、調査を遂げて居るうちに、偶然のことから一冊の古文書が、手に入つたので、それを讀んで行くと、此事件の終始が、可成り細かに書いてあつたので、その前に得た材料が、稍や確實なものとなつて、公開の席に、ぼつ／＼語り始めたのであつた。

それから數年経つて、三田村鳶魚が『日本及日本人』へ、此事件の顛末を書いた事がある。それも取入れて、取捨按配した結果、完全な物語として、世に傳へ得られるやうになつた。それに就いて、かういふ事があつた。

明治四十三年の頃と記憶するが、長谷場に勧められて、鹿兒島へ、講演に行く事になつた。その時に、島津家騒動を、主として演じたのであるが、出發に先立つて、長谷場は、僕に向つて、

「此事件は、島津家で、最も嚴しく取締つて居るのだから、それだけは話さぬ方がよからう。殊に、醫人のうちに、は、全く時代離れのした、舊式の者が多く、昔風の武士氣質を今でも守つて居る者が、少なからずあるから、御家の一大秘密を許かれてはならぬといふ感情から、強い妨害を受けると、講演の妨げにもならうし、萬一にも、亂暴な奴が飛出して、どういふ事をするかも知らぬから、さうした危険を冒す事は先づ避けることにしたらどうだ。今の島津家は、久光の血統で、君の所謂、奸黨の子孫が、今でも島津家に、多少は残つて居るし、其他にも多く居るのであるから、君が、此事件を、鹿兒島へ行つて話す事は、危険の上なしてある」

と、いふて、頻りに警告してくれただけでも、さう言はれて見ると、縱令危険を冒しても、やつて見たくなるのは僕の性癖で、聊か物好きの觀はあらうが、長谷場の忠告に背いて、僕は鹿兒島へ乗込んで、豫定の如く、此講演を試みたのであるが、意外にも、長谷場が、心配してくれた危険もなく、非常な歓迎を受けて、その講演は、大喝采を博したのであつた。

その後、僕の南洲傳が、福岡日日新聞へ續掲されて居ると、熊本、煙草專賣局長の菅某といふ人から、突然、かういふ意味の書面が届いた。

「自分の伯父は、此騒動に累を得て、流罪處分になつたのであるが、その生死は、全く不明で、豫て兩親からも、其事を聞かせられて居たが、今、君の書いて居るのを見て、始めて事件の顛末を、知る事を得たのは幸福であつた。就いては、自分の伯父が、何處で死んだか、それを知つて居るなら、是非知らせて貰ひたい」

此事件に、關係した人の縁族から、斯うした書面の來たこともある。又、例の村野山人の父が、此事件で死んで居る。その顛末を、大阪毎日新聞へ掲げると、其時も、村野から、感謝



の意を表して、同社の神戸支局長を通じ、僕に、會見を求めて来たことがあつた。昔の兵庫時代から、土地の素封家として知られた、神田兵右衛門といふ人を立會にして、常盤垂壇で村野に會見したが、涙を流して、亡父の忠死を、世に傳へられたのは、有難い、といつて、泌々禮を言はれた事があつた。それらの事情から考へて見ると、此事件に、關係した人の子孫は、事件の真相が、すべて秘密に葬られて居た事を可成り残念に、思つて居たらしく、僕の發表によつて、各方面からもひどく喜んで来た。

西郷の父も、此事件には、間接の關係者として相當に苦心した事實がある。殊に、西郷は、此事件から、一種の教訓をうけて、その士人としての氣魄に、容易ならぬ印象をうけて、晩年に至るまで、久光と、餘り好感を持たぬやうになつて居たのであるから、南洲傳を述ぶるに當つては、先づ此事件から始めるのが、順序であらう。

けれども、西郷の父は、さまでに深く、事件に携はつたのではなく、身分の上から見ても、事件の中心に觸れる事は出来なかつたのであるから、單に、赤山毅眞の恩に感じて、その手先になつた、といふに過ぎないのであるから、僅に事件の梗概を述べることにして、別冊の大久保傳の中に、詳細の顛末を、述べる事にするから、今迄の南洲傳に較べると、此事件を叙する事が、非常に簡略すぎるかも知れないが、其點は、讀者に於ても、よく諒解して貰ひたい。

一一

鳥津家は、九州第一の雄藩であつて、而も嘉永の年までには、二十五代の長きに亘つて、三百諸侯の中でも、最由緒のある家柄であつた。

二十五代も續いたのであるから、其の中には餘り感心の出来ない藩主もあつたが、大體に於て、賢君が續いたといふことは、他の諸藩に比べて、先づ珍らしい方であつた。

二十五代の當主を、重豪と謂つて、非常な賢君であつた。殊に、其娘が、家齊將軍の夫人になつて居る關係から、徳川家とは、最も親密の間柄であつて、鳥津家の爲には、此の上もない縁組であつた。重豪は隱居して、榮翁と稱し、芝の白金に、宏壯な屋敷を構へ、非常に豪華な生活を仕て、その生涯を終つた。

重豪の子が、齊興といふ人であつた。齊興も、父に似て、却々の人物であつたが、大名の一癖ともいふ可き、自我の念に強く、當時は既に、六十歳を越えて、大概の人は早補の用意をする、といふ程の老境に、達して居ながら、未だ隱居もせずに、藩政を攝つて居たといふ程に、頑健な老人であつた。

何處の大名にしても、六十歳以上になれば、家督を若殿に譲つて、自分は、隱居するのが、常式の如くなつて、居たのであるが、早い人になると、四十歳前に、隱居の支度をして、藩政から遠ざかつて行くのが、多かつた位で、六十歳を越えて、藩政の實權を握つて居た、といふやうな人は、餘り多く見當らない。

而も、齊興は、子福者であつて、相當に多くの子供があつた。長男は、世に有名な、齊彬といふ御方であつて、後には藩主になつて、一段とその人物を認められた。その次は齊敏と謂ふて、此の人は、備前の池田家へ養子となつた。三男は、幼名を普之進と稱して、後に久光となる人だが、此の外にも、女子が數名あつて、子供には、不自由のない藩主であつた。

齊興が、六十歳の坂を越え、長男の齊彬は、既に三十歳臺になつて、夫人も迎へてあるし、數名の子供も、生れて居た程であるから、早く家を譲つて、齊彬の世にするのが、正當であつたにも拘らず、齊興には、更にさうした考へもなかつたらしく、自ら藩政を攝つて、家督を譲らうと仕なかつた。

齊彬は、幼名を邦丸と稱して、子供の時分から、非常に英明な御方であつた。長い間、部屋住みの御方ではあつたが、疾く諸侯の間にも知られて、その交友は、頗る多く、諸侯の中では、宇和島の伊達宗城、福山の正弘、高知の山内豊信の三人が、最も交りの親しい方であつた。その他、岩瀬肥後、川路左衛門尉、江川太郎左衛門、大久保越中守



佐久間象山、藤田東湖、渡邊華山、高野長英等の人々が、接近して居たのであるから、其の交友を見て齊彬の人は充分に推測し得られる。

併し、齊彬は、江戸に生れて、江戸に育つた人であるから、薩摩の國風には、少しも馴染んで居なかつた、といふ點が、國語の家來との折合も悪く、齊彬に對して、深い親しみを有つて居らぬ者が、少なからずあつたのは事實である。十六七歳の頃、初めて鹿兒島へ行かれたが、僅に半年ばかり居たのみで、恰で逃げるやうにして、江戸へ歸つて來られた程であるから、國語の藩臣とは、極めて親しみが薄かつた。

齊彬には、多くの妾があつた。何處の大名も、みな同じ事であるが、齊彬の女道樂も、相當に強い方であつた。五路の坂を越えてから、迎へた妾に、お由良といふ婦人があつた。其の腹に出來たのが、例の普之進であつて、それが戀で、島津家に累を及ぼす種になつたのである。

お由良は、江戸の三田四國町に生れた女で、父は、大工の頭梁であつた。容色は、非常に優れて居て、親の道樂から、遊藝も一通りは仕込んであり、殊に、舞踊が得意で、その踊る手振りや身の取りなしが、實に巧であつた、といふことは、可成り廣く知られて居た。或時の祭禮に、三田の薩邸へ出掛けて、齊彬の前で、一と差舞つたのが、齊彬の氣に入つた因で、戀で召出されて齊彬の妾になつた。

大工の娘が妾である、といふのでは、お由良の値打ちにも拘るし、家來の手前もよくないので、俄に岡田小藤次といふ侍が、一夜造りに生れて、その妹のお由良が、殿様の御眼鏡にかなつて、妾になつたのである、といふやうに取つて、併し、お由良は、決して愚かな婦人ではなかつた。容色が、優れて居る上に、遊藝にも堪能であり、殊に齊彬の子を生んで、而も、それが男子であつたから、齊彬に受ける寵愛は、一段と深くなつたのであるが、折角に生れたのが、立派な男の子であつても、長男の齊彬がある以上、相續權は無いわけで、普之進は、早く既に、島津家の一門た

る、重富の島津山城へ、養子に遣はされて、生涯を、二萬石の分家として、送らなければならぬことになつたのが、文政八年の三月のことであつた。

そこで、お由良は、何となく満足が出來なかつた。自分の腹を痛めて、生れた子供が、長男に、後れて生れた爲に二萬石の分家の主人として、生涯を送らなければならぬ、といふ事は、餘りに辛いことであるとして、長男の齊彬が、七十萬石の本家に主人となることに、多少の妬みを有つやうになつたのは、淺ましい女の情としては、無理ならぬことである。

次男の齊敏は、既に池田家へ、養子に行つて居るのであるから、長男の齊彬さへ居なくなれば、自分の子供は、重富から引戻されて、本家の當主になれるのである、といふ心持ちが、始終動いて居るから、それに付け入つて、齊彬を嫌ふ國語の家來達が、暗中の活動を始めて、お由良の満足を満したいといふ、奇怪千萬な企てが、大いに目論まれて來た。それが、島津家の興廢に拘はる如き、意外の大事件になつたのである。

この場合に、一言斷つて置かなければならぬのは、齊彬と普之進との間には、其の相續争ひに就いて、何等の考へを有つて居なかつた、といふことだけは、判然解つて居るのだが、全く周囲の者が、起した争ひであつて、擔がれた本人は、互ひに少しも、之を争ふ考へがなかつた、といふことに、他のお家騒動と、少しく違つた所があるのだ。

普之進が、兄の齊彬を排斥して、自分が、其の後へ這入らうといふ考へがあつたのではなく、又た、齊彬も、普之進を、三男であるが故に、無理に押付けて、自分が、當主にならなければならぬ、といふことを、考へて居たのである。無く、自分は、長男であるから、當主になるべき運命を、有つて居るものと、軽く考へて居たに過ぎなかつたのであるから、齊彬と普之進の間には、少しの反感もなく、骨肉相争ふといふやうな、汚ない心は、更に無かつた。

國語の藩士の中には、齊彬を好まぬ人が多くあつた、といふのは事實だ。それは何ういふ次第か、といふに、齊彬は、江戸で生れた關係から、江戸が好きで、薩摩の國風に馴染まぬ、といふことが、國語の藩士には、何と無く氣に



容らなかつたのだ。

齊彬は、非常に賢明な御方で、時代の進むにつれて、海外の事情にも深く注意して、現に、高野長英が、破牢の罪人として、幕府の搜索が厳しかつたにも拘らず、澤三伯と變名して、劇薬を用ひて、顔の相好を崩し、幕府の眼を忍んで、内藤新宿邊りに、潜伏して居たのを、三田の藩邸へ、呼び入れて、和蘭の兵學を講じさせたり、西洋の文化を取り入るべく、種々なる研究をした、といふやうなことを、やつて居たのだ。

齊彬は、さうした性格の人であるから、薩摩の本國に閉籠つて、世界の風に當らない、頑迷な藩士達には、氣に容らなかつたのが、或は當然の事であつたかも知れない。

嘉永の歳になると、アメリカの使節が、相州浦賀へ、やつて来て、開國條約の調印を求め、幕府の態度が、甚だ不鮮明であつた爲に、攘夷論が盛んになり、また、一面には、開國論を唱へる者が出て来た。それに對して、朝廷は、飽迄も攘夷の方針を以て進む、といった事態が、茲に生れて来たので、何處の藩でも、この兩派が、非常な軋轢を初めて、深刻な内訌が起つて来た。

されば、薩摩にも此の兩派が起つて、軋轢を初めたのは、時代の傾向で、止むを得ぬことであつた。唯一つ可怪しなことは、幕府が、外夷に迫られて、條約に調印をしたのであるから、幕府を助ける者は、開國論者でなければならぬ筈であるのに、佐幕派の中にも、攘夷論者があり、攘夷派の中にも、佐幕黨がある、といったやうな譯で、佐幕と倒幕、攘夷と開國、それ／＼に、其立場が紛糾して、様々な結び付きになつて居たことは、何う考へて視ても、不思議な事態であつた。

薩摩に於て、佐幕派と目すべきものは、島津將曹を初め、調所笑左衛門、吉利仲、伊集院平、二階堂靜馬等、譜代の重臣であつた。勤王派の方には、近藤隆左衛門、山田市郎右衛門、赤山靱負、高崎五郎右衛門等の烈士が居て、それに一門の島津壹岐も加はり、双方が鎗を削つて、對抗するといふ状態であつた。

將曹の一派は、齊彬排斥派であつて、赤山、近藤の一派は、齊彬擁護派といふ傾きがあつて、それに相續争ひが、絡んで来たから、可成り此の紛糾は、面倒なものになつて来た。

斯うした場合に、齊彬が、既に三十歳を越えて居て、家督の相續もなし得ず、部屋住みの若殿で居た、といふ、奇怪な事情になつて居る爲に、其際に乗じて来たのが、島津將曹の一派であつて、齊彬は、既に六十歳以上でありながら、何ういふ理由で、賢明の聞き高き、若殿の齊彬に、家督を譲らぬのか、齊彬の心は、何うであつたかといふことは、齊彬自身の外に、之れを知る者は無く、多くの藩士は、左右に別れて、争つて居ても、眞に齊彬の心事は、全く解らなかつたのであつた。

齊彬は、家督の相續を、齊彬に爲せないでは居たが、普之進を、夙く重富家へ、養子に送つたり、次男の齊敏を、池田家へ養子にやつた、といふ點から、考へて視ると、齊彬は、矢張り齊彬を、正當の相續人として、重く視て居られたには違ひないが、併し、現實に相續はさせなかつたのだから、齊彬に對して、齊彬は、何處か氣に容らぬ點もあるのであらうと、齊彬を排斥する一派が、それを考へて、陰謀を企てたのは、小人の心としては無理のない事であつた。大名のお家騒動などといふものは、斯ういふ所から、往々にして芽まれて来るものである。

二二

齊彬の子供は、不思議に生育が良くなかつた。殊に、男の子は、いづれも幼少のうち病死してしまつたので、之に就ても、悪い噂が傳へられて、相續争ひを、深刻なものにしたのである。

菊三郎、寛之助、盛之進、陽之助といふ、四人の男の子が、引續いて世を逝つたので、跡には、澄姫と邦姫の二女が、残つた丈で、それも多くは病勝ちである、といふやうな事情で、齊彬附の老臣が、先づ此事情から、頻りに心配を始めた。何を差措ても、はやく家督相續を爲せて仕まはねば、如何なる異變が生ずるかも知れぬ、といふ考から、



齊興に對して、いろ／＼に申上げたけれども、齊興は、言を左右にして、容易に許す氣色は見えなかつた。そのうちに、お由良の味方を爲るものが、頗る多くなつて來て、普之進の相續運動は、調子よく進んでゆくやうにも見えるので、齊彬派の人々は、之れを容易ならぬ事として、頼りに會合を重ねるやうになつたが、その中心人物として、最も重きを爲した一人が、町奉行兼物頭の近藤隆左衛門であつた。

島津將曹が、古參の國老であり、且は、怪物の調所笑左衛門も、生前はその一派の參謀格で、齊彬排斥を策謀して居た事は、疾くから近藤も、其秘密を搜り知つて深い注意はして居たが、まさか動かされるやうな事はなからう、と思つて居た大殿、齊興の容子に、少しく疑はしい所が、視えて來たので、近藤の驚愕は普通ならず、兎に角、彼等に對しては、先手を打つて、その策謀の裏を挫く必要がある、と考へて、これから同志の糾合にかゝつたのである。忽ち檄に應じて、集まつて來たものは、幾十人の同志で、いづれも御家を思ひ、齊彬を、擁護する事に、一身を捧げやう、と爲る、忠義の武士ばかりであつた。

其主立ちたる連名は、山田市郎右衛門（町奉行槍鐵砲奉行）、高崎五郎右衛門（船手奉行）、土持岱助（表具方目付）、村田平内左衛門（道方目付）、國分猪十郎（無役）、吉井七之丞（藏方目付）、松元一左衛門（地方検見）、山内作次郎（郡廻見）、脇岡五郎太（宗門方書役）、中村嘉右衛門（裁許掛）、赤山靱負（物頭）、野村喜八郎（廣敷横目）、村野傳之丞（奥小姓）、高木市助（製藥掛庭方）、大久保次右衛門（琉球館藏役）、その他、和田仁十郎、名越左源太、吉井七郎右衛門、島津清太夫、新納彌太右衛門等の有志であるが、是等の人は、いづれも藩中に於て、相當の有力者であり、また人物としても、優れて居たことは、誰も認めて居たのであるから、結束次第で可成り強い一團にはなり得るのであつた。その上に、江戸詰の家老、島津壹岐も加はつて、遙かに聲援を與へて居るから、勢力の上から視ても、決して侮る可からざるものがあり、殊に、此一團の主張は、世子の齊彬を、順等に押上げよう、とするのであるから、其唱ふる所には無理がなかつた。

けれども、此一事は、要するに齊興の心一つで、何うにでもなるのであるから、少しも油斷は出來ない。老臣の島津將曹や、物頭の吉利仲等の勸説が、随分はげしくあるのみならず、裏面からは、美人の側室が、チク／＼攻め込むので、齊興の心が、動もすれば傾きかゝる。斯くて日を送るうちに、双方の軋轢は、殆んど頂點に達した。双方ともに、策といふ策は行き盡くしたが、何うも御相續は、普之進らしく思はれて來た。萬一にも、そんなことになつては、それを御君の一大事である、と、齊彬派の人々は、尋常ならぬ苦心であつた。この上は、如何なる手段を以てするも、將曹派の策謀を覆へさねばならぬ、と、殆んど決死の覺悟になつて、陰慘の氣は、充満て來た。

正義派の諸士は——薩藩では、齊彬擁護派を、斯く呼んで居た——各所に密會を開いては、頻りに相談に耽つて居た。折柄、島津壹岐が、江戸表より歸つて來たので、近藤は、壹岐を訪ねて、始終の事情を話した。然るに、壹岐は又た事の容易ならぬを察して、藩用を僥倖に歸國したのであつたから、同志の集會を催すことになつて、これから檄を傳へた。

密會の場所は、近藤邸と定めて、近藤、山田、高崎の三人が、同志の人選を爲ることになつた。時は、嘉永二年の十一月初旬、樹々の梢は紅葉して、暖國とはいひ乍らも、流石に朝夕は、肌寒く感ずるの頃であつた。

（重豪の夫人を、將軍家齊の娘として、既刊の南洲傳に、取扱つて居たのは、重大な誤謬であつた。高崎五郎右衛門は、高崎正風の父である。鐵道大臣になつた山之内一次の父が、山之内作次郎の事で、大久保次右衛門の伴が市藏、後の利通である。隆盛の父吉兵衛は、用達と唱へて、一門重職の家に出入し、家事の手傳を仕て居たのであるが、殊に赤山靱負とは、最も親善しく仕て居て、此事件にも、暗に關係は仕て居たのであつた。）

四

藩の一門格に、日置家といふのがあつた。日置郡の日置郷に於て、八千七百五十四石の大身であつたが、當時の主



人は、赤山親負と稱して、城代家老、島津和泉の次男で、赤山家を襲いだのである。物頭役を勤めて、近藤とは、殊に親しく交つて居たから、此事件に就ても、近藤を、表面に立て、自分は、近藤の背後から、力を添へて居たのであつた。近藤は、主として事件の運びをつけて、同志の執る可き、大體の方針を定める役廻りて、赤山は、その同志の結束を、内部から堅くしてゆくことに、専ら努めて居たのである。

近藤邸の會合は、殆んど夜を徹しての密議であつた。『大殿様の御思召にも多少の氣遣はれる點はあるが、大切な御家督御相續については、御親戚方の手前もあれば、つまりは落付く可き所へ、落付くものと思ふゆゑ、その心配は御座らぬが、茲に見通し難き曲事が御座る。若殿様の御公達様が、引つゞいて御他界遊ばされたる件につき、容易ならぬ事を、耳にいたして居る。例の華倉御茶屋の調伏を以て、先づ御公達様を亡ひ奉り、やがては若殿様の御身に及ぼさう、との儀で御座るが、苟も譜代の家臣たる我等は、此際に於て、身を抛ち御奉公申すは、固より當然の儀で御座れば、之れより奸臣共に、陸詰の談判を開き、尙ほ心を改めざる上は、片ツ端より斬捨てるの外は御座るまい。これほどの大事を、今日まで等閑に致して置いたのは、我等の錯誤で御座れば、御一同に於せられても、充分の御覺悟を願度い』

と、高崎は、熱烈な覺悟を現はして、語氣鋭く、斯う言ふて、先づ同志の發言を待つのであつた。

此時に、島津壹岐は、膝を進めて、『高崎氏が忠節の心から、堅い覺悟の御意見には、深く敬意を表する次第であるが、さればとて、家臣が、君命を待たずして、私の争ひは、却つて君公への恐れもあり、謂は理を以て非に陥るの道理も御座れば、我等は、先づ總代を以て、君公に拜調を願ひ、赤誠の存する所を上言し、死を以て、御諫め申上げたならば、賢明に渡らせらるゝ君公は、必ず我等の進言を、御用ひ相成るものと信ずる。華倉御茶屋の調伏に就ては、一層の探查を遂げ、退ツ引ならぬ證據を抑へて後、別に執る可き道も御座らうから、斯かる場合には、一段の工夫と沈着が、肝要で御座る』

と、いひ終つて、ちつと一座を見渡した。

江戸家老をも勤むるほどの人は、流石に思慮もあつて、一同は、壹岐の説に感服した。高崎も、強ては争はず、議は終に決して、御目見得以上のものは、明朝打揃ふて、登城に及び、先づ君公へ進言する、といふことになつた。

併し、高崎は、此拜調の結果が、何うも不安に思はれてならなかつた。この上は、自ら進んで、犠牲となるの外はない。將曹一派の奸臣等と、君前に於て、曲直を争ひ、若し意見の行はれぬ時は、彼等を一刀の下に斬捨て、君家の不安を救はねばならぬ、と、獨りひそかに覺悟したが、赤山親負丈には、この秘密を打明けて置く必要がある、と考へて、心血を灑いで、覺悟の一書を認め、用人の北川彦兵衛を使者として、翌朝はやく、赤山邸へ走らせる事にした。

然るに、彦兵衛は、未明に起きて、その密書を携へ、赤山邸へ、急いでゆく途中、圖らずも持病の癩氣で、眼が眩むほどになり、足も運べぬほどに、惱みを覺えたが、大切な主命と思つて、苦痛を堪へ乍ら、這ふやうにして、赤山の玄關先へ辿りついたが、意外にもそれは、赤山の屋敷でなく、二階堂靜馬の邸であつた。

玄關先に倒れて、状態を差出すと、靜馬の用人が出て来て、之れを受取り、奥へはいつた跡は、全く夢現の如く、胸を抑へて、その儘、半死の状態に、陥つてしまつた。

五

誰れか知らぬが、親切に介抱して呉れたので、漸く我れに返へり、眼を開いて、四邊を見廻した彦兵衛が、『ヤツ、失敗つた』

と、思はず叫んで、起上つた時、正面に立つて、ニヤリと笑つて、彦兵衛を見下して居るのが、靜馬の用人で、豫て見知越の木内といふものであつた。



「北川さん、痛みは去りましたかな」

「何共申譯けがない。持病に責められて、思はず打倒れ、後は不覺の爲體で、意外の御厄介になりました」

「病氣の時は、誰れにしても同じ事で御座る」

「主命にて使ひの途中ゆゑ、今日は、これにて御免蒙ります」

「悠々休んで行かれては、どうで御座る」

「胸の苦痛も去りましたれば、これにて御無禮いたします」

文箱を持つて彦兵衛は、靜馬の邸を出ると、ほつと息を吐いた。

「意外もない失策を致した。大切な御用を抱へて、如何に病の爲めとは申し乍ら、奸黨の玄關に倒れるとは、何といふ不覺か、面目もない次第である」

と、正直一途の男丈けに、ひどく恐縮し乍ら、聽て赤山の邸へ來た。用人の案内に伴れて、客間へ通つたが、少時して赤山が出て來た。

「早朝から、態々の使者、御苦勞であつた」

「ハツ、秘密の御書面で御座います」

彦兵衛の差出した、文箱を披いて見ると、その中には、何もなかつた。

「ヤツ……」

赤山が、思はず叫んだ。

「箱は空ぢや」

彦兵衛は、思はず膝を進めて、

「空で御座いますか」

「如何にも、この通りぢや」

赤山が、文箱の内を見せると、彦兵衛は、悲痛な顔色になつて、考へ込んだ。

赤山は、膝を進めて、

「文箱の内は空ぢやが、これには何か仔細があらう」

「ハツ」

「その仔細は、何うぢや」

赤山に、はげしく問ひ詰められて、彦兵衛は、愈々窮した。

「黙まつて居ては判らぬ。事情に由つては、相談にも乗るが、先づ仔細語れ」

彦兵衛も、今は包み得ず、失策の次第を物語つた。之れを聞くと、赤山が、眉をひそめた。

「それで仔細は、よく判つた。武士に似合はぬ、靜馬の舉動は、この儘まに捨置き難いが、如何に不時の病氣とはいひ乍ら、仇敵にも比す可き、靜馬の手に、大切な密書を渡したことは、重々の失策ぢや」

彦兵衛は、只管恐縮の外なく、顔色を變へて、深く考へ込んで居るばかりだ。

六

用人の彦兵衛を使者として、赤山邸へ走らせた跡、高崎は、伴の佐太郎を呼んで、死後の事を、それとなく申渡すのであつた。

佐太郎の歳は、未だ十四歳になつたばかりで、若し町家の子供なら、竹馬や犬の噛合せに、日を送る悪戯さかりであるが、流石に、武家の子供は、幼少の時から、教へが違ふので、存外に大人らしい所があつた。佐太郎の晩年は、明治大帝の御側近く勤め、御歌所の長として、世に知られし正風が、即ち其人であつた。



「何か、御用で御座りますか」  
「此處へお出でなさい」

「ハイ」

黒木綿の紋付に、小倉の袴を着けて、佐太郎は、父の前に坐つた。父は、佐太郎の姿を、見詰て居たが、何となく胸の迫まるを覚えて、しばらくは詞もなかつた。

「お前は、幾歳になつたか」

佐太郎には、父の間が、よく解らなかつた。

父が、子供の歳を尋ねるのは、どういふ理由か、其心を知り得なかつたのである。再度の間に、佐太郎は答へた。

「十四歳になりました」

「ふうむ、十四歳になつたか」

「ハイ」

「男の十四歳は、もう大人と同じぢや。殊に武士の家に生れた身は、忠義といふことを、心得て居らねばならぬ」

すべてが突然である。佐太郎には、ます／＼解らない。

「武士の道を、心得て居るか」

「知つて居ります」

「左様か、武士の道を、心得て居る、と申すか」

「ハイ」

「然らば尋ねるが、武士道とは、どういふ事か」

「武士道とは、切腹をする事でありませう」

「何ツ、切腹致すのを、武士道と申すか」

「忠義の爲めに、切腹すること御座います」

「左様か」

高崎の眼には、熱い涙が、滲み出た。

僅に十四歳の少年でさへ、斯うした心を持つて居るか、と思つたら、堪まらなくなつて、涙を抑へ得なかつたのである。而かも、それが自分の伴である、といふのでは、涙の出るのが、當然であつた。

父は、襟を正し、詞を改めた。

「君父の仇は、俱に天を戴かず、とある。君家に、患害を爲すものは、その仇敵と同一ことぢや。之を爰除て、君家を、泰山の安寧に置くは、即ち我等の天職ぢや。この父は、君家の爲に、何時斃れるか判らぬが、お前も、武門に生育つた身ぢやから、忠義の二字を忘れて、家名を辱めるやうな、舉動を致しては相成らぬぞ」

豫て、佐太郎は、君家の爲めに、父が苦心して居ることは、熱く知つて居たが、斯く迄に事情が、切迫して居やうとは、更に思はなかつた。此の一言を聞いて、父の死が、もう一刻の後に、迫つて居るやうにも思はれたので、佐太郎の眼には、抑へ切れぬほど、涙が湧いて來た。

「何が悲しい。今まで健氣なことを、言ふて居たではないか、何を女々しく泣くか、腰拔がツ」

父に一喝されて、佐太郎は涙を拭いた。

「泣いては居りませぬ」

「涙が出て居るではないか」

「泣いては居りませぬ」

「泣いては居りませぬ」

「泣いては居りませぬ」

「泣いては居りませぬ」

「泣いては居りませぬ」

齒を噛みしめて、ちつと堪へた、其いぢらしい姿を見ては、父も堪まらなくなつたので、今度は父が、悲しくなつ



て来た。

折柄、障子の外へ来たものがある。

「誰れぢや」

「赤山様が、お見えになりました」

「何ッ、赤山氏が見えたか」

「ハイ」

「此處へ、お通し申せ」

「ハッ」

取次は立つてゆく。佐太郎も、續いて座敷を出た。

所へ、赤山親負は、案内されて来た。

七

彦兵衛は、自分の不覺から、大切な密書を、静馬の爲に奪られたことを、ひどく恥ぢて、今にも切腹しさうな態度であるから、赤山は、いろ／＼に諭して、兎に角、高崎の前へ、伴れて来たのであつた。

赤山から、その不始末を、くはしく物語るうちも、彦兵衛は、次の室に居て、最期の覺悟は極めて居たが、一應は高崎へ託言をいふてから、と、身を慎んで、しづかに控へて居たのである。

「密書を奪られた次第は、先づ左様いふ筋道で御座るが、さて此上は、何と致したのか、御高見のほどを承はり度く、また、彦兵衛の失策は、まことに重大な事ではあるが、これとても今に至つては、いかともいたし難く存するが、おゆるし下さるまいか」

彦兵衛の失策は、今に至つて之を咎むるも、詮のないことではあるが、返す／＼も不都合なるは、静馬の振舞であつた。他の病苦に乘じて、文箱を開き、書面を奪ふとは、眞の武士にあるまじき卑怯の行爲であるが、さればといふて、今更に談判つた所で、直ぐ温順に、書面を返す筈はなく、此儘ま諦らめる外はない、が、此に一つ困つたことは書中の秘密である。明白には書いてないが、事件の關係者が見れば、想像の出来る事であるから、従つて反對のものが見れば、直ぐに警戒を爲るのは、固より當然の事であるのみならず、之を證據として、御前へ、持出すに違ひない。萬一にも左様なれば、理非を問はず、嚴譴に處せられるのは、知れた事である。いづれにもせよ、面倒な事になつて来た、赤山も高崎も、殆んど思案に盡きてしまつた。

彦兵衛は、自分の部屋へ退つて、獨り思案に沈んで居る。

「今から談判に行つた所で、そんな事は知らぬ、と言はれてしまへば、それ迄のことだ。いくら争つても、畢竟は水掛論になる。親負様の口調では、よほど大切な御書面に違ひない。何な御用事が解らないが、平然から交際の悪い彼の静馬のことだから、何うせ碌なことにはなるまい。御主人の御氣象は、彼の通り烈しい方だし、これはとんだ事になつてしまつた」

と、正直一途の彦兵衛は、どう考へて見ても、自分の不覺から起つたことであるから、御主人へ對する詫は、死を以てする外はないと、深く決心してしまつた。

覺悟の臍を堅めて、愈々切腹と決めたが、平生は、繰言の多い、決斷の鈍い男でも、武家に勤めるものは、流石に豪い所もあつた。

赤山と高崎は、近藤邸へ行かう、として、兩人ひとしく立ち上つた時、はげしい足音と共に、廊下の障子を開いたものがあつた。

「申し上げます」



「これツ、静かに致せ、何事ぢや」  
「彦兵衛殿が、腹を切りました」  
「彦兵衛が、切腹いたしたと申すか」

「ハイ」

二人は、之れを聞いて、すぐに彦兵衛の部屋へ来た。彦兵衛は、血に染んで、俯伏に倒れて居るから、引起して見ると、未だ呼吸は通ふて居るが、この重創では、手當の見込みがない。

赤山は、彦兵衛を抱起して、

「よく覺悟を致した、これで武士の面目は立つたぞ」

高崎も、彦兵衛の手を、堅く握つた。

「其方の仇は、必ず取つて遣はすから、安心いたして、往生を遂げてくれ」  
悲痛な一言を聞くと、彦兵衛は、しづかに首を垂れた。

嘉永二年の騒動には觸れなかつたが、其迄には可成り策動した調所の人物を、序でに紹介して置かう。

相續事件のみに就て視れば、奸物らしく思はれるが、決して左様ばかりではなかつた。其識見や力量の點からいへば、兩派を通じて、第一の人物であつた。島津家が、重豪以來、華美な大名生活を事として、國防のことから貿易に迄手を出して、現代の熟語で謂へば、積極主義を採つて、さかんに藩の金を費消つた爲に、齊興の代になつて、財政の窮乏甚しく、參觀交代を怠る事さへあつて、眞に雄藩なるの面目を、維持しかねる如き、窮狀に陥つた時、調所は、自ら進んで、改革の衝に當り、苦心慘澹、數年の後には、五百萬兩の負債を處分し了り、さしにも危かつた、藩の財政を恢復し、先代からの兵制改革も、無事に成遂げた、といふほどに、偉い功績は擧げたが、佐幕の意見を堅

く取つて居た爲めに、齊彬を嫌つて、普之進を迎へよう、としたのであるから、一概に奸臣とのみは言へぬ。お家騒動の場合に、よく出て来る、不忠の武士とは、勿論同一には見られなかつた。

却説、赤山、高崎の二人は、近藤を訪ねて、彦兵衛の一件を物語り、其善後策に就て、近藤の意見を尋ねるのであつた。

「意外の事を承り、驚入る外はないが、既に左様相成つたる上は、何よりも敵の機先を制して、其不意を討つの外に、良策は御座るまい。御互が打揃ふて登城いたし、臨時の拜謁を願ふて、邦丸様の御相續を哀訴し、若し御採用相成らずば、その時こそ、死を以て強諫申上げる事に致したならば、賢明なる大殿様には、必ず御開容れ下さるに相違ない。左様に相成れば好黨共は立遅れとなり、我等の勝利ぢや。邦丸様御相續の儀相濟めば、現世に希望は御座らぬから、假し好黨共の讒言に由つて、罪を得るも、決して怨みでは御座らぬ。何事を差指いても、先づ登城を致すのが、第一で御座らう。御兩所に於ても御同意とあらば、直に御前へ罷り出よう、と存するが、御意見は、如何で御座る」

近藤は、不時の登城を主張して、敵の機先を制せんとするのであつた。町奉行でも勤むるものは、何處にか卓出した所があつて、此場合に、少しの狼狽もなく、流石に、機敏な處置を執らう、と爲る。

三人は打揃ふて、齊興の御前へ出た。三人揃ふて、不時の登城は、何事の起りしかと、齊興も、不審に思ひ乍ら、拜謁を許した。三人は、交々膝を進めて、先づ天下の形勢を説き、江戸表の現状、外夷渡來の事情、朝廷と幕府の反目、延いては諸侯の向背、この際に於ける、島津家の態度が、一般へ及ぼす、影響の大なる事を論じて、一日も速かに、邦丸様御相續の當然にして、焦眉の急なる所以を、諄々として申述べたが、至誠ほど怖ろしいものはなかつた。自我の念に強く、剛愎にして容易に他の説を容れぬ、齊興ではあつたが、稍や耳を傾けて、熟と聞容れるやうであるから、猶進んで、口を開かうとする所へ、





「ハツ……申上げます」

御側役が、

「何事ツ」

「將曹殿、不時の拜謁願ひ出でてまして御座ります」

三人は、思はず顔を見合せた。

「許す、これへ通せ」

「ハツ」

さア此場の結局は、何んとなるであらうか。

八

齊興を、説きつけるつもりであつた三士は、將曹の登城と聞いて、少しく氣色を變へた。此場合に、將曹の登城は、必ず此事について、何か申し上げるのであらうが、彦兵衛の一條から、靜馬と、相談の上の登城とすれば、殊に、自分等の爲に、不利であるのはいふ迄もなく、今迄に進言したことにも、悪い影響を有つのであるから、これには、三士も頗る弱つたが、如何ともすることが出来なかつた。

斯うした事情のあることを、齊興は、少しも知らぬから、

「將曹の登城は、極めて好都合ぢや。同人の意見も聞いて見よう」

「ハツ」

「其方等の申出た事については、一應考へる事にいたす。老る歳の江戸詰は、苦勞にも思ふのぢや」

平素の窺察さはなく、今日は、齊興も、存外に打解けて、その詞にも、温味があつて、三士も、大に心を安んじた

のであるが、將曹の登城で、すつかり弱つてしまつた。

將曹は、靜馬から送つてよこした、高崎の密書を読んで、心中少からず驚いたのである。何よりも先づ、自分等の一身が、危くなることである丈に、その狼狽は一と通りでなかつた。靜馬は、却々の横着者であるから、事態が、斯ういふ風に、險惡になつて來ても、容易に表面へ立つことは仕ないで、將曹を煽りつけて、近藤の一派に、思ふさま痛撃を加へてやらう、と考へたのだ。高崎等の決心の容易ならぬも解つたが、事態の善惡よりは、寧ろ自分等の身に關する事であるから、取敢へず將曹は、先づ登城して、靜馬は後から來ることにした。案内を受けて、將曹は、御前へ出て見れば、近藤、高崎、赤山の三人が居て、何事か申上げて居るから、將曹の顔色は變つた。

「おう、將曹か」

「不時の登城にも拘はらず、拜謁の儀御許し下されまして、謹んで御禮申上げます」

「而て、不時の出仕は、何事か」

「恐れ乍ら、御人拂ひの儀を……」

「秘密の儀か」

「ハツ」

「其方の出仕は、何よりの好機と思ふ。軋負初め三人の申分を、念の爲めに聽かすが、後目相續のことぢや」

將曹の眼は異様に光つた。齊興は、更に詞を續けようとした。それを將曹が、

「恐れ乍ら……」

と、いつて、齊興の語を、先づ遮つた。三人の膝は進んで、將曹を、ちつと睨みつけた。

「恐れ乍ら、その儀に就きまして、異變の御座ります」

「ふふむ、異變のあると申すか」



『容易ならぬ異變の御座りまして……………』

『如何なる次第か、申せ』

『御人拂ひの儀を……………』

『左様か』

齊興の一と聲で、左右のものは皆な退席した。残念ながら三人も、御遠慮申す外なかつた。

三人が御前を立つて、次室へ下つた時、静馬が出仕した。その後姿を、チラリと見た三人は、頗る不快を感じたが、如何とも致方なく、それ／＼控室へ下つた。

待つこと少時にして、再び御前へ召された。

『靱負ツ：其方は、不埒なツ、隆左も五郎右衛も、許し難い奴ぢや』

先づ大喝を加へたが、未だ口をムグ／＼やつて居るのは、よほどの怒りであるらしい。靱負は、恐る／＼面を上げた。

『拙者に於きましては、更に不埒の事共、心得ませぬ』

『黙れツ』

『ハツ』

『家臣共が、余の命を待たず、また藩法にも據らずして、私の制敗は、豫ての禁制である。言を跡目相續に假りて、余を欺く不敵の奴共、退れツ』

近藤は、思はず膝を進めた。

『御詞に停りまするは、恐れ入りますが、讒者の言にのみ、信を置かせられて……………』

『黙れツ』

『身も、家も、打ち棄てましたる、我々三名、恐れ乍ら其の……………』

『黙れツ、聴かぬ。靱負等を引立てい』

斯う言ひ出したら、何としても背ぬのが、齊興の性質である。止むなく三人は立ち上つた。將曹と静馬は、微笑を洩らし乍ら、悄然として退つてゆく三人の姿を見送つて居た。

謹慎の命が下ると、番の侍が附添ひ、三人は、別れ／＼に邸へ歸つた。

靱負は一室に籠つて、獨り思案に耽つて居た。折柄、面會を願ひ出たのが、隆盛の父、西郷吉兵衛であつた。

吉兵衛は、靱負の前へ出て、叮嚀に頭を下げた。

『おう、吉兵衛殿か』

『御前の御首尾は、如何で御座りましたか』

『まことに残念乍ら、散々の不首尾であつた』

『御前が、不首尾とは、いかなる次第で御座りますか』

『將曹等に裏を掻かれてのう』

『二階堂様も、一つで御座りませう』

『それは、勿論の儀ぢや。密書の一條が表沙汰となつては、事頗る面倒であるから、近藤殿を誘ふて、齊興に拜謁をいたしましたのぢや』

『成るほど……………』

『まづ、それ迄は巧く運んだのぢやが……………』

と、語つて、靱負は、太い呼吸を吐いた。

『而て、御相續の一條は、何と相成りました』



「不時の登城も、畢竟は、それが爲めであつた。また、高崎氏が焦慮つたのも、それが爲めであつたが、其苦心も、皆な水の泡になつたのぢや」

「意外千萬……」

「大殿様の御心も、稍や動き始めて、まづ之れならばと、思ふた所へ、將曹と静馬が、拜謁を願ひ出たのぢや」

「好事魔多しとの諺通りで御座いましたか」

「我等は、忽ち御前を遠ざけられ、二度目の拜謁には、大殿様の御立腹はげしうして、何事も御聞容れなきのみならず、密書の一條に就ても一言の辯疏さへ御許しなく、我等は、謹慎申付くるとの御沙汰をうけて、御前を退つたのぢや」

靱負の眼には、涙が滲んで居る。吉兵衛も、唯だ太い息を吐くばかりであつた。

「この上は、何となされます」

「切腹の外あるまい」

「御最期の御覚悟で御座いますか」

「切腹申付る、との御沙汰であらう」

「お情けない事になりましたな」

「此場合に有村氏の居らざることが、一段の遺憾ぢや」

「……」

「我等は、既に覺悟を致したが、將曹といへ亦其一味といへ、いづれも智慧深き人達ゆゑ、之れを機會に、今後も、種々の策を設けて、我等の一味を、支離滅裂の非運に陥し入れるであらう。従つて、跡目御相續も、どう成行くか、それを思へば、若殿様の御身の上、氣遣はれてならぬ」

「その御心勞は然ることながら、猶ほ再應の御考慮願ひ上げます。差掛つての用事も御座りますれば、拙者は、一時引取りまする」

「歸る、と云はれるか」

「ハイ」

「明日でもよいが、吉之助を、御遣はし下され」

「件めを……」

「些と話して置き度いことがある」

「承知 仕りました」

吉之助とは、後ちの隆盛である。吉兵衛の伴で、未だ一個の青年に過ぎなかつたが、赤山は、深く吉之助を愛して、其將來に、大きい望みをかけて居たのだ。

九

南朝の忠臣、菊池武光七世の孫、武盛といふ人が、薩摩國に移り住んでから、西郷の姓を冒し、それから幾歲月を経て、元祿年間に至り、初めて島津家に事へた。それは、九兵衛といふ人であつたが、更に九代を経ての當主が、吉兵衛隆盛であつた。

吉兵衛は、清廉勤直の人で、身分からいへば、勘定方小頭に過ぎず、極めて卑い者ではあつたが、重役の信用が厚く、御用頼といふ名義で、重役の家事向に關係し、その生計に迄立入つて、世話役を托されることがあり、重役の間には、相當信用されて居たのである。

殊に、赤山靱負とは、最も親しく仕て居たので、赤山家の内事は、吉兵衛が、多く取り扱つて居た。さうした關係



に、吉兵衛の父、善兵衛の代から、引續いて居たのであるから、靱負が、吉兵衛に對する信頼は、普通の御用頼みとしてばかりでなく、殆んど親友にも、ひとしい程度のものであつた。靱負の出所進退についても、時に或は、相談を受けて居たのだ。

吉兵衛には多くの子供があつた、妻を満佐子といふて、椎原權兵衛の娘であるが、川村純義の伯母に當るので、川村と吉之助の間は、特別の關係であつた。男四人女三人といふ子持で、長子が吉之助、次子は吉次郎と謂ふた。この人は、戌辰の歳に、越後口の戦ひで、討死を仕て了つたが、却々の人物であつた。三男が慎吾、即ち後年の從道である。四男は、明治十年の戦役に討死した小兵衛といふ人であつた。長女の琴子は、市來六兵衛の妻になり、次女の鷹子は、三原傳左衛門に嫁し、三女の安子は、大山助八の妻になつた。此人は、元帥になつた殿の兄で、後には、埼玉縣參事になつて、明治九年に死んだ。吉之助は、幼い時から、薄ぼんやりして居た。少給徴祿の家にしては、子供が多過ぎて、生活の悩みは、並一と通りでなく、それが爲に、いくたびか同列から、輕蔑をうける事もあつたが、吉之助は、よく堪へ忍んだ。十三歳の時、聖堂通學の歸途に、學友と衝突して、決闘を致したことがあつた。其時に、右の臂を斬られて、眞ッ直ぐに延びなくなつた。その代り、此事があつて以來、今迄のやうに輕蔑されなくなつて、同列の青年は、やうやく吉之助を畏れるやうになつた。

(既刊の南洲傳に、安子を、大山誠之助の妻としたは、全く誤りであつた)

此事件の起つた、嘉永二年に、吉之助は、十八歳であつた。其頃から、郷黨の間に、重く見られて來たが、門閥の出身でなく、家祿も、極めて少ない所から、藩士の間では、可成り侮られて居た。室に薩藩ばかりではなく、何處の藩にもあつたことだが、同じ藩中の武士であり乍ら、門地門閥に由つて、取扱ひに區別があつたり、役柄に因つて、輕重の差別がついたり、それは随分に、五月蠅ものであつた。それが爲めに、上士下士の間に、ひどい反感があつて、何かの行違ひから、争鬭を醸して、血の雨を降らしたことは、決して珍らしくはなかつた。

廿一代の藩主、吉貴の代までは、門地や家格に、際立ちし區別を設けずにあつたのを、吉貴が、新たに藩制をつくり、その區別を設けたのであつた。

城下士、一門、門閥、一所持、寄合、小番、新小番、小姓組、與力、外城下士、陪臣の十一種に分つた。西郷家は、そのうちの小姓組に、屬して居たのである。

鹿兒島城下の藩士は、城山を中心として、その周圍に住んで居た。東北の方に住んで居るのを、上武士と稱へ、西南の方に住んで居るものを、下武士と謂つた。城下士といふのは、特別の白切符扱で、却々幅を利かしたのであつた。父の吉兵衛から聞いて、吉之助は、赤山邸へやつて來た。

『吉之助で御座ります』

『おう、好く見えたのう』

靱負は、何時も、吉之助の顔を見ると、機嫌が良かった。

『父から、話を聞いたか』

『否、未だ何事も聞いて居りませぬ』

『聞かれぬと』

『ハイ』

然らば、話す事にいたすが、例の御相續一條ぢや。我等の苦心も、今は甲斐のないことになつた。これからは、御身達の働き時ぢや。我等は、現世の生命も永くはあるまいから、御身達の覺悟一つで、我等の赤心を、受繼いで欲しい。山田、近藤、高崎、大久保、いづれも同じ運命ぢや。御身は、未だ十八歳の弱冠ながら、我等が、ふかく信ずる所あつて、御身に後事を托すのぢや。大久保の子息市藏、御身の爲めには、好き對手ぢや。高崎の佐太郎、有村の俊齋、何れも成人の後には、一應の武士ともならう。我等の亡き後は、ふかく心して、若殿様を、御守護申



すこと、必ず忘れては相成らぬぞ』  
吉之助は、疊に兩手をついて、遺言にひとしき訓戒を、謹んで聞いて居る。靱負が、腸を絞つて、血の滲むやうな依囑には、吉之助も、涙を以て、受入れる外なかつた、吉之助が公生涯の首途は、斯かる悲劇の中から、起つて來たのである。

一〇

自分の歳が、耳順を、越えて居るにも不拘、世子に、家督を譲らぬ、といふほどに、強情な齊興であるから、將曹と靜馬の訴へを聞いて、その怒りは非常であつた。  
高崎の密書には、極めて不穩な事が認めてあつた。將曹や靜馬は勿論、お由良の方も、併せて斃す、といふ意味の事が、判然書いてあつたから、殊に怒りのはげしかつたのは、無理もない事である。  
たとへ、彼等に、如何なる曲事があらうと、先づ齊興に訴へてからでなければ、家臣の身分として妄りに手を下さう、としたのは、齊興の權威を犯すことにもなるので、拮据の強い人としては、怒るのが當然であつた。  
また、將曹と靜馬が、私に争はずして、之を訴へて、その指揮を仰いだは、まことに神妙の至りである、といつて、ひどく賞めたほどであるから、それだけに、赤山等を憎んだのは、一層はげしかつたのである。  
赤山等は、密事が漏れて、齊興の怒りに觸れたのであるから、此上は致方なし、として、更に悪怯た振舞は爲す、しづかに御沙汰を待つ、といふ態度に出たのは、薩摩武士の龜鑑とされた丈、さすがに偉い所があつた。

町奉行格で、鐵砲奉行を勤めて居たのが、山田市郎右衛門であつた。正義派中では、近藤と相並んで、最もすぐれた人物であつた。若州小濱の浪人、矢部若十郎が、人を斬つて、國元を立退き、京都へ、運れて來たのを、不圖した

縁で、之を庇護し、藩邸の内に、匿まつて置いた。

數年の後、若十郎の件が、尋ね當て、親子の名乗りをする事になり、それも引受けて、世話をしてやつたが、その件といふのが、例の梅田雲濱であつた。

島津家の祖先を木像にして、高野山へ、預けて置いたのを取戻さうとしたら、どうしても、坊主が、渡さうとしなかつた。果は、木像を隠してしまつて、島津家の掛合を斥けて、大金にしようとした。山田は變装して、高野山へ乗込み、非常手段に訴へて、終に取戻した、といふ事もあつて、島津家では、相當に重きをなした人だが、その顛末は、別巻の大久保傳中に、くはしく記してある。

相續事件は、存外に至難しくなつて、陰謀同様の罪を以て、正義派は苛盡される、といふ噂さが、終に眞實になりかけた。覺悟のよい人は、死後の準備をするやうになつた。山田は腹の出來て居る人であるから、事件の成行を見越して、はやくも前途の事に、智慧を絞つた。

自分等は、齊興の嚴譴をうけて、打揃ふて切腹はしても、相續の事さへ、正當に行はれたら、それで死甲斐もあり、満足も出來るのであるから、今に至つては、死後の策を、講じて置くのが、最も大切な事である、と考へて、いろいろと思案の末、同志の一人、藤井良節を呼びにやつた。

藤井は、事理を解して、辯舌に巧みな人であつた。讀書の嗜みも深くして、能く謀り、能く辯ずる、といふ風の人であつたから、山田は、平生から目をつけて居たのだ。

夜は、既に更けて、道往く人の足も絶えた。五千の民家に、燈火の光も消えて、恰て死の町にもひとしく、宵からの曇り空に、雲の幕は、低く垂れて、今にも雨になりさうな、陰鬱の夜半であつた。闇中に、巨人の蹲居るが如きものは、音に名高き櫻島である。その頂上から、吹き降す風は颯々として、寒威は、一層骨に沁みるのであつた。暖國でこそあるが、極月に入つては、寒さも感ずる。屋敷町の淋しいことは、何處の城下も、みな同じ事であるが、夜が



更けると、氣味の悪いほど、寂として居る。

山田の奥座敷には、藤井が来て、密談も進んだらしい。

「御承知下さるか」

「……………」

山田に問はれて、良節は、何となく悄然れた。

「偏に御同意を願ひたい」

「折角の御頼み故、承知はいたしたが、返すくも、此際に踪跡を暗ますことは、世の譏を免れまい、と思へば、それのみが残念で御座る」

「道路の風説は、たとへ何うあらうと、足下の忠節は、同志にも、能く知られて居るゆゑ、誰一人として、足下の心事を疑ふものがあるまい。我等は、明日にも切腹の御沙汰を受けて、現世を逝る身で御座る。足下の働きに依つて、黒田侯の御助言ともなれば、さぞ奸臣等も驚く事と御座らう。従つて、御相續の儀も、黒田侯の御力一つで、我等の望み通りにも相成らう。さすれば、足下の活動で、若殿様の御運も開ける道理ぢや。我等は、草葉の陰より、事の成就を、御祈り申さう」

「それ迄の御心を承はる上は、繰言がましいことは申しませぬ。今宵の闇夜を僥倖に、御城下を、脱け出す事にいたしましたせう」

「左様願ひ度い」

「首尾よく黒田侯に、拜謁の叶ひなば、その時こそは、生命に代へても、御願ひ致す覚悟で御座るが、拙者も、やがて追付申すほどに、三途の川原で、御待受け下さい」

「死んで忠義を立てる場合も御座れば、生きて忠義の機会も御座る。死ぬるばかりが忠義で御座らぬ。何事も、深く

一刻もはやく、筑前へ遁れて、黒田長薄侯に内見して、藩の内情を打明け、この紛訌の終局を、綺麗に仕上げよう

「委細、承知いたしました」

「御思慮の上に、願ひ度い」

「一刻もはやく、筑前へ遁れて、黒田長薄侯に内見して、藩の内情を打明け、この紛訌の終局を、綺麗に仕上げよう

といふのが、二人の相談であつた。その密使が、藤井の役目で、山田はそれが爲めに、藤井を説きつけたのであつた。

黒田長薄は、島津家から養子に行つた御方で、齊彬の叔父に當るのであつた。併し、藤井が、福岡に着く時分には、

山田、赤山、高崎、大久保、近藤を始め、所謂正義派の人々は、枕を並べて死ぬのであるが、その忠死が、長薄の心を動かすことにもなるのだ。齊興も、長薄には、一目も二目もゆづられて居るから、何うか斯うか、始末は決くに極つて居るが、それにしても、藤井の役目は、却々にむづかしいのである。

藤井は、山田に別れて、戸外へ出た。びゅーと吹きつける夜風は骨も徹すばかりで、雨雲は屋根を壓するまでに、

低く垂れて居る。四顧は眞ッ闇で、鼻を掴まれるのも知れぬ位であつた。その闇い中を、藤井の背後から尾けて来るものがある。それは、反對派からの間者だ。藤井は、急ぎ足になつてゆく。右側に、大きな松樹がある。その陰へ

密と潜んだ。間者は、闇を透し乍ら、尾いて来た。藤井は、其奴を、遣り過して置いて、氣合と共に抜打に斬つた。

きやツと叫んで倒れたが、起き上らうとするのを、又た一刀斬りつけると、それで呼吸は絶えたらしい。藤井は、血

刀を拭ふて、鞘に収めると、其儘行方を眩まして了つた。

一一

それから、十数日の後、齊興は、大英断を以つて、この事件の裁きを決けた。時に、嘉永二年極月六日の事である。正義派の重立ちたるものは、何れも重刑に處せられたが、一時は、城下の内外、この噂さてさわがしいほどであつた。併し、それも一時のことと、却て處分せられた本人は、存外に靜かであつた。切腹を命ぜられたのは、近藤隆左衛門、



山田市郎右衛門、高崎五郎右衛門、土持代助、村田平内左衛門、國分猪十郎の六人、吉井七之丞、松元市左衛門、山之内作次郎、脇岡五郎太の四人は、自宅幽閉を申付けられた。赤山靱負、野村喜八郎、村野傳之丞は、謹慎に處せられた。その他、飛火に火傷したものも多くあつたが、重く處分せられたものは、先づ之れ丈であつた。事件は、頗る大きいやうであるが、要するに、正當の嫡子へ、家督相續させよう、としての運動が、斯かる騒ぎになつたのである。

一般の批評は、處刑が、餘りに苛酷過ぎる、といふのであつたが、齊興の考へにすれば、私に黨を作り、派を結んで、藩法を待たず、主命も受けずして、我意を以て、事を起さんとしたのは、不埒千萬である。殊に、我愛臣たる將曹その他を、妄りに殺さんと爲しこと、併せて之を以て、我れを脅やかさんと、爲し事は、陰謀にも均しきの所爲であるから、將來の取締上、止むを得ず、嚴罰に處する、といふのであつた。此騒動を、俗に近藤崩れ、と稱したのである。

糺明奉行の有村仁右衛門は、思慮の深い、勤直な武士であつた。事件の處分が、斯う極まつた當時は、藩命に由つて、地方を巡廻して居たが、交通の不便な土地へ、深入して居たので、鹿兒島へ歸るのが、非常に後れて、事件の結果が、斯ることになつたとは知らず、近藤の一行に、嚴命の下つた當日、やうやく城下へ着いたのであつた。

この人の伴に、俊齋といふのがあつて、歳からいへば一少年に過ぎなかつたが、流石に親の血を受けて、却々氣性の勝つた、藩中でも評判の青年であつた。明治戊辰の歳には、官軍參謀の一人として、江戸城受授の際にも、立會つた海江田武次のことである。月照上人が、薩摩落ちの砌りは、先乘を仕て、奔走の勞を採つたのも、即ち此人であつた。同胞に、治左衛門兼清といふ、剛の者も居た。櫻田見附の變に、井伊大老の首級を擧げて、辰の口に、立腹を切つたことは、誰れも知つて居るであらう。もう一人の同胞が、矢張り櫻田事件で、切腹した雄助である。俊齋は、仁右衛門の歸邸と聞いて、出先から歸つて來た。

「御歸りて御座いましたか」

「今立歸つた」

「父上ツ……一大事で御座りますぞ」

「近藤一列のことか」

「ハイ」

「如何相成つた」

俊齋は、御沙汰の一條を、詳しく物語つた。仁右衛門は、太息を吐いて、

「君命とあつては、致方もないが、老臣共の無頓着には、驚き入る」

「父上、何とか良策は御座りませぬか」

「良策としては、別にあるまい」

しばらく思索して居たが、やがて身支度を改めて、島津將曹の邸へやつて來た。

將曹は、後日に豊後となる人で、之れも普通の武士ではなかつた。慥かに凡を抜いた所はあつたが、佐幕の道に、ふみ迷つた爲めに、今日に至る迄も、奸黨の首領として、悪人の如く、見られて居るのは、まことに残念な次第である。佐幕派の人、必ずしも悪人ばかりではないが、勤王の名が、餘りに美しい故に、佐幕派のものは、いづれも悪い人である、といふことになつて居るのだ。

「御客で御座りまする」

「誰れか」

「有村仁右衛門殿で御座りまする」

自分の好かぬ有村が、訪ねて來たのだが、今更ら留守とも云へなかつた。



『これへ通せ』  
間もなく有村は、這入つて来た。

『しばらくして御座つた』

何日になく、將曹の挨拶は、やさしかつた。

『御用先、存外に手間取つて、自然御疎音に、打過ぎました』

『それにしても、未だ御歸りには、相成らぬやう承知したしたが、急用でも起りましたかな』

『別に、これと申して、急用も御座らぬが、這度の事變に就て、取り敢へず、一先づ立ち歸つて御座る』

此一言を聞いて、將曹は、頗る面白からず思つた。有村は、眼を光らせて、將曹の顔を見詰めて居た。家の外は、木枯の音が、冬の寂寞を破つて、頻りに吹荒んで居る。

『這度の事變は、君家の一大事と存ずる。他藩への聞えも、甚だ宜しくない。唯だ君命に従ふのみが、忠義では御座らぬ。拙者も、糺明奉行を勤むる以上、一應は御下問の有る可き儀と心得るが、これ程の大事に何等の御沙汰もなく、事皆不意に起つて不意に決定なさるといふは、如何なる次第で御座るか。斯かることを、幾度か繰返へされるやうでは、君家の一大事と存じ申すが、御考慮のほど承り度く存ずる』

藩中第一の權勢家たる、島津將曹の前で、これほどに論じ詰るものは、洗石に、有村なればこそである。將曹も、餘り酷く遣られたので、少しく氣色ばんだ。

『このたびの事は、殿様御隨意の御處分て御座れば、何とも致方は御座らぬ』

『それは御思召違ひかと存ずる。假令殿様御隨意の御處分とは申乍ら、苟も國老の職にあらせらるゝ、貴下等の知らぬといふ筈はない。這度の御處分を受けた人々は、いづれも忠義無二の家臣ばかりで、いざといふ折柄には、一方を受持つ可き、大切の者で御座る。若し御家の利益を思はゞ、何故進んで、直諫申上げなかつたか』

『まづ、お控へなさい』  
『黙らツしやい。控へるとは何事か、拙者を、何と心得る』  
『國老、將曹殿と心得て居る』  
有村も、負けて居ない。

談判は、終に紛れて、互ひに皮肉の比べ合つて、物分れとなつて了つた。有村は、邸へ歸つて来て、伴の俊齋を呼んで、何事か申付けよう、とした所へ、殿様から御沙汰が下つた。その御沙汰に依れば、謹慎申付ける、といふのであつた。

『しばらく、お待ちなさい』  
將曹は、有村を制して、

『足下の御言に依れば、我等が、私の怨を以て、讒言を構へたやうにも、聞き取れるが、それは以ての外で御座る』  
有村は、その詞を遮つた。

『まづ、お控へなさい』  
『黙らツしやい。控へるとは何事か、拙者を、何と心得る』  
『國老、將曹殿と心得て居る』  
有村も、負けて居ない。

談判は、終に紛れて、互ひに皮肉の比べ合つて、物分れとなつて了つた。有村は、邸へ歸つて来て、伴の俊齋を呼んで、何事か申付けよう、とした所へ、殿様から御沙汰が下つた。その御沙汰に依れば、謹慎申付ける、といふのであつた。

一一一

正義派の人々は、將曹や靜馬に對して、非常の反感を有つて居たから、従つて彼等も、殿様の御前へ出れば、種々と讒言を爲るには違ひない、とは思つて居たが、假りにそれがあつても、殿様の御心は、決して動かされるものではないとも考へて居たのだ。

然るに、この期待は、全く裏切られて、殿様は、彼等の讒言を信じて、正義派のものに對しては、驚く可き殿罰を科せられたので、その失望と怨恨は、實に非常なものであつた。

去乍、當時の武士は、さうした事情から、殿様を咄ふやうな心にはなり得なかつた。すべては將曹や靜馬等の悪い



爲に、斯く相成つたものと考へて、死後の怨みも、彼等の上に残つたのである。

處分の御沙汰はいよ／＼實行されることになつた。即ち切腹を申付られるものには、豫め前晩に於て、其旨を傳へられ、検視の役人も、それ／＼割振りがついたのである。此事は、疾くも藩中へ知れ渡つたから、正義派の人々は、其御處置には従はねばならぬ。俗論派の人々は、豈夫に祝盃も擧げられず、表面は極めて靜肅に仕て居るが、心中には、自分等の勝利を、祝福して居たに違ひない。事變に關係せぬ人でも、心あるものは眉をひそめて、嘆聲を漏らすものはあつた。城下の町人等は、絶えて批評がましいことは憤みて、何一言いふものはなかつたが、いづれも正義派の人々には深く同情して、商賣さへ休んだものがあり、どこの町も寂として、恰も大喪にても、會ふたるかの如く、屋敷町にいたつては、尙更のことであつた。城内に於ても、切腹の模様を、検視の役人から報告して來る當日のこと、何處となく沈んで見える光景は、まことに悲痛の感があつた。

有村の邸では、仁右衛門が、今、伴の俊齋を呼んで、何事か申付ける所であつた。

『御用で御座いますか』

『今日は、愈よ近藤の一行が、切腹をいたす日ぢや』

『貴様、これより父に代つて、彼の人々を歴訪いたし、最期の有様、それとなく見届け參れ』

『エツ、私參りまするか』

『うむ……而て萬一にも遺言あらば、聞き取つて參るのぢや』

『ハイ、委細心得ました』

『今日の儀は、何とも申上げやうもない次第ぢやが、仁右衛門の存命上は、必ず御志は受けつき申す、君家のことは、御心配なさるゝな、と、斯く申すのぢや。よいか』  
と、いつて、ちつと前に在る、見臺の書物に、眼を落した。

この詞は、實に悲痛であつたが、父は、斯うした場合にも、書見を怠らずに居るのだ。俊齋は、それを視て、頗る不審に堪へなかつた。

『父上、御書見て御座いますか』

『うむ』

『この場合にも……』

『左様ぢや』

『へー』

仁右衛門は、膝を向け直した。

『山田氏を始め、いづれも忠義の銘々ぢやに依つて、最期の状も、さぞ御立派な事であらう。お前も、よく其容子を視て、他日の心得に致せ』

『ハツ』

『はやく、行け』

『ハイ』

父の前を辭した俊齋は、先づ第一に、高崎の邸へやつて來たが、その時は、すでに遅れて、五郎右衛門は、切腹した後であつた。次に山田の邸へ駆けつけた。幸ひに未だ、そんな様子もなく、邸内は、寂として居た。取次を以て、面會を申入ると、やがて案内をされて、奥へ通つた。山田は、今日の晝、午の刻までに切腹、といふことが決つて居るのに、一向平氣で、見臺に向つて讀書に耽つて居るのであつた。

『叔父さま』

山田家と血縁はないが、自分からすれば長者であるから、常に斯ういふて居たのだ。



「おう、俊齋どのか、……よく見えられたのう」  
 「御沙汰は、未だて御座りまするか」  
 「御沙汰とは、何ぢや」  
 山田の平然たる態度を視て、俊齋は、ますく不思議に思った。  
 「腹切れとの御沙汰は、未だて御座りまするか」  
 「その御沙汰は、疾くにうけて居る」  
 「検視の役人は、参りませぬか」  
 「もう、やがて来るであらう」  
 「書物を、讀んで居られますな」  
 「チト、不審の事あつて、調べて居る所ぢや」  
 「既に時刻も、近づいて居りませうに、調べた事が、何になりますか」  
 「死ぬ事と、調べる事と、それは別ぢやよ」  
 「今にも腹切る身で、何の甲斐が御座りますか」  
 「死ぬ迄は、君公に捧げた身ぢや。三寸呼吸絶ゆる間際までも、御奉公は、致して居る筈ぢや」  
 「成程な」  
 俊齋は、感にうたれて跡の詞が出なかつた。昔の武士には、よく斯うした事があつたものだ。  
 所へ、検視の役人が、やつて来たので、俊齋は、父の言を傳へた。市郎右衛門は、非常に喜んだ。  
 「仁右衛門殿に、拙者は、安心して死ぬ、と、傳へて呉れ」  
 「ハッ」

市郎右衛門は、遂に切腹して、忠臣の名を残した。  
 その他のものも、皆な御沙汰通り、處分されてしまつた。殊に高崎家では、五郎右衛門の切腹は、止むを得ぬ事として、その子佐太郎までが、未だ十二歳の少年であり乍ら、流刑を申渡された。佐太郎は、後年の正風であつた。  
 山田の最期が、立派であつた通りに、其他のものも、皆な潔よく切腹した。高崎の罪が、可憐の少年に迄、及んだ通りに、大久保次右衛門の伴市藏も、父の罪を引いて、自邸に禁錮されることになつた。猶ほ甚しきは、既に現世に亡き人である、二階堂主計の墓碑を撤拂ひ、族籍を削ぐ等のこともあつた。苟も勤王正義の一派は、少しでも關係があれば、片ツ端より處分されて、その死屍にさへ、鞭を加ふるの惨刑を行つた。嘉永三年を迎へて、彌生の三月になると、先きに、謹慎を命ぜられた、赤山靱負、中村嘉右衛門、吉井七之丞、野村喜八郎の四人に對して、更に嚴重の御沙汰が下る、といふ風説が起つた。それかあらぬか、赤山等へ對して、哀訴を促がすものがあつたが、赤山等は、一切之れを擯けて、君命の再び下るを、待つて居た。  
 果然、風説は眞であつた。四日の夕刻になつて、赤山へ、切腹の命が下つた。山内作次郎、脇岡五郎太、松元市左衛門、村野傳之丞、和田仁十郎、名越左源太、吉井七郎右衛門、山口及右衛門、島津清太夫、新納彌太右衛門、近藤七郎右衛門、大久保次右衛門、高木市助等は、悉く遠島申付けられた。この追處分は、餘りに苛酷とあつて、非難の蔭口は、大分はげしくなつて来たが、要するに、齊興に對する、評判が良くなかつたといふ丈の事で、敢て強諫するものもなく、それ／＼處分されて仕舞つた。國老の島津壹岐は、職を褫かれて、剃髮隱居を命ずる、との御沙汰を蒙り、憤慨して終に自殺した。仙波小太郎も、壹岐の同類だ、といふので、後れ走せ乍ら、切腹を命ぜられた。相續事件の騒ぎも、是れて全く終決して、將曹等の俗論派は、非常な勢力を有つて、藩政の實權は、此派の掌裡に歸して仕舞つた。



吉之助は、其騒動の際も、赤山家に入入して、親負の教訓を聞いて居た。君家の行末を思ひ、また親負の身の上を頻りに氣遣ふて、弓矢入幡を、心に念じ乍ら、赤山の無事を祈つて居た。

長州藩に、玉木文之進が居て、吉田松陰や、乃木希典のやうな、稀世の人物を、少年時代から教へ導いて居た通り、何處の藩にもそれに類した人物が居て、よく後進の爲めに、教へを布いて居たものだ。歴史の上には、更に名も顯はれず、只だ隠れたる先輩として、人物の養成に努めて居たのは、實に敬服す可き偉人であり、且豪士である。

藩藩にも、一人の豪士が在つた。多くの少年を、教育して居た。殊に、西郷、大久保の兩人に對して、恰も親子の如き關係を有つて、實に能く教へ導いた。その人は、即ち有馬一郎といふ豪士であつた。有馬は、和漢の書に通じ、古今の治亂を究め、而も、武邊の心得があり、身は、城外の一閑地に退隱し、進んで交り求めず、退いて天下の大勢に心を注げ、ひそかに後進子弟を勵まして、大に爲す所あらん、とするの傑物であつた。吉之助は、平生に此人に從いて、武士としての教育を、授けられて居たのであるが、昨年来の騒動に就ては、いくたびか、有馬を訪ねて、自分等の執る可き手段、一青年として處す可きの道も、よく聞いて居たのだ。有馬は、そのたび毎に、前年起つた、秩父崩れの経緯を語つては、吉之助を、よく戒めたのであつた。

(秩父崩れの事は、大久保傳中に併述してある)

大久保の父は、既に流罪といふことになつて、一家の悲嘆は、改めていふ迄もないが、それは敢て表面に現はさず、その態度は、どこまでも強く、君家の爲めには、水火の苦みも、敢て辭する所でない。たとへ自分は、島へ送られても、伴の市藏も居るから、二代の忠義に、事は缺かぬ、といつて、治右衛門は、逢ふ人毎に、威張つても見せるし、また市藏も、父の心を汲んで、同じやうな事は、いふて居るが、母の涙を見たり、幼ない弟や妹の前途を思ふて、

市藏の胸には、何ともいへぬ寂しさを感じるのであつた。

市藏の爲に、唯一の相談對手は、仲好の吉之助であつた。何かと指導をうける先輩としては、有馬先生が居たのである。

大久保家の寂しさに比べると、西郷家には、いくぶんの明るさはあつた。吉之助の父は、事件に直接の關係はなく、赤山の愛顧をうけて、同家へ、親しく出入して居る、といふ丈の事で、市藏の父の如く、騒動渦中の人ではなかつた。

それ丈けに、西郷家のものは、氣も安く、心に緩みもあつた譯だが、併し、赤山の身に、萬一の事があれば、西郷家にも、その響きは、強く來るのであるから、それについての心配は、吉兵衛にも、また吉之助にも、不斷に有つたのである。

治右衛門は、既に島へ遣られて、高崎や山田は、腹を切つてしまつた。其他の人々も、それづくに處分されてゆく。それを見て居る、吉之助の憤慨は、歳の若い丈けに、血の熱するほどであつた。市藏は、父を失ふて、泣き悲しむ、母と弟妹の間に挟まれて、人の知り得ぬ、苦しみをして居るのであつた。

未だ幾人かは、追罰を免れぬものとして、そのうちには、赤山も居るものと思はれるので、吉之助の心配は、殆んど其ればかりに、囚はれて居たのである。

甲突川の東岸、通稱を、加治屋町といふて、侍小路の軒並に、市藏と吉之助は、兄弟の如くして、育つて來たのであるが、吉之助は、二つ歳上の兄であつた。

『吉つあん』と呼び『市どん』と呼ばれて、互に心をうち明けて、親しく交つて居た丈けに、時には生活の窮苦も、語り合ふて、助けつ援けられつた事もあつた。

騒動の一段落と共に、城下の隅々までが、恰て火の消えた跡のやうに、ひっそりとして物寂しく感ぜられるので



あつた。

殊に、加治屋町は、城下の中心を離れて、平生から寂しい所であつたが、この頃の寂しさは、また一しほであつた。日の暮合に、市藏が、吉之助を訪ねたので、兩人は、連れ立って、甲突川の岸を、ぶらりくと、歩きはじめた。何をどうといふ的のあるでもなく、只だ何となく、歩いて居るのであつたが、市藏は、不圖足を停めた。

「吉つアん」

と、不意に呼びかけられて、吉之助は、市藏の方へ振向いた。

「市どん、何かい」

「寂しいのう」

「此處は、何時も寂しい所ぢやよ」

「併し、この頃の寂しさは、また格別ぢやな」

「この頃では、御城下の真中でも、寂しいやうぢや」

「どういふもんかのう」

「お家騒動があつて、多くの忠臣が、那アいふ事になつたので、城下の人々は、男女の別なく、忠臣の心を汲取つて、同情して居るから、どうしても沈み勝ちになるぢやよ」

「それにしても、大殿様の御心が、俺どんには、よく解らんが、おは、それをどう考へるか」

「オイ、市どん、そりや悪いぞ」

「何がツ……」

「俺どん等は、島津家の臣ぢや。大殿様の噂さは、止さうぢやないか」

「……」

騒動の張本は、將曹どんぢや、その背後にはお由良の方一味が、居られるのぢや。俺どん等の怨みは、その人達にこそ在るが、大殿様には、何の怨みも御座らんぞ。俺どんは、左様思ふて居るが、おは、どう思ふか」

流石に、吉之助は、よく分別して居た。

市藏も、この一言には、何と返へす詞も出なかつた。

しばらくして、市藏は、また話しかけた。

「島へ送られた父は、今頃どうして御座るかな」

これには、吉之助も、はつきり答へやうがなかつた。市藏の悄然たる態を視ては、ともに闇然たらざるを得なかつた。

「俺どんは、どう考へても、口惜しいのぢや」

「無理はない」

「家へ歸ると、母が泣いて居られる。幼ない弟や妹が、ともに寂しがつて、泣き居るのぢや。俺どんは、どこへ行つても、寂しい事ばかりぢやが、それに比べると、あんたは、樂くして居られるから、幸福ぢやな」

「何故か」

「父も、母も、弟妹も、みな無事で居られる」

「オイ、おは、何をいふか」

吉之助の詞には、少しく怒氣を含んで居た。

「何を怒りなさるか」

「怒りやせぬ」

「しかし、怒つて居られるぢやないか」



『怒りやせぬが、不快ぢやよ』

『どうしてか』

『父母や弟妹は、いくら無事でも、大恩人の赤山様は、明日を圖得ぬ身ぢや。その上に、多くの忠臣は、節に殉じて居るのぢやから、心に寂しさを感じることは、おはんも、俺どんも、更に異ふところはない筈ぢや』

『こりや、俺どんが悪う御座つた。どうか恕して下さい』

『怒すも、怒さぬもないが、おはんばかりが、苦しんで居るのではないといふことが、解りさへすればよいのぢや』

市藏は、それで口を閉ぢた。

兩人は、黙つて歩き出した。全く人通りの絶えた、川沿ひの通りを、力無げに歩いて居るのだ。

『オイ、吉つアん』

『何か』

『俺どんは、仇を討ちたいが、おはんは、どう思ひなさる』

『仇討ちを爲る』

『うむ』

『何の仇を討つのか』

『先立たれた忠臣と、島へ送られた父の仇を、討ちたく思ふのぢや』

『討つて、どうなるか』

『それで、若殿様の御相續も、定まるであらう』

『うむ』

『忠臣の方々も、地下に眠れやう。跡に残つた人々の身も、安全にならうと思ふが、あんたは、どう考へるか』

『そりや可からう』

『可い、と思ふか』

『可い』

『仇を討てば、生命は無いのぢやが、跡の事は引受けて下さるか』

『跡の事は引受けぬが、仇討ちの腕賃を仕やう』

『多ツ、腕賃を爲る。といはれるのか』

『あんた一人では、ナカ／＼むづかしい。俺どんも、腕を貸さう』

『それならば、頼む』

『跡の事は、また世話する人も、御座らう』

川岸の捨石に、腰を下ろして、ひそ／＼話をはじめた。

やがて、兩人は、しづかに立上つた。

『これから、有馬先生を訪ねやうではないか』

と、吉之助が、いひ出した。

『何か用事でも御座つてか』

『イヤ、この事を打明けて、先生の御許をうけたいのぢや』

『先生には、打明けるのが當然ぢやな』

『平生の御指導に對して、此事文書を秘密にいたす事は、どうしても出来ぬ』

『御尤もぢや』

『すぐ行かうか』



『よからう』  
そこで、兩人は、城下外れに住んで居る有馬先生を、訪ねる爲に、その草庵へ向つた。

一四

鹿兒島へ行けば、誰の眼にも、先づ櫻島が映る。鹿兒島の美観は、櫻島を以て、第一位と爲る。芙蓉峰に酷肖た姿の島が悠然と横はつて居る状は、只だ觀たばかりで、氣も晴々として浮世の苦を忘れるほどだ。今でも薄曇りと、紫の煙を吐いて居るが、時々又大に噴火することもあつて、その薄紫の煙が、立騰るのを見た時、一種の快感を與へる。更に加治屋町へ歩を移せば、西郷隆盛誕生の地といふのがあつて、少し離れると、太久保利通誕生の地がある。雙方にも、誕生記念の碑が建てあるが、同じ町内から、斯かる偉人が、同時に、二人までも出たといふことは、まさに薩人の誇りであつて、天下の奇蹟ともいふ可きである。これから先き、五十年か百年も経て、此處に妙な祠のやうなものでも建て、賽銭を投させるやうになつたら、それこそ折角の偉人も、無趣味な俗物になつて仕舞ふが、今のところは、何等の裝飾もなく、空地の中央に、たつた一つの碑があるばかりであるから、實に奥ゆかしい氣が起る。淨光明寺へ行つて見ると、大きな銅像の如きものを置いて、それに上屋をかけてあるが、餘計な事を仕たものだ。那れを見た時、何だか厭な氣がして、偉人に對する、崇敬の念が薄くなつた。却つて何の裝飾もない、誕生記念の碑を見た時の方が、よほど有難く思はれた。

維新前後に於ける、二人の活動は、まさに、維新の歴史の大部分で、それ以上に、何の裝飾の必要はない筈である。櫻島と此碑と、是れが、鹿兒島に於ける、無限の寶物として、永久の誇であらう。

有馬は、秩父崩れの騒動に連坐して、罪を得てからは、全く仕へを辭して、城外の草深い所へ、居を卜し、殆ど

隠者の如き、生活をして居たが、それでも、青年子弟の爲めには、よく教を布き、指導を怠らなかつたのである。無妻の身として、生涯を通した有馬には、一人の門弟があつて、よく忠實に働き、恰も下僕の如くなつて居たのである。

今日は、その下僕も居らぬやうだ。二人は、柴の扉を開いて、遠慮なくはいつて來た。先生は、嬉しさうな顔を仕

て、兩人のはいつて來るのを、見て居るのであつた。

『疎濶で御座りました』

『うむ』

『御異状も御座りませぬか』

『うむ、已は、別に異状はないが、事變の其後は、如何ぢや』

『その事で御座ります』

市藏は、先づ口を開いた。

『何ういふことか』

『俺どんの父も、愈々島へ送られました』

『左様か』

『俺どんも、禁錮になるのぢやさうな』

『貴君までが』

『高崎の佐太郎どんよりは、未だ輕う御座る』

『輕重の別はあつても、罪は罪ぢや』

『先生ッ』



「何ぢや」

「口惜うて堪へられんから、仇を討つ覚悟いたしました」

「ふーむ、仇討ちたいといふのか」

「はッ」

「吉之助、どういたすのか」

「俺、口惜う御座る。俺、この家の軽輩で御座るに由つて、この度の事變には、何等の關係も御座りませぬが、併し、赤山製負様、追つて腹切るに違ひない、といふ噂も御座る。赤山様は、俺、この大恩人で御座るから、はやく奸黨の首領を斃して、赤山様を救ひたう、思ふので御座る」

市藏は、父の爲に、吉之助は、恩人の爲めに、先づ仇を斃して、一つは、怨を報じ、一つは恩人を救はうといふものであつた。

有馬は、兩人の覺悟を聞いて、しきりに賞揚したが、友人から送つてよこした、といふ燒酎を出して、ともに飲み始めた。

「先生、おゆるし下さいますか」

「何を……」

「只今、申上げた事を……」

「ははア、それは本統の事か」

「えッ」

「俺、世間話のやうに、聞いて居たのぢやが、本統なら不可んよ」

「仇討つことは、悪う御座りますか」

「うむ、悪い」

「父の怨を報ゐるのが、悪う御座るか」

市藏の、呼吸は、激しくなつて居た。

吉之助も、膝を進めた。

「恩人を救ふことは、不義で御座りますか」

「まア、左様急かすと、熟く考へて見るが可い」

兩人は、黙まつて俯伏した。不平の色は、まざ／＼と顔に現はれた。

「このたびの御處分は、みな君命ぢや。君命に復讐は、臣たるの道に背く、と思はぬか」

「君命は、讒言に依つたので御座ります。従つて其讒者を……」

「それが、悪いといふのぢや」

「何故で御座ります」

「讒言に迷ふほどに、大殿様は、不明の御方か、但しは暗愚と申すか」

「やッ、それは……」

「さ、其處ぢや。假し罪は受けても、忠臣は忠臣ぢや。君寵に誇つて、一時の花は咲かせても、枯葉の末が、思はれる。君家の御爲と、身を犠牲にしたものが、御處分受けたのは、所謂その所に、死した迄の事ぢや。それに何の不思議があらう。赤山、同じことぢや。救ふの助くるのと、そりや常人のことにはあるが、武士にはないことぢや」

意外な先生の説に、頗る不服ではあるが、辯駁するほどの名論も出て來なかつた。先生は、頻りに兩人の容子を、見て居たが、



「貴君等、今の時勢を、何と思ふか」  
この質問には、兩人ともに即答の出来やう筈はなかつた。  
先生は立上つて、傍らの書棚から、一枚の繪圖を取出した。それを壁にかけて、熟と見つめて居る。兩人も見ながら、よく解らなかつた。

「何うぢや、これが解るか」

地圖には違ひないが、五色の繪具を以て、染め分けてあつて、所々に横文字が記されてある。世界の地圖とは思ふが、視るのは初めてだ。

「世界の地圖で、御座りまするか」

市藏の答を聞いて、先生は、吉之助に向つて、

「おはんは、何と思ふか」

「世界の地圖と思ひます」

先生は、幅掛の細い竹を探つて、地圖を指した。

「世界の國は、之れ丈けあるのぢや。我が日本は何處に在るか、それが解るか」

兩人は、膝を進めて、眼を睜つた。

日本は、どこに在るか、東西の見當が、定かぬ位であるから、はつきりどれと解る筈はない。

「有るか無いか、殆んど分らぬ位ぢや」

先生は、呟くが如く、叱するが如く、斯う言ふて、バタ／＼と、地圖の上を軽く叩いた。兩人は、終に黙して、先生の顔を見詰めた。

「世界の地圖を視れば、有るか無いか分らんほどに、小さい日本國。その中の更に小さい薩摩ぢや。日本は、足下等

に見ゆるぢやらうが、薩摩は見えない。鹿兒島は、尙ほ見えない。諺に謂ふ、蝸牛角上の争ひとは、何事か解るか、今度の事が、則ちそれぢや。何れの藩も、皆之れに類した事を仕て居る。そのうちに米利堅を初め、世界の赤髯共が、追々やつて来るのぢや。その米利堅といふ國は、即ち之れぢや」

兩人は、先生の指す方を見た。

「それ、此處ぢや。此處から斯う航つて來居るのぢや。恰ておはん等が、櫻島へ行くのと同じやうにして、日本へやつて來るのぢや。之れを何とする覺悟か。日本は、幕府の日本ではない。若し幕府の外交が一步を誤れば、日本は何うなるか。さても恐ろしい事ではないか。その恐ろしい暴風が、押て來る時に、眠つて居るものもあるのぢや。いや、眠つて居るのは、未だ宜いが、兄弟喧嘩を仕て居る、馬鹿者もあるが、おはん等は、それを知つて居るか」

未だ二十歳に足らぬ青年、血氣は方さに旺んだが、苟も經國の大策なぞといふ、そんな偉大ことが、解る筈はなかつた。

「幕府は、三百年の泰平に馴れて、今や文弱の弊が、骨に迄沁み込んで居る。この幕府に、之れを任せてあるのぢやから、思へば、日本の前途は危いものぢや。おはん等の力で、之れを拯はずして、誰れか又た之れを拯ふものがあるか。おはん等ばかりとはいはぬ。藩中の青年は、同じ死ぬなら、大きく死ぬ事を考へろ。少なくとも此小さい日本國を、もつと大きくして、世界の眞中へ、乗出す事を考へたら、どうぢや。一人や二人の生命を奪つて、自分も死ぬといふのは、愚の骨頂ぢや」

有馬は、快辯縦横の人であつた。その容姿には、豪放磊落のところがあつて、よく人を魅するの力を有つて居た。

殊に稜々たる奇骨は、自ら其談論の上に現はれて居る。九州の片隅に居て、はやく既に、此意見を有つて居たといふのは、どう考へても、普通の代物でない。



市藏も吉之助も、此に初めて夢が覺めた。自分は、現に、鹿兒島に居るが、その實は、日本に居るのであつた。その日本國は、今や世界の上に立つて居るのだ。藩臣互ひに相侵して、やれ復讐だとか、それ仕返しだとか、小さな争いで日を送つて居たのは、愚の至りである、といふ事が、やうやく解つた。有馬先生の言はれる通り、今は世界を對手の喧嘩をする時である。今迄の思慮を變る時が來た、と氣がついて見れば、今日相談に來たことが、何となく面目悪くなつた。

一五

藤井良節は、山田に説き付けられて、鹿兒島を出奔した。國境の關所も、うまく胡麻化して、追手の難を遁れ、はやくも、筑前へ、はいつてしまつた。先づ福岡の城下へ着くと、種々に手續を仕て、黒田家の重臣に縫り、長瀨侯に拜謁する事を得た。詳細に、國元の事情を述べて、其救護を求めた。長瀨侯も、島津家は、自分の生家でもあり、近頃の内訌については、ひそかに心配して居たのであるが、藤井から聞いて、意外の大事になつて居ることを、始めて知つたので、先づ藤井を、重臣の屋敷へ預けて、密に使を、鹿兒島へ送り、「公儀の聞えもあれば、穩便に處置を執り、事の外間へ漏れぬやうに」と申送つた。

然るに、其時は既に、近藤一列の處分が濟んだ後であつたから、折角の注意も、水の泡であつた。此上は、徐に事の成行を、視て居る外なく、藤井は、當分のうち保護を加へて、藩へ留める事にした。

齊興は、藤井の事を聞いて、大に怒り、黒田家へ、嚴重に引渡の掛合をしたが、黒田家では、それに應じないので、齊興は、ますく怒つて、弓矢に訴へても、取戻して見せる、といひ送つたので、黒田家の方でも、弓矢にかけても引渡さぬ、といつて頑張り、しばらくは脱合の姿で、日を送つた。

長瀨は、思慮の深い人であつたから、表面には、平氣を粧つて居たが、心には、此事をのみ考へて居た。萬一にも

幕府から干渉されるやうな事があれば、嚴しい處分をうけるかも知れぬので、それのないうちに、事件の結局をつける必要がある。左様するには、第一に相續の事を、はやく定める外はない、と思つて、ひそかに其機會を窺つて居たのである。

その歳の秋、長瀨は、參觀交代で、江戸へ出る事になつた。長の道中に、別段の話もなく、江戸の邸へ着いた。期日の登城は怠りなく、よく勤めて、將軍の御機嫌も、殊更らに良かった。宇和島の伊達宗城と、盛岡の南部利剛には、最も親密に交はつて居た。其頃の閣老、阿部伊勢守は、一個の傑物であつた。安藤對馬守の如き、すぐれた手腕は、持つて居なかつたが、不得要領のうちに要領があつて、生れつきの美貌は、大奥の評判も良く、閣老としては一番に長く、その地位を保つた人である。

島津齊彬とは、殊に親しく交つて、何時迄も齊彬が、部屋住の若殿で居られるのに對しては、深い同情を有つて居たのであるが、長瀨は、その關係を、よく知つて居たので、長瀨は、先づ伊達南部の兩侯を説いてそれから、伊勢守にこつそり吹き込むと、伊勢守も、島津家の内訌は、耳にして居たので、長瀨の依頼を引受ける事になつた。

齊興が、其歳の暮に出府した。嘉永四年の春正月、齊興は、迎春の嘉儀を申述べる爲めに、登營して、將軍に拜謁した。下城の際に賜物があつて、齊興は、上首尾で藩邸へ歸つて來た。

歸邸の後、その賜物を、披いて見ると、それは、美しい朱塗の茶器であつたから、流石の齊興も、これには驚いた。凡そ武功あるものに對しては、鞍とか鎧とか、すべて武器を賜はるのが、今迄の慣例であつた。然るに、茶器を賜はるのは、隱居を促がすものであつて、微妙の一策であつた。これは、伊勢守が、將軍を動かして、斯く取扱つたものであらう。於此、齊興も、終に我慢の角を折つて、翌日は、隱居の届けを出して、同時に、邦丸の相續を申出た。齊彬は、三十歳を越えて、薩藩の主人になることを得たので、長い間の相續事件も、落着を告げて、薩日隅の三國は、齊彬が自ら處理することになつた。



有馬先生から、一夕の訓戒をうけたので、兩人は、全く、心機一轉して、仇討の事はすつかり断念めた。それから後ちも、頻りに先生を訪ふて、その指導を仰いで居たから、兩人の見識は、日を逐ふて向上するばかりであつた。西郷家の貧しいことは、前にもいふてある通りで、微祿小身の吉兵衛は、それが爲に、可成り苦勞をして居たが、殊に、子供が多く居たので、家計は、一段の貧しさを加へて、今は、城下にも住み難く、終に城外の上野園村へ、移轉するの止むなきに至つた。

尤も、相續事件の騒動が影響した事は、いふ迄もない事である。

斯うした窮苦のうち在つても、吉之助は、非常な勤勉を以て、有馬先生の許へは、通つて居たが、その上に、猶且つ福昌寺へも通つて、無參和尚に従いて、參禪は怠らなかつた。此寺は、島津家の菩提寺であるが、無參和尚は、吉井幸輔の叔父に當る人で、幸輔は、後年の友實である。吉之助が、他日、江戸や京阪の地へ乗出して、一念不動の働きを爲し得たのは、此際に於ける、修養が因になつたのである。

其頃から、吉之助は、山狩が好であつた。騒動も一段落決いたから、好きな山狩をしよう、と思つて、家を出たが、一日の骨折に酬ひる丈の獲物は、更に無く、其日は、全くの草臥儲けであつた。

すべて、山狩や魚釣なぞいふものは、其日の廻り合せがあつて、非常に起轉びのあるものだ。其道に通じた人でも、終日の勞苦を、空しうする事があり、存外に拙ない人でも、多く收穫があつて、凱歌を揚げるものもある。今日こそはと、大に氣張つて、出かけた人が、案外に不獵で、他の獵つたものを、買つて來て、自分が獵つたやうな顔をして居るものが、よく在る。

吉之助は、一日駆け廻つて、狩り暮らしたが、一疋の獲物もなかつた。夕陽が山に沈む頃、松樹の根に、腰を下し

て、疲れを憩めて居たが、不圖、正面の谷間に、大きな猪が、悠々歩いて居るのを發見したので、すぐに鐵砲を取直して、充分に狙ひを定めて、一發放つた彈丸は、猪の首を掠めて、向ふの岩角に中つた。猪は、毛を逆立て、牙を鳴らして、疾風の如く駆け出した。吉之助は、靜に構へて、二つ彈を射かけたが、今度こそ美事に、横腹を打貫いたので、流石の猪も、急所の痛手に堪らず、一たんは倒れたが、しきりに暴れ狂ふて居る。三發目の彈丸は、また中つて、猪はぐつたりとなつた。

吉之助は、谷間へ降りて來て、猪の傍へ寄つて、腰につけた繩で、四足を括り、辛ふじて引揚げた。所へ、二三人の百姓が、薪を背負て來たから、猪の一半を分けて遣る約束で、之れを擔がせた。百姓は山道に馴れて居ても、吉之助は、夜道の暗さに、足元の危ない所から、腰の燈袋を捜つて、百姓の止めるのも肯かず、道側の枯木へ火を放けて、燃え上る火を、燈火の代りにしようとしたのである。折柄吹き下す山風に、ばつと炎え上る火は、闇い道を照して、足元を明るくした。斯くて麓へ、着いた時分には、大部さかんに燃えて居たが、火は樹から樹へ、燃え移つて、大きい山火事になつた。

吉之助は、上野園村の宅へ歸つてからも、一向平氣で居た。翌朝は、有馬先生を訪ねて、自慢の猪肉を、贈物としたが、意外千萬、この松山は、御留山と稱して、禁獵の場所であつたことは、吉之助は、少しも氣付かなかつた。松山の禁獵區域へ立入つて、それに氣が付かなかつたことは、あまりに迂濶のやうではあるが、吉之助には、よく斯うした失策はあつたのである。

吉之助は、郡奉行の中原藤太夫から、出頭を命ぜられた。

『奉行所から、呼出して御座ります』  
『何事ぢやな』



「一向に覺え御座りませぬが……」

「まア、行つて來るが可い」

「行つて参りまする」

吉之助は、奉行所へ出た。奉行の中原が自ら取調べるのであつた。

「吉兵衛伴吉之助か」

「ハイ」

「去る十三日、松山へ、猪狩に参つたか」

「参りました」

「その歸途に、山林へ放火を致した、と聞き及ぶが、それは何うちや」

「夜に入りまして、道の闇きに苦み、道側の枯木に、火を放けました」

「二つの事は、ともに許し難き大罪なるが、其方は、何と心得るか」

「ハッ」

「松山の御留山なることを、知らぬ筈はあるまい、何うちや」

「恐れ入ります」

中原の詞は、峻厳をきはめた。吉之助も、此時に始めて、失策たと、思つたが、もう取返へしのつかぬ事であつた。

「この陣笠は、覺えあるか」

それは、自分の陣笠であつた。西郷の姓が、はつきり漆て書いてあるから、何としても否み得ない。訊問に對する

答辯は、少しの遲滞もなく、スラ／＼とやつて退ける、といふ風であつたから、陣笠を示されても、左迄には驚かなかつたほどであるが、只だ自分のふみ込んで行つた場所が禁獵の区域内であつた、といふことは、更に思付かなかつ

たので、中原の訊問を受けるに及んで、さては左様であつたか、と思つたに過ぎぬのであつた。今更に、これを彼是れ争ふたとして、何の詮もない事であるから、さつぱりと斷念めて、それを認めるの外はなかつた。

「その陣笠は、私の所持に相違ありませんか」

「松山の燒跡に、遺つて居つたのぢや」

「御法通りの御沙汰、謹んで相待ちまする」

「大罪を犯し乍らも、包まず申立てたる段、神妙に存するぞ」

「ハッ」

「何分の御沙汰ある迄、親共方に於て、謹慎の上相待ち居れ」

これで訊問は終つた。

自分は、潔よく覺悟して、すべての罪狀を、認めて來たが、思へば、犯せる罪の重く、父母の前に、何と申譯をい

たしてよいか、それを考へると、足も進まぬ勝ちで、悄然として家へ歸つた。

「オー、吉之助か」

「只今歸りました」

「而て、奉行所の用件は、何であつたか」

「……」

「何事であつたか」

「申譯のない失策をいたしました」

吉之助は、始終の事情を物語つた。吉兵衛は、之れを聞いて、少なからず驚いたが、事、此に至つては、何ともい

たしやうがなかつた。



「自分で起した失策は、自分で償ふ外はない。奉行所のお訊問に對して、男らしい申立をいたしたのは、父も喜ばしく思ふ。武士の心得は、左様ある可きぢや」  
父が、斷念のよい事を、いふてくれる丈け、吉之助の苦惱は深かつた。母の悲しさうにして居る、その容子を視ては、顔を伏せて、涙をかくす外なかつた。  
吉之助は、覺悟の上の事であるから、よく斷念めて居るが、胸のうちの苦痛は、口に出して言はぬほど、一しほ辛いことであつた。親しく交はつて居る、友人等は、いづれも吉之助に同情して、罪の軽く濟むやうにと、傳手を求めて、重役の方面へ、それ／＼運動もしてくれたが何しろ、御留山で獵を致した上に、火を放けた、といふのであるから、折角の盡力も甲斐がなく、大島へ流罪の申渡しを、うける事になつた。  
兩親の嘆きと、同胞の悲みは、他所の見る眼にもまことに、哀れなものであつたが、愈よ二月の初旬になつて、吉之助は、大島へ送られて仕舞つた。

島津家の騒動も、齊彬の襲封が決まつて、一段落を告げる事になつたが、吉之助の爲めには、齊彬の相續は、意外の幸福であつた。

遠く本土を離れて、汐風荒き、沖の小島に、配流の身となつた。吉之助は、西の磯といふ所へ、形ばかりの小屋を貰つて、纔に雨露を凌ぎ乍ら、空しく日を送るうちにも、島人の子供を集めて、習字や讀書の教授を始めた。子供の親達は、それを喜んで、よく吉之助の世話をするやうになつた。憂きが中にも、子供の無邪氣には、人知れぬ樂みを覺える。島司の取扱ひは、随分無情を極めたが、却つて島人の同情を得たので、吉之助も、存外に氣安く、其日を送り得るやうになつた。

風の荒びて、浪高き日、巖頭に立つて、遙に故郷の方を見れば、父母の面影が、幻しの如く、眼の前に現はれ、幼



き同胞の姿も、はつきりと浮いて見える。  
衣食に苦むことは、長い間の經驗で、少しも苦痛とは思はぬが、父母や弟妹の事を考へると、それが何よりの苦惱であつた。始めのうちは、之れを思ふて、眠れぬ夜も多くあつたが、終には自分から斷念めて、心靜かに、赦免の時機の來るを持つやうになつた。

「やア、先生様」  
島の人ば、何時か吉之助を、先生と呼ぶやうになつて居た。

「何ぢやな」

「御領主様から、御迎ひの船が、まゐりやした」

「エツ、迎ひの船がまゐつた」

「島司さまも、一途に御座らツしやるぞ」

意外、意外、俄に赦免の御沙汰とは、全體どうした事か。流石の吉之助も、心の浮き立つ思ひがした。やがて、島司の案内に、藩吏が三人やつて來た。後から島人も、群をなして従いて來た。

吉之助は、徐に藩吏を迎へた。藩吏は、嚴正に御沙汰書を、讀んで聞かせる。

「齊彬公、御家督の御祝ひとあつて、其方の罪科赦免、歸藩の儀御許、と御座ある。此儀有難く心得よ」

赦免の御沙汰書は、別に渡された。

「有難き仁慈の御沙汰、謹んで御禮申述べまする」

「この便船を以つて、同道歸藩いたす間、左様心得て可からう」

吉之助は、夢に夢見る心地であつた。いくたびか御沙汰書を、讀み返へしては、蘇生の思をした。  
住めば都の譬、僅かに一年餘りではあるが、いざ出船となつては、今更に名残りの惜まれて、慕ふ子供の顔を、見



るも涙の種であつた。島人には、厚く在島中の好意を謝して、大島を出船したのは、嘉永四年の十一月であつた。鹿兒島へ着くと、一先づ奉行所へ牽かれて、有難き君公の御沙汰を、復た繰返へされた。漸く上野園村へ歸つて来た時は、父母や弟妹は、嬉し涙に咽んで居た。追々に訪ねて来る、知人の祝言も、果は涙になつて、君恩の厚きを謝すのであつた。

『不孝の罪は、偏に御詫仕つりまする』

『お前も、無事で可かつた』

『その後、如何に御暮し遊すかと、只だ其事ばかり、思ひ出して、辛い日を送りました』

『我等には、何の異變もないが、赤山様は、終に切腹遊ばしたぞ』

『エツ』

『遺物の一品を戴いたが、これは吉之助に與へよ、とあつて、血染の肌着ぢや』

父の取出す鞆負の肌着を見れば、血に染んだ儘である。吉之助は、しつかり抱しめて、顔を掩ふた。

『赤山様は、御切腹の間際に、拙者呼んで、これを吉之助へ與へてくれ、血汐の跡も其儘に渡して、鞆負の赤心は、この肌着に在る、といふてくれ、と仰せがあつた』

『赤山様、嗚ぞ御無念で御座りましたらう。この仇は、きつと討ちまする』

只だ一枚の肌着が、吉之助に與へた、感化の力は、頗る深いものがあつた。

### ○近藤崩れと調所

齊彬が、藩主になつた時は、既に四十三歳であつた。祖父の重豪には、頗る愛されて居たが、父の齊興には、

何となく疎外されて居たらしく、而かも、調所笑左衛門が、重豪の寵臣として、非常に権勢を揮つて居た時代に、何時も、齊彬の頭を抑へるやうにして居たから、それを、相續の遅れた一因として、數へる事も出来やう。

既刊の拙著、南洲傳には、齊彬の相續に反對して、調所が、普之進を擁立する事に努め、島津將曹と共に、種

種なる劃策をして、齊彬の相續を妨げたものとし、近藤崩れの時にも、引合に出して書いてあるが、實は、その

一事は、大なる誤謬であつて、調所は、近藤崩れの前年に、此世を去つて居るのであるから、もし其死が遅れて、

近藤崩れの時に迄、生きて居たら、或は齊彬の相續に、妨げを入れたに違ひないが、近藤崩れの時には、何等の

關係もなかつたことは、はやく明白になつて居たのだが、出版書肆の不道德から、著者に訂正の機會を與へな

つたのである。

従て、本篇に於ては、調所の氏名を除く事にしたが、その代り、大久保傳の中には、調所の活躍時代を、くは

しく述べてある。

乍併、齊彬の相續が遅れた事は、調所は、全く關係しなかつたのではない。生前に於ては、重豪の寵を頼ん

で、可成り妨げをして居た事は、掩ひ難き事實である。

調所は、嘉永元年に死んで居る。近藤崩れは、翌年の事であるから、改めて斷つて置く。



初 出 府

一

齊彬は、稀世の明君であつた。我國に、大名なるものが起つて以來の人物であると、いふて激賞する人もあつたが、假に其れ迄の人物でない、としても、安政年間の諸侯の中では、一頭地を抜いて居た人物である。遅く家督を襲いて、夙く世を逝つたから、大した事も爲し得なかつたけれど、それにしても、世子で居た間が長かつたので、後世に傳ふ可き事蹟は、其間に、多く残された。

御側去らずの家臣に、伊藤才藏といふのが居た。才氣の廻つた人で、齊彬の寵愛も深く、この人の推挙に依つて、意外の拔擢に逢ふたものも、尠なからず在つた。吉之助が、大島から歸つて来て、漸々人に知られ、その將來に望みを屬する具眼の士も居たが、才藏も、そのうちの一人であつた。一日のこと、吉之助の爲人を賞揚して、大に用ふるに足る可き人物であることを、力説した事があつた。天下の大勢に着眼して、頻りに人材を求めて居られた時であるから、齊彬は、吉之助を、見たく思はれたが、吉之助は、例の相續事件で切腹した、赤山靱負と、深い關係のあつたのみならず、一たびは流罪に迄なつたのであるから、將曹を始め、自分に反對した通中が、鵜の目鷹の目で、齊彬の動靜に、深い注意を拂つて居るので、急に吉之助を近付け、それが爲に、猜忌嫉妬の眼を以て見られては、本人の身に取つても、却て有利でない、と思召されて、其儘に打過ぎたが、偶々小石川の水戸邸へ、招かれて行かれた際、斯う

いふ事が在つた。

水戸家には、藤田東湖といふ傑物が居て、烈公の御側には、常に附切りであつた。齊彬が、御客として行かれた時、烈公に従いて、其席に列なつて居たが、兩侯は、互に家臣の事について、親しく話を交されると、齊彬が、東湖を賞めて、水戸家には、良い家臣が、多く居て、まことに羨ましい、といふ事をいはれた。

其時に、東湖は、齊彬に向つて、  
『近頃、西郷吉之助殿は、御國語でありますか』

と、訊いた。

齊彬は、少し驚かれた容子で、

『吉之助を、御承知か』

と、訊ね返へした。

『未だ一青年ではあるが、却々の人物と聞いて居ります』

『ふふーむ、左様か』

話は、それで切れたが、齊彬の頭腦の中には、吉之助の名が、深く刻み込まれたのである。

東湖が、どうして斯ういふ事を、いひ出したか。それについて面白い逸話がある。東湖の許へは薩摩の士人が、よく出入して居た。そのうちに、有村俊齋が居て、常に吉之助を激賞して『薩摩第一の人物である』といふて居るのに、藩の方では、あまり重く視て居ないやうであるから、東湖が、試みに訊いて視たのだ。只だそれだけの事情であるが、齊彬には忘れられぬ家臣の一人となつたのである。

齊彬は、藩主になつた爲に、一度は國許へ行く必要があつて、いよく薩摩へ行かれた。其際に、城外まで出迎に來て居た、多くの家臣のうちに、歳は未だ若い、異相の武士が一人、眼に留まつた。才藏を呼んで、それを質ね



ると、圖らずも其者こそ、西郷吉之助である、といふ事が判つたので、せひ逢ふて視たい、と仰せ出された。其處で、才藏は、深く考へた末、吉之助を、御庭方として、採用することにした。御庭方は、奥殿近くへ、這入ることも出来るし、齊彬も御庭うちには自由に散歩もなされるから、身分卑きものにお逢ひなされるには此上なき名策であつた。

大島から歸ると、吉之助は、生れ變つたやうに、人物も出来て、流罪中に練つた心膽は、艱難爾を玉になすと、諺の通りであつた。學殖は深くないにしても、精神の修養が出来れば、檜舞臺に出る丈の基礎は、既に固つたと言つても可い。

御庭方拜命の御沙汰、それが又あまりの突然であつた。吉之助も、不審の眉を顰めたほどで、心私かに思ふやう、輕輩微祿の身としては、如何に思ふも、君公の御側近く進むことは、とても望み得ぬ事であるが、御庭方を申付かれば、何かの機會で、御前に、接近することも出来るやう。赤山殿の忠死の有様を、申上げる場合も、或は出来るであらう。突然の拜命ではあるが、意外の好都合にもならう、と、吉之助は、日々缺かさず、御庭に入り込んで、庭御盆裁の手入れを、致す事になつた。

この時代の輕輩ほど、哀れ果敢なきものはなかつた。御目見得の出来ない身分のものが、城下杯で、微行の君公に出會ふことがあると、後背向きに叩頭を爲るのだ。尻を向けて叩頭を仕ては、失禮のやうに思ふのは、今の時代のことで、その時代には、全く左様でなかつたのだから、實に可笑なものであつた。頭が見えなければ、人として認めないから、それで後背向きに、叩頭を爲るのが、當然の如くなつて居たのだ。御庭にでも居る時に、君公が、縁端近くに御出ましになると、縁下に頭を入れて、尻丈け出して居るなどは、恰て蛙のやうで、滑稽至極である。されば、幕政時代の輕輩は、君公に叩頭すら、自由に爲し得る權利がなかつた。叩頭を爲る權利といつては可笑しいが、まアそんなものではないか。

齊彬は、部屋住の時代が、頗る長かつたから、いよく當主になつた時は、藩政に對する意見は、相當に有つて居られたのみならず、當主にならぬ前から、藩制の改革に、手を出した事もあり、これが爲めに、祖父重豪の寵臣たりし調所笑左衛門に、ひどく嫌はれて、やがて自分の相續にも、大なる妨げとなつたほどである。

愈々當主となつてからは、藩制にも大改革を加へ、諸役人の更迭にも、大英斷を行つたけれど、それが爲に、藩臣の動搖を起した事はなく、極めてスラ／＼と行はれたことは、寧ろ不思議に思はれるほどであつたが、將曹始め、最初から齊彬を喜ばなかつた老臣が、不快の念を有つたことは、無論と見て可からう。

それから、幕府へ建議して、大艦製造の禁を解かせると、直に汽船の製作に着手して、出来上つたのが、大玄丸と昌平丸の二隻であつた。昌平丸の方は、幕府へ献上することにしたが、尙ほ世間を憚つて、之れを琉球船と稱し、日の丸の旗を掲げて、品川灣へ着いたのが、三十五日目であつた。これについては、阿部伊勢守も、非常の力添へをしたのであるが、當時、水戸の烈公は、この船を見て、

備へする名も高輪のいくさふね

聞きしにまさるつくりとを見る

と、いふ和歌を詠んで、齊彬へ送られた。

此一事から、幕府も、大に刺激されて、反省する所があり、海軍の設備に、注意を深くするやうになつた。和蘭のスムーピンク號と稱する船を買入れ、之れを觀光丸と名づけ、同國人のベルスレーキン大尉を雇入れて、専ら海軍の發展を謀り、長崎には、海軍傳習所を設け、矢田堀景藏や、勝麟太郎を、昌平丸に乗込ませて、實地練習を爲せたのも、それから後の事であつた。



吉之助は、御庭方になつてから、屢々奥庭へも出入するやうになり、齊彬に接近して、その寵を享けることになつた。吉之助は、その前から、藩政の改革や、天下の大勢に觸れて、しばしば建白書を、藩廳へ差出して居たから、齊彬も、その事は、既に承知して居たのであるが、果して何の程度まで、吉之助を、理解して居られたかは、よく判らない。併し、斯うして屢次、御前へ接近するやうになれば、時事に關して、いろ／＼と御下問があり、これに對して、吉之助も、遠慮なく意見を述べたから、ます／＼齊彬は、吉之助を信することにもなつたのである。齊彬の信用が厚くなつて、御寵愛も深くなると、それが藩士の間にも噂されるから、吉之助に對して、尊敬を拂ふものも多くなり、同志のものも殖えて来れば、今迄の友人が、吉之助を、長者として扱ふやうにもなつて来るから、吉之助の勢力は、それだけ加はつたことにもなるのだ。

嘉永五年の夏も過ぎて、はや秋風の吹き初むる九月の末、廿七日といふ日に、父の吉兵衛は、宿痾が重つて、終に亡き人の數に入つた。吉之助の悲嘆はいふ迄もなく、一時は喪神するほどであつた。忌引中に、母は看護の疲れて、病床の人となつた。吉之助は、父の病死に、悲嘆の涙の乾く間もなく、またもや母の病氣に、その惱みは一と通りではなかつた。一心不乱になつて、看護に努めたが、天も孝子の心を憐れみ賜はず、日に／＼重りゆくばかりで、霜降る月の廿九日、終に鬼籍の人となつた。吉之助の哀痛は一層ふかく、殊に幼ない弟や妹を抱へて、今日からは、父母の代りに、育てる役目もせねばならぬ。家計は、固より貧しい上に、二度の葬儀と、病中の費用に、多くの負債も生じ、究苦は、彌上にも重り来て、今は絶體絶命の境遇に落ちた。時には、自分の食を廢めて、弟妹に與へることもあり、吉之助の私生活に於て、此時位胸を痛めた事はあるまい。

家督相續の届けが済んで、吉之助は、西郷家の當主となつた。同時に、父の名を襲いで、しばらくは吉兵衛と稱して居たが、記述の都合上、すべて吉之助とする。齊彬は、伊藤才藏から、吉之助の不幸を聽いて、惠みの使者を送られた。不覺の涙に、目を送つて居た、吉之助も、君公の厚き情けに、氣を取直して、奮發する氣になつた。遂ふても歸らぬ亡き親の跡にのみ、従事の涙を灑んよりは、世に在す、君公の御爲に、猷身の働さを爲すのが、武士の本懐である、此に心機を一轉して、再び活動の人となる可く、堅い覺悟を定めた。

嘉永安政といふ歳は、幕末史の一轉機になつて居るが、謂ゆる徳川の太平も、既に二百年つゞいて来たのであるから、人心は、可成り倦んで居たけれど、何かの動機があつて、外面から刺激を與へなければ、矢張り依然たる舊態の儘で、未だ百年位は、うちつゞいたかも知れなかつた。外夷渡來は、その惰眠を破るに、最も強い刺激であつた。長崎を通じて来る、オランダ文化の侵入も、相當に力強いものではあつたが、それにしても、少數の知識階級に限られて、一般的には、相變らずの舊態墨守で、一向に開發されさうな風はなかつた。高野長英は、親切に教へを布いてくれたが、その主張は妄誕無稽として、斥けられた。林子平の警告は、當局者の忌諱に觸れて、終身禁獄に處せられた。けれども、外夷の渡來は、兩人のいふた通り、事實となつて顯はれたのである。

二二

亞米利加の使節ペリーが、一たび浦賀灣頭に、錨を投げ込んで、開國修交を迫つてからは、朝野騒然として、鎖港開國の二派に分れ、徳川幕府の基礎、漸く搖ぎ初めて、諸藩の向背も、甚だ不分明なつて来た。外交上の知識を當時の幕吏に向つて、彼是れいふものがあるれば、それはいふものが無理であつて、當時の幕吏は、開國貿易の要求を如何にして拒んで宜いか、その方針さへ、決し兼ねるの狀態であつた。

然るに、ペリーは去つて、翌年になると、ハルクスが、やつて来た。重ねての強請に、幕府は、開國の方針を決した。於此、攘夷の説も、又た盛んに起つた。京都に於ける、攘夷派の勢力は、實に恐る可きものであつた。幕府が、朝廷の御思召を待たずして、獨斷を以て、開國貿易を決したのは、明かに失策であつた。之れに反して、幕府に、不平の諸侯や有志が、攘夷論を、京都へ吹き込んだのは、實に策の得たものであつた。當時の朝威は、頗る衰へて居つ



だが、一二月有力の諸侯が、御受け申せば、幕府が、如何に威張つたからとて、朝威に對抗することは、容易の事ではなかつた。況して、二百年の泰平は、一般に情氣満々の状態であつた。幕府の威壓を、快く思はぬものも、大分出来て居た。其處へ氣がつかずに、幕府が、何時も同じやうな、考へて居て、この外交問題を、獨斷に決したのは、餘りに眼前の見えぬ、遺方であつた。

江戸生れの齊彬は、何といふことなく薩摩嫌ひであつたが、藩主になつて見ると、そんな事もいふて居られず、襲封すると間もなく、鹿兒島へ来て、國語の老臣と、いくぶんの親みも出来て、藩制の改革を思ひ通りに行つて、しばらくは腰を落付けて居たが、いよいよ參覲交代の時期が来たので、江戸へ上ることになつた。

時に嘉永七年正月の事で、齊彬が、薩藩の主人として、始めての出府であるから、その準備も却々大掛りであつた。

吉之助は、抜擢されて中小姓になつた。而かも、御出府の御供といふのであるから、此上もなき結構な事ではあるが、吉之助の身に取つて、また一つの苦みが起つた。父の吉兵衛が、存生の時から、家計の惱みはあつたのだが、引つゞく不仕合に、吉之助の代になつてからは、一だんの貧苦で、御供の用意も出来ず、自分が出府の後は、弟や妹が、どうして其日を送り得るか、それ等の事を考へると、喜びよりは悲みの方が多く、どうしたら可いが、自分にも思案が決かなかつた。

彼是れするうちに、出發の日が、迫つて来た。千載の一週とも言ふ可き、好機を捉へての出府に、身は、貧苦の爲めに動きが取れぬとは、何といふ情けないことだらう、と、日夜悶々として、骨も細るばかりであつた。

『若旦那様』

と、呼びかけ乍ら、障子の外に、手をついて居るのは、父の代から事へて居る、僕の權兵衛であつた。

『オー、權兵衛か、何ぢや』

『此頃の御容子が、私には懸念りてなませぬ。何事か、御心配のことでも御座りますか』

『イヤ、別に心配は無い』

『私にお隠しなさるは、水臭く存じます。何事も御遠慮なく、打明けて下さりませ』

吉之助は、黙つて居るので、權兵衛は、膝を進めた。

『御出立も間近になりました、今日此頃になつて、其準備もなさらぬやうに見えますが、如何なさる御覺悟で御座りますか』

父の代から事へて、忠實に勤めつゞけてくれた、權兵衛の心は、吉之助にも、よく解つて居るが、さればとて、今の苦勞を打明けた所で、何の甲斐もない、と思つて居たから、更に答へをしなかつたのであるが、斯ういふ風に、問ひつめられて來ると、いはずに居る事も出来なかつた。

『お前に、さういはれては、包み隠す事も出来ぬから、今は打明け話をしますが、實は斯ういふ理由ぢや。君公の御供は申付けられたが、この赤貧では、旅裝の準備も、整ひ兼ねて、獨り心を苦めて居るのぢや。今更に辭退もならず、寧ろ腹切つて死なうか、と、幾度か覺悟はしたが、幼なき弟や妹に率かされて、未練のやうぢやが死ぬこともならなかつた。この苦心は、どうぞ察してくれ』

『御苦心のほどは、御察し申上げますが、その儀ならば御心配なされますな。私の貯蓄も、多少は御座りますから、それで御支度をなされませ』

權兵衛は立上つて、自分の小屋へ行つた。

跡に、吉之助は、腕を拱んで、思案に沈んだ。權兵衛から、一時の融通はうけるとしても、それは幾何の額でもあるまい。その上の工面は、全く的がないのだ。斯うなると、却つて權兵衛の親切が、吉之助の苦痛を、増す事にもな



る。

權兵衛は、小さい風呂敷包みと、金財布を持って、出て来た。

「若旦那様、これを御覽下さりませ」

「爺よ、己は諦めた」

「エツ、何と仰しやいます」

「病氣届けを出して、御供は廢める事にしよう」

「さうおツしやらすと、さア、之れを御覽下さいませ」

吉之助は、澁々ながら財布を取上げ、紐を解いて檢めた。

「ヤツ……こりや十兩ある」

「旅装は、之れに御座ります」

と、いはれて、風呂敷包みをひらいて見ると、綿服ながら旅の衣服と、甲掛けも、脚絆も、揃へてあつた。吉之助は、

呆然に取られて、權兵衛の顔を見詰めて居た。

「慾を申しては、限りが御座りませぬ。一時の御辛抱は、之れでも出来ませう」

吉之助の眼には、感激の涙が溢れて来た。

「何にも言はぬ、之れぢや」

両手をついて、主が従に、頭を下げた。

吉之助は、準備が出来た。

忠僕權兵衛は、夜の目も合はさずに、内職から得た賃金を、幾年か積んで置いたのが、十兩といふ大金になつたのである。所が、吉之助出發の前日、正月廿二日の夜に、權兵衛は、急病に苦んで、頓死して仕舞つた。人生の果敢な

さは、實に朝露の如く、吉之助が、多年の宿望であり、且は稀世の名君に御供して、江戸へ出發する時に臨んで、斯うした涙の物語もあつた。

昔の大名の行列は、今から視れば、實に莫迦らしいものであつた。殊に、參觀交代の行列に至つては、牛の小便十八町で、そろく揃つて、幾百人の藩士が、二列縦隊をつくつて行く、その緩くりさと長さが、とても堪まつたものではなかつた。

國元から江戸まで、幾十里あらうと、また幾百里あらうと、その長短には、少しも頓着なく、緩ツくり閑と、牛の歩みで進みゆく、往來のものは、すべて兩側に土下座して、通り過ぎるのを待つのであるから、町人百姓は、その行列にぶつつかつたら、迷惑千萬でも、ちつと堪へる外はなかつた。

併し、それは、今の人情から視た、行列に對する感じてあるが、當時の人は、左迄に迷惑とは思はず、却て一種の興味を以て、行列を迎へて居たのだから、甚だ妙である。

眞つ先に立つて、飾槍を持つ奴は、藩中の腕自慢が、買つて出るほどの役廻りで、威勢のよいこと此上なしであつた。重いになると十貫以上もある、三間柄の先きには、重い飾り物が、附いて居るのだから、それを只だ擔いでゆく丈けでも、並一と通りの事ではないのに、片手に握つて、肩で支へてゆく、腰の調子と、足取り一つで、輕々と掲げて居るが、眞つ直に立てた儘、次ぎの奴へ、投げて渡すのを、巧みに受けて、進む間にも、足の運びは、少しも休んで居ないのだから、只だ豪勢なものとして、感心する外ないのだ。

「エー、ホー」と、警蹕の聲が掛かる、すぐ受けて「寄れつ、寄れ」と、嚴かな聲で受渡すが、また何ともいへぬ立派さであつた、と傳へられてある。

殿様は、呑気な顔をして、お轎の内から、四邊の景色や、土下座して居る、兩側の町人百姓を、ちつと視て居るの



だから、今の無産派の闘士なるものに、之れを視せたら、さぞ憤慨する事だらう。  
 参観交代の供廻りには、それ／＼に人数の制限があつて、いづれも大名の祿高から割出されてあつた。加賀の前田は、千二百人位は、伴れて歩くが、薩摩の島津は七十五萬石であるから、少なくとも五百人以上を要する譯だ。  
 襲封後、始めての、参観出府とあつては、齊彬の行列が、いかに壯觀を極めたかは、改めていふ迄もない事だが、後の大西郷も、この時は、五百人のうちの一人で、どこに居たか、判らないほどの下廻りであつた。  
 正月廿三日、鹿兒島を出發して、江戸へ着いたのが、三月六日であつた、といふから、四十餘日を費して居るのだ。可成り緩くりしたものはあるが、この位でなければ、本統の旅行気分にはなれない。  
 長い間の憧憬であつた、江戸の土をふみ得し、吉之助は、どれほど嬉しい事であつたか。  
 (此時分には、吉兵衛と稱して居たのである)

儒 傑  
 藤 田 東 湖

嘉永安政の頃、天下の儒傑として、知られた者が三人ある。その一人は、水戸の藤田東湖であつたが、他の二人は、熊本の横井小楠と、松代の佐久間象山であつた。  
 儒者で、學問が深くあるから、といふて、必ずしも其人が偉い、とはいへまい。單に、學問があるとか、又無いとかいふ事は、さう大した違ひではないのだ。世間に、富者と貧者があるけれども、金を多く持つて居る人が、必ず傑物といふ譯でもなく、又、貧しい者であるから、其人は卑むべきものだ、とも言へない。要するに、金があるとか、無いとかいふ事は、其人の賢不肖に關係なく、それ丈の境遇である、といふに過ぎないのだ。學問のある無しが、矢張りそれと同じことで、多く書を読んで、多く文字を知るといふ事は、その人格に、大した影響はないものである。著者が、茲に儒傑と稱するのは、學問に深く、古今の書を涉獵して、何でも知つて居る上に、その識見が高く、天下の事に觸れて、必ず一箇の卓見を有つて居る、といふ人を指していふのだから、その當時に、所謂儒者は澤山あつたらうが、眞に儒傑と稱すべき人物は、餘り澤山になかつた。  
 象山には、少しく街氣があつて、邊幅を飾り、人を恫喝する惡癖があつたから、多くの人の中には、ひどく嫌ふ者もあつて、象山の評判は、その當時から、餘りよくなかつたが、世を擧げて、攘夷論に熱中する時、獨り疾く、開國



進取の意見を、建てた處に、此人の長所は、現れて居る。  
象山が、如何に剛腹で、銜氣に富んだ人でも、東湖の前には、どうしても、頭が擧がらなかつた。それ丈けに、東湖の人格は、優れて居たものと視てよからう。  
けれども、其他の儒者に對しては、象山も、頭から呑んで掛かつて、大概是、押付けてしまつた丈けの力は、有つて居たのだ。

小楠は、全く此二人と、その行く途を異にして、單に、儒者といふ狭い埒の裡に齷齪せず、廣く世界の政治までも調べて、政務の事には、却々明るい人であつたが、餘りに西洋臭く、殊に、基督教を尊信した爲めに、一部の士人からは、國賊の如く罵られて、生れ故郷の熊本では、可成りひどい排斥を受けた事もあり、却つて、松平春嶽に迎へられて、越前福井へ移り、藩政の顧問をした事もあつたのは、相當に知られて居る事實だが、身の終りを全うする事の出来なかつたのは、甚だ遺憾であつた。

象山と、小楠に比べて、東湖は、全くその性格を異にし、儒者ではあつたが、豪快な氣分を有して居た。よく議論はするが、又、後輩を愛して、進むべき途を誤らぬやうに、指導した所から、藩外の士人に、頗る信用の篤いものがあつた。

西郷が、江戸へ出て來てから、東湖の知遇を得た爲めに、交際の範圍も廣くなり、諸藩の傑人に、知己の多くなつた事は、やがて其人格を修養する上に、少なからぬ裨益のあつた事は、云ふ迄もない事だ。  
従つて、東湖の事は、一と通り、いふて置く必要がある。

東湖の父は、藤田次郎右衛門と稱して、別に幽谷といふ號があつた。その父は、紙屑屋のやうな事をして居た、市井の一商人に過ぎなかつたが、幽谷は、勤勉努力して、遂に身を起し、一世を風靡するほどの儒者となり、水藩唯一

の人物となつた。

十五歳の時、既にその才名は、各藩の儒臣にまで知られて居た。松平越中守は、後の樂翁の事であるが田沼の秕政を、革正する爲めに、幕閣に入つたので、人材の拔擢には、随分苦勞して、よく人を用ひたものであつた。

水藩に、幽谷在る事を知つて、之れを用ひて視よう、と考へたので、遙かに人を遣はして、その文藻を求めた。幽谷は、新たに稿を起して、越中守へ、一の論文を提出したのであるが、それは有名な正名論なるものであつた。

その論文には、名實の必ず相伴ふべきものなる所以を論じて、帝室の尊崇すべき筋道を説き、暗に將軍の僭越を諷刺してあつたから、これには流石の越中守も頗る恐れ入つて、終に幽谷を、登用し得なかつた。

幕府の權威が尙ほ旺んであつた時、自分は水藩の一人として、斯うした論文を、時の老中に差出したのであるから、以て幽谷が、普通の讀書子と、異つて居たことを視るべく、而も、其歳僅に十五歳にして、越中守ほどの人を驚かしたのだから、老輩の儒者も、これには舌を捲いて驚き、その將來に矚目した者が多くあつたのは、當然である。

幽谷は、高山彦九郎と交り、蒲生君平とも、親しくして居た。その交る人に依つて、どういふ人物であつたか、といふ事の想像もつく。

齊昭が、水藩の主人となるに就ては、却々に面倒な事があつて、藩中の老臣や、親藩の中には、家齊將軍の庶子を迎へて、藩主にしようとして、策動した者もあつたので、一時は、御家騒動が、起りかけた位であつた。

幽谷は、夙くから齊昭の側近に勤めて、よく臣節を盡したものであつた。單純な侍講として、文字の講釋をするのでなく、本當に心を容れて、教へ導いたから、齊昭の如き、優れた人物が、水藩の當主になつて、幕末の險しい時分に、徳川宗家とは、全く離れて、勤王の大義を唱へ、朝廷の爲めに、盡し得たのであつた。

齊昭は、即ち烈公の事であつて、家督相續の時分には、既に幽谷は、死んで居たが、その遺子、虎之助が、齊昭の側近に勤めて居て、よく輔佐の任を全うした。虎之助は、東湖先生の事である。



未だ幽谷が、生きて居る頃、外夷渡來て、世間が騒がしい時の事であつた。常陸の大串村の沖に、黒船が來たといふので、大騒ぎになつた事がある。幕府にも、其事が知れて、代官の古山善六が、通辯の吉雄忠次郎といふ者を伴れて、態々出張した位であるから、城下の混雜は、實に非常なものであつた。

『虎之助は居らぬか』

父に呼ばれて、虎之助は、其前に來た。

『何御用で御座いますか』

『大串村の沖に、異國の黒船が來て居るさうぢやが、藩中の役人は、徒らに狼狽するのみで、更にどうしてよいか、といふ道を講ずる者が無いのは、笑止の至りである。お前は、これから大串村へ行き、黒船に乗移つて、親しく外夷に面會いたして、その來意を尋ね、少しでも國威を汚がされる如き、不都合と思ふ點があつたら、直ちに船長を刺殺して、お前は、其場を去らず、切腹して相果てるのぢや。決して悪怯れた振舞をいたしてはならぬぞ、よいか』

『委細、心得ました』

虎之助は、父より渡された一刀を、腰に打込み、勇しい様で出て行かうとする。所へ、幽谷の縁の伯父に當る、丹市郎兵衛といふ人が、偶然訪ねて來て、幽谷父子の様子を視たので、頻りに其事情を尋ねるから、幽谷は、一切の事情を打明けた。市郎兵衛は、膝を打つて、

『流石は、幽谷の件ぢや、よく覺悟をいたしたな。併し、これが此世の別れにならうも知れぬから、袂別の盃を擧げる事にしたらどうぢや』

といつて、市郎兵衛が勧めるに任せ、幽谷は、すぐに用意をさせて、袂別の宴を開いた。

つて來たのでなく、長途の航海に、薪水が盡きて、それを求むるが爲めに、やつて來たのだ、といふ事情が判つて、與ふべきものを與へたから、黒船は無事に立去つてしまつたといふことが判つたので、折角覺悟した虎之助も、死地に乘込まずに濟んだが、此事があつてから、虎之助の名は、やうやく藩中の者に、注意されるやうになつた。

幽谷は、文政九年の十二月一日に、世を逝つて、虎之助は、すぐに家督を繼いで、齊昭の側近に勤めるやうになつた。それから東湖の名は、遠近に知られて、後には、水藩の三田と謂はれて、戸田忠太夫、武田耕雲齋と併稱されるやうになつた。

東湖の爲人を知るには、その詩文を引くのが、一番の近道ではあるが、今茲には、先づ正氣歌を引く事にしよう。天地正大氣。粹然鐘神州。秀爲不二嶽。巍巍聳千秋。注爲大瀛水。洋洋環八洲。發爲萬梁櫻。衆芳難共伴。凝爲百鍊鏡。銳利可斷鏊。藎臣皆熊羆。武夫盡好仇。神州孰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。明德伴太陽。不三世無汗隆。正氣時放光。乃參大連議。侃侃排腥羶。乃助明主斷。饑饉焚伽藍。中郎嘗用之。宗社磐石安。清丸嘗用之。妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍。虜使頭足分。忽起西海颶。怒濤殲胡氛。志賀月明夜。陽爲鳳臺巡。芳野戰酣日。又代帝子屯。或弔鎌倉窟。憂憤正憤憤。或伴櫻井驛。遺訓何慙慙。或殉天目山。幽囚不忘君。或守伏見城。一身當萬軍。昇平二百歲。斯氣獲常伸。然方其鬱屈。生四十七人。乃知人雖亡。英靈未嘗泯。長在天地間。隱然叙彝倫。孰能扶持之。卓立東海濱。忠誠尊皇室。孝敬事天神。修文兼奮武。誓要清胡塵。一朝天步難。邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。孤臣困葛藟。君冤向誰陳。孤子遠墳墓。何以謝先親。荏苒二周星。唯有斯氣隨。嗟予雖萬死。豈忍與汝離。屈伸付天地。生死復何疑。生當雪君冤。復見張綱維。死爲忠義鬼。極天護皇基。

東湖は、深く文天祥に私淑して居たので、従つて、正氣歌となつて、其志が現れたものと思ふ。



猶ほ一つ、詩を紹介して置く。それは、幕府の嚴譴をうけて、江戸小梅の藩邸に、蟄居をして居た當時の作であるが、此詩は、著者なども、青年時代には暗誦して、よく往來を吟じて歩いて、巡査と衝突した事がある。

三決死矣而不死。二十五回渡刀水。五乞間地不得間。三十九年七處徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈皮膚。猶餘忠義填骨髓。嫫姚定遠不可期。丘明馬遷空自企。苟明大義正人心。皇道矣患不興起。斯心奮發誓神明。古人有云斃後已。

久阪玄瑞は、吉田松陰の門下生で、高杉晋作と併稱された人であるが、東湖の回天詩史と、正氣歌を讀んで、感激の餘り、斯ういふ事を言つて居る。

壯烈正氣歌。慷慨回天史。苟讀公道篇。頑懦且奮起。名義明皇道。扶植張綱紀。定遠與嫫姚。蹉跎困葛藟。丹心貫白日。如公忠孝士。繼紹先親志。承順邦君美。吾心洵欽慕。夢寐有時視。令公在戊午。國事安至此。

此一事を以て視ても、如何に東湖の詩文が、各藩の有志の心を刺戟して、感奮興起せしめたか、といふ事が判る。

一一

東湖は、眞面目な學者ではあつたが、逸話に富んだ人である。

豪放な氣象と、非常な酒飲みであつた爲めか、常人の考へ及ばぬほどの珍談を、多く作つて居る。それで本人は、存外に眞面目なのだから、そこに逸話の價値があるのだ。

同じ偉い人でも、逸話を有つ人と、有たぬ人がある。逸話を有つ人が、必ず偉い人だ、といふことにはならぬが、同時に、逸話の無いやうな人は、どうしても平凡に近い人である、ともいへやう。

昨今の人物では、頭山滿、中井櫻洲、犬養木堂、三浦梧樓、後藤新平等が、逸話を、多く有つて居る。また、維新前後の人では、三傑を別格として、陸奥宗光、伊藤博文、井上馨、山縣有朋、五代友厚、大隈重信、板垣退助等が、先づ逸話の多い方であつた。

併し、東湖に有つ逸話は、之れ等の人と、その趣きを異にして居る。これは、時代と境遇の相異からでもあらうが一面には、純な學者肌の人であつたことにも、依ると思はれる。

その一つ二つを、茲に掲げて、東湖の人物を偲んで視たい、と思ふ。

齊昭と東湖の關係は、管に君臣とか、主従とかいふ丈けの形式的關係でなく、學問に於ては、師弟の如きものがあり、交りに於ては、親友にもひとしいものがあつて、謂ゆる管鮑の因縁を、有つて居たのである。

東湖は、普通の酒好といふのでなく、その量も、頗る多く、少し割増をしていへば、朝一升、晝一升、夜一升といふてもよい位の大酒家であつた。

身長は、六尺に近く、肉附もよく、色は黒くして、眼光は炬の如し、とあるから、ずるぶん恐ろしい風采の人であつたらしい。

西郷が、始めて逢ふて、外へ出てから、伴れの者に向つて、『東湖先生は、恰て山賊のごとある』

と、いつて、哄笑したといふことであるが、いかなる人も、その聲と意氣と、風采の堂々たるには、一と押し、押付けられてしまつた、と傳へられてあるが、流石の象山てさへ、東湖には、一目も、二目も置いて居た、といふことは、前にも述べた通りである。

齊昭の左右には、何時も離れず、従いて居たが、齊昭の方でも、東湖を、放し得なかつたのである。それ丈けに、



両者の關係は深く、各自の長所も短所も、よく知り抜いて居たのは、いふ迄もない事だ。  
 東湖が、斗酒猶ほ辭せず、といった調子の飲助には、齊昭も、少なからず心配して居た。大酒は、要するに、生命を縮めるものとされて居たので、齊昭は、深く心配して居たのだ。  
 一日、東湖は、齊昭の前に出て、酒を戴いて居たが、何の遠慮もなく、大きい盃で、引受けく飲んで居る状は長鯨の百川を吸ふにもひとしく、實に美事なものであつた。

「虎ツ……」

「ハツ」

「其方は、よほどの酒量ぢやのう」

「恐れ入ります」

「どれほど飲むか」

「日に三度は、必ず飲みます」

「量は、どれほどか」

「一升つゝは飲みます」

「ほほう、大したものぢやのう」

「お賞めの御辭にて、恐れ入ります」

「それが、極度か」

「イエ、極度ではありません」

「極度は、どれほどか」

「未だ覚えませぬ」

「ふふむ」

日に三度は、必ず飲む。一度に一升と申上げて、それでも極度といふほどは、未だ飲んだことがない、といふのだから、齊昭も、之れには驚いた。

「私の酒量は、かねて御承知下さる事と、思ひ居りましたるに、今日は、何故の御尋ねて御座りますか」

「何故と申すほどの事もないが、餘りの美事に尋ねて見たのぢや」

「恐れ入りました」

「就ては、虎ツ……」

「ハツ」

「些と慎む事は出来ぬかな」

「慎めと仰せられますのは、酒の事で御座いますか」

「左様ぢや」

「酒を、どう慎めとの仰せて御座いますか」

「量が多いやうに思はれる」

「節酒せよ、との御沙汰で御座いますか」

「あまりに量の多いは、健康にも害があらう」

「それ故に、節酒せよとの御沙汰と、心得て然る可きか、伺ひ上げます」

「その通り、ちと節酒いたしたら、どうぢや」

「御辭に従ひまして、今日より直に、禁酒いたしませう」

「イヤ、禁酒迄には及ぶまい。ちと節酒いたしたらば、と申すのぢや」



『私には、節酒などといふ生緩い事は、とても出来ませぬゆゑ、寧ろ禁酒いたし度く存じます』  
『それならば、猶ほ更ら結構と思ふ』  
『然らば、禁酒と定めます』  
『可し』

東湖は、一と膝より出して、  
『それに就て、私にも、お願ひの次第が御座います』  
と、いつて、齊昭の顔を、ちツと視た。

『何事か』

『君公に於かせられましたも、ちとお頼みを願ひ度き儀が御座います』  
自分の禁酒について、交換問題を出したのだ。齊昭は、興味深く思召したものか、

『それは、どういふ事か』

『まことに恐れ入つた儀では御座いますが、女色を御慎み下さるやう願ひ上げます』  
之れを聞いて、齊昭は、少し狼狽氣味になつた。

『待てツ……』

『女色の過ぎまするは……』

『ま、待てツ』

『……』

『其方は、矢張り酒を飲め。酒は、憂を掃ふ薬ぢや』  
併し、女色の儀は……』

『まア、よいではないか』  
終に、齊昭は、これで恐れ入つてしまつた。

齊昭が、女にかけて強いことは、實に有名なものであつた。有栖川家から、夫人を迎へた時、京都から従いて來た侍女を、抑へつけて歸洛せしめず、トウ／＼手に入れてしまつた位ゐて、妾も多く、子供も少なからず生ませて、女の方では、可成り發展して居たのだ。

東湖は、常に其れを知つて居て、苦々しい事に思つて居たが、ひそかに諫言す可き機會を、狙つて居た時に、節酒の事が出たから、それに乘じて、暗に齊昭を戒めたのであつた。

君臣の間でも、斯うした事について、これ丈けの事がいへるやうになるのは、普通の關係でなく、殆んど親友の如き間柄でなければ、その當時の君臣として、斯かる無遠慮の事は、いへたものでない。

山内豊信は、土州高知の藩主で、有名な賢君であつた。  
齊昭とも親交があつて、しば／＼往來して居たが、一日のこと、小石川の館へ、招かれて行つた。それは晚餐の馳

走をうける爲めて、その時分には、互に斯うした招宴は、どこの藩主も、しば／＼開いて居たのである。  
例の如く、東湖は、その側に附いて、お話の對手をして居たのだ。

『東湖先生に、ちとお頼みがある』  
藤田の事を、東湖先生といふて居たのは、豊信ばかりではなかつた。

『何御用で御座いますか』  
『席書を所望いたしたい』



「心得ました」

豊信は、大名放れた書家で、山陽の書風を學んで、その墨を摩して居たほど、書には、堪能の人であつた。すべて、大身の御方から、斯うした事を望まれた時には、假りに御受するとしても、その席にては、御免を蒙つて他日に認められたものを、自ら持参するのが禮であつた。

殊に、書に堪能な大名から、それを望まれて、即座に御受して、すぐ書きはじめる、といふが如き事は、東湖でなければ、とても出来ぬ事である。

墨痕淋漓、雄渾の筆を揮つて、一枚書きなぐつた。それには、斯ういふ文句が書いてあつた。

「容衆之言者名君也」

豊信は、大に喜んで、それを持ち歸つたが、その翌日から、容堂と稱して、死に到る迄、この別號は、用ひて居た。

東湖が、深く交つた儒者は、左の人々であつた。

林鶴梁、芳野金陵、田口江村、鹽谷岩陰、羽倉簡堂、藤森弘庵、安井息軒

東湖は、安政二年十月二日の大震に觸れて、非業の死を遂げた。

地震の災禍は、著者も、近く體驗して居るが、實に恐る可きものだ。安政の大震は、近年の地震に比べて、大した差はなかつたやうだ、著者は、よく其實況を、亡き母から、聞かせられて居たが、地震に伴れて起るものは、必ず火災である。

火災に對する注意は、平常に於ても、必要の事ではあるが、殊に地震の時は、その必要を、痛切に感ずる。近年の地震も、それさへ無くば、大した損害ではなく済むだらうが、何しろ那の火災には、恐れ入つた。

安政の大震も、火災の件ふた爲に、人畜の死も多く、財寶を失ふた事は、全く非常なものであつた。

財寶を失ふことは、猶ほ忍ぶ可しとするも、偉大なる人物を、失ふの一事は、いかにするも忍び得ない事である。東湖も、此大震で、無慘の横死を遂げたのであるが、死の際にも、後世に傳ふ可き、美談を遺して在るから、それを附け加へて置き度い。

見聞唱義録には、斯う書いて在る。

藤森弘庵、丁巳の夏、予に語けるは、十月朔日、安井仲平、蕎麥を振舞ふとして、平常交る友、藤田及び、藤森、鹽谷甲藏、吉野金陵等を會し、各興に入り、激談時を移し、碁を圍みけるに、藤田、此夜は數局負け、常にかはり何となく愁然として、深更退散しけるに、翌二日夜、大地震にて壓死し、此集會、永訣となれりとなり。

後聞けるに、其夜、藤田の家に客有つて、支關へ送り出て、立戻り、いまだ、脇差も抜かざるに、大地震なりければ、老母を扶けて、一旦庭前に出けるに、老母、火鉢に土瓶の湯かけずに出たり。火の用心悪しといひて、また家に入れば、東湖、ソレはあぶなき事として、老母を出さんとて、これも家に入たる處、鴨居落かゝりけれども、東湖、大力の人故、老母を下に圍ひ、座して兩手を突き、肩に鴨居を受けながら、片手にて老母を、庭前へ投げ出しけるに、また一震強くあり、終に東湖は壓死して、老母は免かれ、存命しける。戸田も、此夜壓死せりとなり。

此記事の中に在る、戸田は、忠太夫の事である。

水藩は、此大震に依つて、兩田を、一時に失ひたる譯であるから、齊昭としての損害は、實に容易ならぬものであつた。

東湖の死は、母を救はんが爲めの死で、母を助け得て、自らは死んだのであるから、その死は悲む可きも、母は、之れが爲に救はれたのであるから、東湖としては、満足の死であつたらう。同時に孝養の爲に死んだことは、どこ迄も、東湖らしい所がある。



齊昭と齊彬が、殊に親しくして居た關係もあらうが、東湖の屋敷にも、薩藩士が、多く出入して居た。薩藩に、勤王の士が、多く出たのも、それ等の事情が、唯一の原因とはいへぬ迄も、慥に一因としては、視る事が出来やう。有村俊齋は、西郷より前に、江戸に出て居たから、東湖に接近した人としては、極めて早い方であつた。明治になつてからの海江田信義、當時の有村は、却々威勢のよい人であつたが、俊齋といふて居た時代は、未だ歳も若く、時世の峻しかつた丈に、その素行や思想も、可成り過激であつた。

東湖は、極めて豪放な氣性で、よく人を容れたから、有村も、しばしば東湖を訪ねては、其教へをうけて居た。今日も、俊齋が、訪ねて来て、時事の談論に花が咲いて、時刻を移した。そのうちに酒が出たので、氣焰は、益々昂るばかりであつた。

「浦賀以來の幕府の態度を、お前は、どう考へて居るか」  
有村は、黙つて居た。

「男子が、その面に唾を吐きかけられて、交際を求められた時、それに應ずるものがあれば、腰拔といふ事になる。況て、武士は、恥を知り、義を重んずるものでなければ、俱に談ずるに足らぬ。お前は、之れをどう思ふ」  
「先生の仰せに違ひない、と思ひます」

「然らば、外夷に對する處置を、どういたしたら可い、と思ふか」

この間に對して、有村は、答へをしなかつたが、頻りに東湖から、答へを迫られたので、有村は、終に答へた。「何うせ開國は止むことを得まいが、威嚇されて開國するのは、まさに國辱である。宜しく一度は、勿付けて置いて、

更に此方より進んで、開國貿易も許すが可い。畢竟は、武士の體面を重んずるの立場から、この問題は決す可いである」

といふのであつた。卒直に、有村は、考へた通りを答へたのである。

東湖は、その答を聞くと、しきりに激賞してくれたから、有村は、非常に嬉しかつた。酔は廻つて、興はふかくなつた。

「武士は、善といふ事も、悪いといふ事も、みな知つて置かねばならぬ。萬人が視て、悪いといふ事も知つて居て、損は無いものぢや。只だ心得ては居るが、其悪を行なはぬ、といふ所に、妙味は存するものぢや」

「先生の仰せは、至極の儀と存じます」

「お前は、賭博を知つて居るか」

「賭博は知りませぬ」

「賭博を知らぬとは、怪しからんぢやないか」

武士が、賭博を知らぬからといふて、それが何故怪しからぬか、有村には、東湖のいふことが、よく解らなかつた。

「賭博は、一向に存じませぬ」

「そりや不可ん。武士が、賭博知らんて何とする」

俊齋は、何とも返辭が出来なかつた。

「拙者が、教へて進せよう」

東湖は、机の洩出から、賽を二つ出した。湯呑を取つて、其賽を入ると、二三度振つて、カラ／＼と音をさせた。やがて湯呑を、ボンと伏せた。

「丁か、半か」



俊齋は、呆然に取られて、何ともいひ得なかつた。  
「無賭では面白くないから、何か賭ける事にいたさう。俺は、この金財布を賭ける。お前も、財布を出さッしやい」  
斯ういはれて、俊齋は、澁々財布を出した。

「丁か、半か」

「丁で御座います」

東湖は、湯呑へ手をかけ乍ら、

「勝負するぞ」

といつて、湯呑を明けた。二つの賽は、丁の目であつた。

「アツハ、、、俺が負けた」

財布は、俊齋の有になつた。東湖は、また湯呑を伏せる。

「今度は羽織ぢや」

明けて見ると、また東湖が負けた。俊齋は、勝ち續けて、終に東湖は、素裸になつて仕舞つた。

「親が裸ぢや。この上は、伴も澄ましちや居られんて」

といつて、東湖は禪を解いて、

「さア、之れを賭けるぞ」

東湖は、禪を賭けて、また勝負したが、矢張り負けた。

「先生、斯う負けつゞけては、親子ともに裸ですが、どうなさる」

「負けた以上、致方がない」

「伴までが裸では、道中も出来ませんな」

「畢玉を出して歩くものは、拙者一人ではない。滔々たる天下の人は、皆な畢玉を出して居るぢやないか」

警句は、東湖の口を衝いて出た。有村は斯うして東湖から、常に教へをうけて居たのだ。有村が、初めて東湖に逢

ふた時、東湖は、有村に、相當の教育があるものとして、話を仕て居たのだが、有村は、東湖に向つて、

「頃日、多くの人が唱へる、勤王とはどういふ事であるか」

と、訊ねたのであるが、その訊ねやうが、餘りに突飛でもあり、また奇抜でもあつたから、東湖は、すぐに答へた。

「お前は、太平記を読んだ事があるか」

「未だ讀んだ事ありません」

「それでは、勤王を論ずるには、少し隔たりがあるから、先づ太平記を誦誦して來い」

「左様ですか」

有村は、それから太平記を、引寫しにして誦誦したので、やうやく勤王とは、どういふ事であるか、といふ意味が、

臆氣ながら解りかけた。それから更に東湖に教へられて、勤王の大義に通ずるやうになつた。

四

吉之助は、江戸へ出て來た。

有村から、東湖の事を聞いて、しきりに逢つて見たくなつた。東湖は、有村から西郷の事を聞いて、是れも逢つて

見たく思つて居た。

學識も、抱負も、具に備はつて、豪放の氣性と其の快辯は、既に多く知られて居た。水藩の東湖先生といへば、大

概のものは能く知つて居たのだが、殊に、徳川御三家の大殿、齊昭が、東湖を愛して、百事は東湖の意見に由つて決

するといふほどに、御信賴がある、といふ事は、東湖の人望をして、ますます重からしめたのである。吉之助は、藩



用の隙を、密かに窺つて居ると、今日は、一日の閑を得たので、小石川の水戸邸へ、東湖を訪ねて来た。

「薩藩士西郷吉之助と申す者で御座るが、先生に拜謁致し度く、御伺ひ仕つた、と御執次下され」  
執次の小侍は奥へはいった。間もなく出て来て、

「何卒、此方へ……」

吉之助は、案内を受けて、客室へ通つた。聽て東湖は、出て来た。

「ようこそお御出ぢや」

「吉之助に御座ります。御高名は、豫て承はり居りました」

「御丁寧な御挨拶で、却つて痛み入る」

「有村俊齋が、御教訓を戴きたる趣き、同人より承はり及びまして、厚く御禮申上げます」

「有村氏は、御同僚の趣、豫て承知致して居る」

「我等も、有村同様に、お願ひ致しまする」

「今日は緩く致しても、御不都合は御座らぬかな」

「先生の御都合さへ宜しくば、我等に、不都合は御座りませぬ」

「然らば、寛ろいで御話しなされ」

東湖は、まづ袴を脱つて、膝を崩した。人から聞いて居たが、それとは大部異つて居る。

「無禮は御互ひぢや。先づ袴を脱らつしやい」

吉之助の、肥満して居る、體格を見て、東湖は、大に氣を利かしたのであらう。吉之助は、頗る恐縮して居たが、再度の勧めに、袴を脱つて膝を崩した。

「酒を飲めるか」

「少しは飲みます」

「うむ、飲まツしやるか。酒を飲まぬ輩は、俱に天下の事は談じ難い、ハツハ、……」

直に、酒肴が運ばれた。

英雄を知るものは英雄である。初對面の時に、既う東湖は、吉之助の爲人を、よく見抜いたらしい。

「さア、飲まつしやい」

「頂戴いたします」

これから酒盃は重ねられたが、東湖は、自慢の酒量で、吉之助は、酒を餘り好まなかつたから、忽ち黙然してしまつた。

談論し乍ら、且つ飲むのであるから、酒盃の運びは、ナカ／＼に忙しい。従つて酔の廻りも早く、東湖は、何時迄経つても、しつかりして居るが、吉之助は、終に酔ひ倒れてしまつたばかりでなく、小間物店の開業まで、遠慮なくやつてしまつた。東湖は、その無禮を許して、吉之助を、手厚く歓待してくれた。夜に入つて、眼が覺めてから、吉之助は、ひどく恐縮して歸つた。

「足下は、東湖先生に逢ふたさうだが、どういふ感じがしたか」

と問はれて、吉之助は、

「只だ見た時は、山賊のごとある」

と、答へたのは、此時の事であつた。

東湖と交つてから、その紹介に由つて、諸藩の名士とも、追々に交際を結ぶことになつた。越前の鈴木力、矢島錦



助、熊本の長岡監物、津田山三郎、柳川の池邊藤左衛門、水藩の戸田忠太夫、原田兵助、武田耕雲齋等、東湖と親交あるものは、皆な交友となつた。

諸藩の動靜、幕閣の内情等、日を逐ふて解つて来るにつけても、今後の難問題ともして視る可きは、外夷渡來の一條である、と考へた。前年の約束を履んで、必ず本年も、来るに違ひないから、幕府は、厭でも條約を結ぶの外はあるまい。それとも、條約は拒絶して、開戦に及ぶか、いづれにもせよ、容易ならぬ問題である。若し一步を誤れば、我國の興廢に關する事であるから、今日の急務としては、先づ外夷の事情を、よく究める事が、第一に大切である。然るに、外夷の事になると、よく知つて居るものは、殆んど無かつた。吉之助は、東湖に逢ふた時、此事を語ると、『好い人物があるから、紹介しよう』

『それは、どういふ人物でありますか』

『幕臣ではあるが身分は低い。併し、普通の武士とは違つて、學問もあれば見識もある、立派な人物ぢや。勝麟太郎といふものぢやが、一度逢ふて見るがよい』

東湖が、此位に賞める以上、必ず豪い人物に違ひないと、吉之助は、機會を得て、逢つて見る事に極めた。

麟太郎は、後日の安房守である。越後の小千谷から出て来て、一代に十萬兩の分限者になり、本所の一つ目で、金貨をして居た、男谷檢校といふのが、麟太郎の曾祖父に當る人だ。男谷は盲目でこそあつたが、普通の檢校や金貨と違つて、非常にすぐれた人であつた。一生絹布を身につけず、木綿物ではあるが、毎日新しいのを着て、一度着たのは、直ぐに貧民に與へて仕舞つた。愈々死ぬといふ時には、一切の資金證文を燒捨て、子供には金貨を爲るな、と戒めて世を去つた。父の代から、家運が衰へて、麟太郎が、相續する時分には、頗る貧乏になつて居た。邸は、赤坂の田町に在つて、後には本所の龜澤町に移つた。田町の邸は疊の敷でない座敷があつたといふことだ。麟太郎は、此貧乏の中に人と爲つて、随分苦學をしたのであるが、そのうちに、授けるものも出て來たので、少しは樂にもなつた

が、一時は、非常な生活難に苦んだ。妹の瑞枝が、佐久間象山に嫁いだのを頼りに、象山に従いて、大に學んだ。蘭學も其時に習得した。膽もあれば才もあり、學もあれば、智もあつた。幕末の舞臺に、一人芝居をした男だから尋常の人間ではなかつた。東湖も、深く勝を信じて居たので、吉之助へ紹介を致したのであつた。

吉之助は、漸くに機會を得て、麟太郎に面會した。麟太郎を、豪いと思つた。麟太郎の方でも、吉之助を普通の田舎武士とは見なかつた。一見舊知の如く、肝膽を打明けて談じた。之れから屢々會見して、吉之助にも、略ぼ世界のことが解つて來た。



島津齊彬

齊彬は、未だ部屋住の時代から、各藩の主人と、對等に交際して、天下の大事に就ても、常に關係して居たほどであるから、一たび家督相續して、薩藩の主人になると、深く交つて居た諸侯は、いづれも心から喜んで、ます／＼齊彬の評判は、良くなるばかりであつた。

水戸の齊昭、宇和島の伊達宗城、福岡の黒田長濬、土佐の山内豊信、肥前の鍋島齊正、越前の松平慶永等は、殊に能く齊彬の人物に、傾倒して居たので、この往來は、可成りはげしく爲されて居た。

齊彬の主唱で、齊昭を、幕府の總裁職に、押擧げようとした事があり、これには頗る賛成者も多くあつて、幕府の權威が、漸く衰へて、各藩に對する睨みも、追々に利かなくなつて來た上に、外夷の渡來で、上下騒然たるの折柄、齊昭の總裁は、至極の適任として、やうやく物になりかけた時、幕府の内部から、故障が起つて、この計畫は、終に破れてしまつた。

此時分に、島津家の内訌が、再び起りかけて、齊彬の立場に、苦しい事があつたので、齊昭の擁立は、その儘手を引いてしまつた。

齊彬の相續を妨けたものは、齊彬が、藩主になつた後も、矢張り反對であつて、表面は、往生したやうに視えても、その心中には、猶ほ不平があつて、何かの機會に、その鋒鏑は、顯はれて來るのが、當然の事態であつた。

島津將曹の一派は、何となく齊彬に不平があり、齊彬も、亦た將曹等を、重く用ひなかつた。併し、將曹も、古い國老でもあり、齊興の信用も厚かつたのであるから、決して之れを斥けるやうな事はしなかつたが、多く國元の方に置いて、江戸へ呼上げる事は爲す、齊彬の思ひ通りに、藩政の改革は、行はれてゆくのであつた。

吉之助が、將曹の一派に反對であるのは、父が存生中からの事だ、殊に赤山の死に依つて、その反感は、一層深いものがあつたので、勢ひ將曹の一派には、互に相容れぬ事情があつたのだ。

それに、吉之助の味方ともいふ可き連中は、多くの青年壯者であつたから、どうしても將曹の如き老臣とは、何事についても折合の良くなかつたのは、是れ又當然の事といふ可きであらう。

齊彬は、子供達が悪く、既に數人の子供を亡ふて、今は虎壽丸といふ、若殿が、只一人残つて居るばかりであつた。然るに、齊彬出府の時は、格別の病氣といふのでもなく、其後も、病氣の事は、重く傳へられもしなかつたのに、國元からの急飛脚で、その死亡を報じて來た。天にも地にも、只だ一人の嗣子であつたから、齊彬の愁傷は、外の見る目にも、痛ましいほどであつた。同時に、西郷等の失望は、一段とはげしかつた。そのうちに、虎壽丸の死因に疑はしい點がある、といふことが、傳へられて來た。虎壽丸が、亡くなれば、齊彬には、跡の男子がないのであるから、順養子を爲るなれば、久光の外にないので、既に順養子に、押立てる相談も、將曹等の間に、決して居るといふ風説が、眞實らしく傳へられて來た。假に毒殺のことは嘘としても、久光を、順養子に押立てるといふことだけは、全然の嘘でもないらしい。

江戸詰の元氣者で、吉之助の一派は、寄り／＼に集合して、その相談をはじめた。大山格之助や有村治左衛門は、非常に憤慨して、これより國元へ急行し、將曹等を片ツ端から斬捨てる、といつて、カン／＼になつて怒り出したが、之れには同意者も、多くなつた。吉之助も、之を聞込んで、頗る驚いた。君家を思ふ、忠節の志は、然る事乍ら、今の場合、左様した輕卒な事を始めて、萬一にも、近藤崩れの二の舞でもやつた日には、却て君家の一大事であると、吉



之助は、分別のある男であつたから、同志の會合を催して、各自の意見を吐かせる事にした。然るに、會合したものの多數は、大山と有村の意見に賛成して、奸臣の根を絶ち、葉を枯らすには、非常手段の外に、執る可き方法はない、といふのであつた。

「足下等が、君家を思ふ一念から、左様にいはれるのを無理とはいはぬが、嘉永の歳の近藤崩れが、良い股繼てはないか。此際に、我等は、努めて陰忍し、靜に事を謀るのが、最も大切である、と思ふ。先づ取り敢へず、國元へ密偵を遣はし、若君御逝去の状況を取調べ、その上にて、更に方策を廻らすも、決して遅くはない。若し御同意下さらば、その役目は、己どんが、御引受け致さう」

と、吉之助は、思つた通りをいふて、一同の答を待つのであつた。

死因に疑ひはある、といふた所で、只だ疑はしいといふ丈の事で、未だ毒殺とも、變死とも定まつては居ないのだ。従つて、今、吉之助のいふ所には、相當の理由があつて、それを否む事は、誰にしても出来なかつた。大山、有村の一行も、徒に殺戮は好まないのだから、吉之助のいふ通り、先づ其報告を待つてからでも遅くはあるまい、といふことになつて、吉之助は、其夜のうちに喜平次といふ下僕を、國元へ出立させた。喜平次は、吉之助の下僕になつて居るが、武邊の心得もあれば、才氣もあり膽力もあつて、吉之助は、深く其爲人を信じて居たので、先づ之れを密偵として、送る事にしたのである。

喜平次は、江戸の生れであるが、父は、薩摩の出身であつた。生れも育ちも、純な江戸ツ子であるが、藩邸に勤めて居たので、眞の薩人と異ならず、舉動が、どことなく輕快ので、國武士とは、少し異つたところはあつた。

二人は、どうした關係になつて居たか、といふことも一と通りはいふて置く必要がある。吉之助は、出府してから間もなく、自分の手廻りの下僕として、新たに雇入れたのであるが、吉之助には妻もなく、また家族もないので、三度の食事から、衣服のこと迄も、皆な喜平次に任せてあつた。喜平次は、吉之助の那邊が好かつたのか、忠實に盡した。感情は、幾分か薄らいで來た。交通機關の不自由な時代として、江戸と九州の片隅では、日數の費かるのも無理はなかつた。

てくれるから、吉之助の方も、喜平次を愛して、よく眼をかけてやつた。主従の間の美しいことは、恰で君臣父子の如くであつた。人生意氣に感ず、といふ事がある。双方で知り合つたほど、交りの強いものはない。主に情けがあれば、使へるものも忠を盡すのは、人間の美しい性情の現はれである。

喜平次の報告を、一日千秋の思ひで、待つて居るのは、大山有村の一派であつた。忠義の心に異變はないが、その感情は、幾分か薄らいで來た。交通機關の不自由な時代として、江戸と九州の片隅では、日數の費かるのも無理はなかつた。

喜平次は歸つて來た。吉之助の許へ、有村大山の一行は集まつて來た。喜平次の報告に依れば、密偵を送つた甲斐は、全く無かつたのである。喜平次は、鹿兒島へ着いてから、人に顔を知られぬのを幸ひに、媒介を求めて、島津將曹の邸へ、園丁となつてはいり込み、工夫のある限り、手に手を盡して、搜つて見たが、更に之れといふほどの、事情も判らず、何時まで居た所で、同じ事であるから、一と先づ歸つたといふのであつた。

喜平次から、始終の報告を聞いて見れば、虎壽丸は、眞の病死といふ外に、之れといふ悪い噂もないといふのであるが、併し、自分等の心には、猶ほ疑はしい、と思ふ點はあるから、虎壽丸の病因に疑ひは無い、としても、君家の將來には利益にならぬ、將曹の一派は、先づ斬つて仕舞ふのが最上策であると、有村や大山は、頻りに主張して止まなかつた。

『徒らに事を起すは、却つて不忠の譏を免かれぬ。先づ此際は、極めて靜かにして居よう』

といふ意見で、吉之助は、逸り立つ同志を、辛うじて抑へつけたが、若し、吉之助が、無謀の人で、事を好んだら、それこそ恢復へのつかぬ事件となつて、島津家は、嘉永の騒動を再演するのであつたらう。

此事は、何時か齊彬の耳へも、聞えて來たので、固より賢明な御方であるから、藩内の状況を、ひそかに視て居られると、何分にも、この連中と、將曹等との折合が、甚だ良くないのみならず、動もすれば衝突を起しさうであるか



ら、齊彬の苦心は、偏へに此點にばかり注がれる事になつた。就ては、嗣子のことを、此儘にして置けば、又々混亂を生ずるに違ひない。今のうちに嗣子を定めて仕舞ふのが、第一の良策と考へたので、齊彬の心では、久光の子を以つて、嗣子となすのが良策であると、堅い決心をしたのであつた。久光をしたのでは、西郷等が承知をしまいし、さればとて、他家から迎へることには、老臣の間に、議論も起らうから、久光の子を以て、嗣子に据れば、將曹等にも、満足が出来るだらう。西郷等も、久光には異論もあらうが、その子には異論が無からう、と、流石に、名君の名を得る丈けあつて、齊彬には、豪い所があつた。それにしても、西郷丈けには、打明けて置かう、といふので、西郷を召び出した。

吉之助は、御召をうけて、御前へ出た。話頭は何時となく、亡き虎壽丸の上に及んだ。

『人の生命の、一寸先は闇黒ぢやのう』

『申上まするも涙の種、眞正に口惜しく存じまする』

『余は幾たびか、子を産ませて、皆な死なれたのぢや。これのみはと思ふた虎壽すら、彼の通りになり居つた。子は有たぬが可いのう』

齊彬は、斯う仰せられて、その跡は、詞が續かなかつた。

『余は、嗣子を決めようと思ふ』

『何と仰せられまする』

『久光殿の子息を、順養子に爲るのぢや』

之れを聞いた時、吉之助は、初めは自分の耳を疑ふたが、それと判つて、動悸の爲る迄に驚いた。

『未だ御老年にもならせられず、左迄に取急ぐ必要も御座りますまい。今しばらくは此儘にて、御過し遊ばすやう、ひとへに願ひ上げまする』

『その儀に就いては、余の心では、既に決めて仕舞ふたのぢや。國元の老臣共へは、其趣を申渡してしまふた』

斯う仰せられては、吉之助として、此上に申述べる詞はなかつた。

『嘉永の歳の夢が、今に醒めぬ輩もある。余の繼嗣の決定らぬうちに、またもや、その夢を繰返すやうなことがあつては、家の瑕瑾にもならうから、余としては辛いぢや。祖先にも相濟まぬし、家の利益にもならぬ。久光殿の子息ならば、誰も異存はあるまい。假し異存あればとて、余は最早や覺悟いたしたのぢや』

吉之助は、之れを聞いて一言もなかつた。この上に、押切つて申上げるのは、君公を輕んずることになるから、差控へるの外はなかつた。乍去、久光公の若様を、御養子になさる事は、血統の上からすれば、異論の餘地はないが、

自分等には、何うしても忍ばれぬ不平があり、それが胸にこみ上げて來るのであつた。

『これッ、何事を思案して居る』

『ハッ……』

『心得違ひを致すまいぞ。今は區々たる、自家の繼嗣に、心を苦むる時期ではない。外には、夷人の來り迫る事がある

つて、内には、幕府と諸侯の反目もある。怖る可きは、我邦の前途ぢや。余は、繼嗣を定めて隠居する、一身の進退を、自由に致して、聊か皇國の御爲めに、盡しても見たく思ふのぢや。其方等も、その心を以て、余を援くる事

にいたせ。よいか、相分つたか』

名君は、能く家臣の心を、よく御存じてある。薩日隅の太守から、この有難き御託を承つて、何として此上の不平が抱かれやう。吉之助の胸中は、實に淫雨收まつて、明月を見るの感があつた。島津家の繼嗣争ひ、思へば、小

さなことだ。六十餘州の興廢に關する大事件は、眼前に横はつて居るのだ。此君を戴いて飛躍するのは、まさに是れ

男子の本懐である。曾て、有馬先生からも、それを教へられてあつた。今は、一切の妄執を去つて、大に皇國の爲に

活動しようと、此に至つて、吉之助は、豁然として大悟したのであつた。



御前を退つて來ると、同志を策めて、それとなく殿様の御思召を傳へたが、大山や有村は、どうしても承知しなかつた。頻りに憤慨して、飽迄も君公に御諫言申上げて、その御心を離へして貰はねばならぬ、といつて立騒ぐのを、吉之助は、之れを制して、漸く一時は治め得たが、餘憤は、容易に鎮まりさうもなかつた。翌日は、又々御召に依つて、御前へ出た。有難き御詞を戴き、御紋服を、一重賜はつた。吉之助も、終に全く御意に従ふことの外なかつた。再び島津家に、起る可き騒動は、之れが爲めに消えて仕舞つた。齊彬は、何處までも豪い人であつた。

### 齊彬と幕府

一

幕末の政治家にも、却々偉い人が居た。阿部伊勢守、井伊掃部頭、堀田備中守、安藤對馬守、小笠原壹岐守、板倉周防守、小栗上野介、勝安房守等の人は、いづれも、一騎當千の政治家であつた。阿部は、備後福山の城主で、老中としては、最も長い期間を、續いて勤めたほど、内外に人望のあつた政治家であるから、その在職中には、種々の事を、手がけて居る。いかに、鼻負眼に視ても、非凡の政治家とはいへぬが、氣の弱い將軍や、病氣で通した將軍を對手に、よく上手に切抜けたものだ、と思ふ。殊に、水戸の烈公といふ、扱ひ難い人も居て、その上に、松平春嶽の如き、氣むづかし家も居たのであるから、今の政治家が、樞密院の老人を持餘すよりは、もつと遣り難い所があつたに違ひない。それを巧みに取扱つて、長く老中の席を、保ち得た一事から視ても、相當の政治家とは、いひ得るだらう。井伊の如く、意思は強くない。また安藤のやうに、機鋒鋭脱の點もない。平々凡々の裡に、最も難局とされた時代を、兎に角、切抜けた手際に至つては、敬服に價する。



齊彬と、阿部の交際は、格別に深いものがあつて、阿部は、齊彬を、賢明なる人物として、よく其忠告を、容れて居たやうだ。

齊彬が、烈公を、幕府の總裁職に、押擧げようとした時にも、阿部は、その説を聞いて、頗る骨を折つたのであるが、何分にも烈公は、大奥の女中等に、嫌はれて居たのと、將軍の家定も、餘り喜ばなかつたので、其運動は、空しくなつてしまつたけれど、齊彬は、容易に斷念めずに、ちつと其機會を、狙つて居たのである。

その間に、虎壽丸の一條が起り、藩情安定の爲めに、幕府の事も、考へて居られず、しばらく手を抜いて居たが、やうやく藩の方も、心配しないですむやうになつたから、再び幕府の改革に、力を入れ始めたのであつた。

斯うした事は、いかに奮發しても、その時期が来ないと、不可ものである。齊彬が、しばらく手を抜いて居るうちに、烈公總裁の説が、だん／＼盛んになつて来て、松平慶永や、伊達宗城が、はげしく運動を起したので、阿部も、之れに動かされて、大奥の方の不平を抑へにかゝつた。

烈公總裁説の強味は、將軍の家定が、病弱の身で、内外多難の時局に、堪へ得ない人であるといふ事であつた。之れをいはれると、それでも可い、とは、誰にしてもいひ得なかつたので、多少の反感は、有つて居ても、烈公を、排斥する事は出来なかつた。

猶う一と息といふ時に、例の大地震が起つて、何も彼も、滅茶々になつてしまつた。烈公の側近に居て、殆んど顧問の如くなつて居た、藤田東湖も、戸田忠太夫も、同時に死んでしまつたのみならず、烈公總裁の説も、何時か沙汰止みになつて、折角の幕政改革も、終に一頓挫したので、齊彬の失望は、人にこそ知られなかつたが、實は非常なものであつた。

二 幕府

齊彬は、常に幕府の内情に、眼をつけて居たのであるが、當時の状態が、其儘に進んでゆけば、幕府の壽命も、長くは續くまいし、また我國の前途を考へても寒心す可き事件が、多く起つて居るのであるから、幕府の内部から、先づ改革してゆく必要がある。將軍が病弱の人であるから、この難局に堪へ得ない、としても、それに代つて、内政外交の衝に當る可き、適當の人物を求め、その人に一切任せて、少なくとも當面の難關文だけでも、切抜けることを謀るのが、最も急務である、と考へて、烈公擁立を策したのであつたが、その破れた以上、止むを得ないから、自分が乗出して、大に行つて見よう、といふ心になつたのである。

斯う述べて來ても、それだから、といふて、直に齊彬を以て、一個の野心家と視ては、その觀察を誤る事になる。齊彬の如き人をして、自ら進んで、幕政に立入り、大に働いて見よう、といふ覺悟を爲せたのは、當時の對外關係が、その大なる原因になつて居た、と視る可きであつて、徒らに大老や老中の席を狙つたのではなく、また小さな名譽慾に、驅られての野心でもなかつた。

攘夷論は、日を逐ふて、熾んになつて來たが、また一面に於ては、開國説も、やうやく頭を擡げて來た。併し、大勢の上からすれば、攘夷は、當時の輿論であつて、開國説の如きは、少數なる識者の間に、唱へられたに過ぎなかつたのであるが、たとへ少數にもせよ、左様した人の現はれて來たのは、見透し難き事象であつた。

世界の實狀を、詳細に知り得ず、としても、少し理窟の解るものならば、鎖國主義の押通せるものでない、といふ事は、既に判つて居たのである。齊彬の如きも、その能く解つて居た、一人である。

支那が、英佛の聯合軍に攻込まれて、北京城下の盟をしたのが、此時の事であつた。開國貿易を迫る、外夷は、よく其事を例として、幕吏を嚇したものだ、幕吏の方でも、それをいはれると、ひどく慄へて、條約調印は、止むを得ないものゝ如く、思つて居たのが、眞の事實であつた。同時に、兵備の必要は、ますます感ずるやうにもなつたの



であるが、之れに依つて、攘夷論の熾んになつたこともあるが、支那の敗戦に鑑みて、外國の事情を、研究するものも多くなつて來た。今迄のやうに、我國の武威をのみ頼んで、攘夷を、簡単に片付け得る如く、考へて居たものは、だん／＼少なくなつてゆくのであつた。

和蘭の學問が出来るので、破格の登用を受けたものも、それ迄には、可成りの數に上つて居るが、一概に、蘭學者と稱して、表面には、相當に尊重もして居たやうであるが、實は頗る軽く視て居たのである。幕吏のうちには、蘭學者の擡頭して來るのを、甚だ不快に感じて、其排斥運動も、相當に強くなつて來た。

世界の文明に憧憬れて、蘭學者を雇入れ、その講義を聞いたり、或は翻譯を爲せて、獨りひそかに研究もすれば、樂んでも居たものが、諸侯のうちに殖えて來たのも、見遁し難き事實であつた。齊彬も、其うちの一人であつて、さかんに蘭書の研究を始めたが、澤三伯が、三田の藩邸へ招かれたのも、それが爲めであつた。

當時の蘭學者で、市井の間に、毅然として、一家を成し、巔然として頭角を顯したのが、例の高野長英であつた。長英は、奥州水澤の生れて、醫を業として居たが、夙長崎へ渡り、和蘭の醫學を修め、蘭書を、さかんに讀んだ爲に、世界の事情にも通じて、鎖國主義の愚を嘲り、しきりに開國進取の説を唱へて、當路の幕吏を戒めたものであるが、其態度が、餘りに露骨であり、其所説が、頗る急進的であつたから、幕吏の奸策に罹り、入獄の憂目を見るに至つたが、火災の爲に、一時の出獄を赦され、其儘に姿を匿して、顔面の相格は、劇薬を以て崩し、しばらく地方へ

通れ、搜索の手の緩んだのを見て、江戸へ舞戻り、四谷に居宅を構へて、澤三伯と偽名して居たのである。幕府の搜索を通れ、日蔭の身となつて居乍らも、相變らず蘭學の講義もすれば、翻譯もやつて居たのだから、豪膽にして不羈の氣性は、よほど強かつたに違ひない。

齊彬は、三伯の事を聞いて、近臣を使はし、禮を厚うして、三田の藩邸へ招いた。賢明な齊彬は、三伯の長英たる事を、はやくも知つて、兵學の講義を命じ、究理學の翻譯を爲せたのみならず、藩邸へ留めて、家に歸さず、保護を加へて、身の安全を謀つてやつた。剛腹な長英も、齊彬の仕向には、氣を良くして、其命に服し、齊彬のいふ通りに、よく勤めて、其知遇に酬あた、といふ事である。

斯ういふことは、隠すほど現はるゝもので、何時しか漏れて、噂が高くなつた。諸侯の間にも知れ渡つて、終には、幕閣の問題になりかけたが、阿部伊勢守の裁量で、漸く揉み消して仕舞つた。側近の老臣も、此事については心配して、それとなく諫言したが、齊彬は、一向平氣であつた。

「攘夷開國の是非は、しばらく措いて、苟も其國の事情を知悉さずして、萬一の場合に何とするか。長英に命じて、兵書を翻譯させることは、要するに、皇國の利益を思ふからである。公儀から御咎めがあれば、余は、立派に辯疏を致す覺悟はある。和親にも開戦にも、敵狀を知らずして、果して何事が爲し得る。支那の敗北は、敵狀を知らざりしが爲めであつた」

齊彬の意見には、老臣も、口を噤んでしまつた。西郷と大久保が、曾て齊彬の事を語り「君公の賢明はいふ迄もないが、餘りに異臭紛々たるには弱つた」といふたのも、是等の事情からであつたらう。

長英の末路は、實に酸鼻を極めた。他の才能を嫉んで、獨り自ら傲がつて居る、幕吏の爲めに、捜し出され、奮闘の末、切腹して相果たのである。三州田原の藩士、渡邊華山も、長英の同類といふので、切腹して仕舞つた。最近に亡くなつた、後藤新平は、長英の甥に當る。

長英の一條から、齊彬の名は、有志の間に喧傳されて、頻りに來訪を受けるやうになつた。葦山の代官江川太郎左衛門は、確に幕末の一人傑であつた。洋式の操練と砲術を、汎く我邦に傳へた人で、鐵砲の傳來も、古くからの事であつたし、操練も、此人が元祖といふ譯ではないが、幕府の公認を経て、正式に傳へたものは、此人であつたといへる。長崎の高島四郎太夫、即ち秋帆先生が、幕府に罪を得て、禁錮の命を受けた時、進んで秋帆を引取つたのが、江



川であつた。葦山へ伴れて歸り、秋帆から砲術の秘訣を授けられたが、秋帆でさへ知らぬほどのことを、江川は、既に心得て居たので、秋帆は、舌を捲いて驚いた。江川が、屢次島津家へ出入するやうになつてから、齊彬は、藩の軍制を一新し、砲術の改良を謀つた。

二二

將軍の家定は、病弱の身で、既に三十三歳になつて居るが、嗣子が無かつた。殊に妻運のない人で、最初に迎へたのは、鷹司關白の女で、二度目ののは、一條關白の女であつたが、兩夫人ともに、引續き世を逝つて、今は夫人を迎へず、寂しく世を送つて居た。去り跡へは行つても、死に跡へは行くな、といふ諺のあつた位で、その時代には、非常に御幣を擔いだものだ。死なうと思つたら、將軍の夫人になれと、蔭口を叩くものさへあつて、三度目の夫人になるものが無かつた。家定も、病弱の身である爲に、強て夫人を求めぬ氣にもならぬらしいが、さればといふて、その寂しさうにして居るのを、御側で見て居るものは、堪へ切れぬ思ひをして、胸を痛めては居るが、假に夫人を迎へるとしても、先方の家柄は擇ばねならず、嫁てくれるなら何でも良い、といふ譯にもならないから、閨老を始め、側近の人々も、却々に苦心はして居たのである。

阿部が、齊彬を訪ねた時、圖らずも談話は、此事に移つた。

『上様も、未だ老境に達した、と申す次第でもなく、只だ御病弱に陟らせられる、といふ丈の事で御座れば、何とか御慰め申上げたたく存するが、然る可き、御方もあらば、御簾中の御周旋を下さるまいか。天下を預る御方に、正室のないと申すも畏れ入る。況して、御繼嗣さへ、之れ無き場合で御座れば、旁々御配慮を煩はし度く存する』と、阿部から自身の事のやうにして、しきりに相談を持ちかけたので、齊彬も、その苦心を察して、其日は、慰めて歸したが、幕府の内部に立入つて、諸般の改革を行ひ、外交の問題を、意の如く裁いてゆくには、この縁組を引受け

るのが、最も捷徑であるから、これは一と奮發す可き事柄である、と、齊彬は深く考へて、その周旋に、力を盡す覺悟をしたのであつた。

島津家の一門、島津安藝の娘に、篤子といふのがあつた。氣性は男勝りて、文筆の才もあり、將軍の夫人としても、敢て恥かしくない、と、此姫に眼をつけて、先づ自分の養女に貰つたが、阿部の意見に依つて、島津家から、直接に送ることは、遠慮する事にして、近衛家の養女として、改めて申込むことにしたが、斯うした策謀は、すぐ知れるもので、第一には、烈公が大反對であつた。其他にも故障は起つたが、此時には、齊彬が、非常に強い態度で、終に押切つてしまつた。烈公と齊彬の間に、面白からぬ感情が起つて、烈公は、此事に限つては、ひどく齊彬を憎むに至つた。

近衛家と、島津家とは深い因縁があつた。鎌倉幕府の時代に、頼朝が、比企頼員の女を妊娠させたが、政子の嫉妬を恐れて、遠く逃がした。その女は、遠く鎌倉を離れてから、從者に逃げられて、酷い苦辛を忍び乍ら、やうやく京地迄、やつて來た。圖らずも、近衛家に拾ひ上げられて、安産の紐を解いたが、生れたのは男子であつた。それから後にも、いろ／＼の事情があつて、頼朝は、其子を、薩摩の國に封じた。島津家の祖先が、則ち其れである。近衛家と島津家とは、斯うした因縁から、長い間の親戚交際になつて居たので、互に寒暄の挨拶を、怠らずに居た。

齊彬が、篤子を、近衛家の養女として、將軍家へ送り込むことは、名案であつたけれど、近衛家が、之れに應じてくれなければ、如何ともしやうがないのであるから、齊彬は、之れに就ても、相當に苦心したが、吉之助を、自分の代人として、近衛家へ、使はすことに定めたのである。

此の縁談は、島津家に取つて、容易ならぬ大事であつた。若し巧く行けば、齊彬が、幕政に與かつて、天下の大事に、容喙することが出来るのであるから、近衛公に、諾と言はせる、使者の役目は、容易な事ではなかつた。その使者を、吉之助に命じたのは、全く齊彬の英斷であつた。吉之助は、家格も低く、役柄も軽いのだ。輕輩の吉之助に、こ



の大役を命じた、齊彬の明敏は、恐る可きものであつた。

四

近衛家には、老女の村岡が居て、萬事を切つて廻した。男子も及ばぬ、立派な氣性を有つて居た女で、左大臣家の事は、先づ村岡に聞いてからでなければ、何事も運ばぬ、といふほどであつた。勤王派の志士が、忠烈に逢はう、としても、村岡の心一つで、それが決せられた。實際に於て、忠烈を動かすものは、村岡であつた。安政の疑獄には、村岡も、江戸へ送られて、評定所の調をうけたが、強情を張り通して、累を、近衛公に及ぼさなかつたばかりでなく、自身も放たれて、罪無きを得たほどに、豪い女であつた。

篤子が、近衛家の養女となつて、將軍家へ興入れの時、村岡は、近衛公の御名代として、篤子に従いて、江戸に來た。興入の祝儀萬端相濟んでから、京都へ歸るについて、家定に拜謁して、御暇を申上げた時、『土産を遣はさうと思ふ。其方の希望を申せ』

と、家定の御詞があつた。

村岡は、再度の辭退をしたが、家定は、しきりに繰返して、土産を望め、と仰せられたので、村岡は、嚴肅な態度になつて、

『近衛家に、忠義を盡して、死ぬほどの家臣を、拜領の儀、願ひ上げます』

と遣つて退けたので、將軍も、之れを聞いて、ぐツと詰つて、返辭が出なかつた。

村岡は、明治六年の八月十三日、八十八歳の高齡を以つて、洛西の嵯峨野なる、直指庵に於て、隔世の人となつた。晩年は、全く浮世を離れて、一切の妄執を去り、恬淡無慾の半生を送つた。嵯峨野へ籠つた時に、

雨あられはけしけれとも軒ふかき我家はそれと音も聞えず

といふ歌を詠んだ。兎に角、村岡は、豪い女であつた。

吉之助は、京地へ着くと、先づ近衛家を訪ねて、村岡に逢つた。然るに、二三回の應接であつたが、村岡は、深く吉之助を信じてくれたので、すべてが好都合に運んだ。忠烈は、篤子を養女として、將軍家へ、興入れさすことに快諾を與へた。吉之助の報告を得て、齊彬も、非常に喜んだ。將軍家の方は、阿部が引受けて居るから、異論のある可き筈はない。萬端滞りなく、準備が出来て、安政三年十二月には、御婚儀の事も濟んだ。幕府と島津家の間は、漸く接近し初めた。

此結婚に就ては、一の哀話が残つて居る。

篤子姫が之れを聞かされた時、非常な喜びを以て承知したのは、いふ迄もない事だ。其時代の事として、將軍の夫人になれる事を、喜ばぬものは絶対にあるまい。然るに、齊彬からは、更に斯ういふ事を聞かされたので、篤子姫は、非常な失望と悲哀に沈んだのである。

『お前は、上様へ嫁ぐのであるが、上様は、御病弱に陟らせられる上に、昨今は、殊にお惱みも強い、と聞いて居るから、恐らく御夫婦の語らひも、あるまいと思ふが、それは覺悟してゆくがよいぞ』

流石に、氣丈な篤子姫も、之れを聞いては、驚かざるを得なかつた。

自分は、何の爲に、結婚するのか解らない。結婚の第一目的を、全く遂げ得られない、とあつては、少し考へなければならぬ。

『妾は、どういふ理由で、左様に不幸な結婚を致すので御座いますか』

『所詮は、天下の御爲と思へ』

『はいッ』

『よいか』



「御受いたします」

其頃の女性は、實に柔順である、と同時に、斯う強かつたものだ。

「天下の御爲め」といふ一語を聞いて、自分の一生を犠牲にした上に、夫婦としての楽しみまでも、全く捨て、しまふのであつた。

篤子姫は、後年の天璋院夫人である。

安政四年の二月、参観の期が満ちて、齊彬は、歸國する事になつた。堂々たる行装で、東海道を上つて來ると、その以前から、公卿や勤王の志士の間には、齊彬を、取込んで味方にしよう、といふ議が起り、近衛公を通じて、吉之助に、此事を相談すると、吉之助も、至極同意だ、といふので、表面からは、近衛公が、齊彬へ、使者を出して、京地へ立寄るやうに促した。吉之助は、裏面から勧める。齊彬も、婚儀一條に就て、近衛公へは、御挨拶を致し度い、と思つて居られたので、雙方の都合が折合つて、京都へはいることに決したが、名義は、温泉行といふのであつた。當時の諸侯は、幕府の許可なくして、妄りに京都へ、立寄ることは出来なかつたのだ。

近衛公の斡旋で、参内を仰せ付けられ、朝廷からは、非常な優遇をうけた。齊彬は、参内の砌り、皇城の頽廢せる状態を見て、先づ驚いた。一天萬乗の陛下の皇居としては、如何にも痛ましき限りであると、心ひそかに慨嘆もしたが、勤王の大志は、勃然として起つた。

「嗚呼、區々たる幕府の改革何かある。まづ以て、皇居を整へ、陛下の大御心を、安んじ参らするこそ、臣民たるもの本務である」

と、何事を差措いても、皇室の御爲めに、盡す可く、齊彬は、堅い覺悟をした。殊に、龍顔に咫尺し奉りて、

「他日、若し事起らば、爾進んで、皇城を守護せよ」

との勅命を、賜つた時には、感泣するの外はなかつた。

齊彬は、鹿兒島へ歸る。吉之助は、君命によつて、尙ほ京都に、足を留めることになつた。月照上人との深い交情は、この際に結ばれたのであつた。



### 將軍繼嗣の問題

一

幕府時代には、普通の武家てさへ、嗣子なくして當主の歿した場合には、其家は、取潰される事になつて居た。其處で、養子の制度が、存外ゆるやかに居たのだが、徳川宗家に對して、三家三卿なるものがあつたのも、つまりは、宗家に實子の出来ぬ時、そのうちから養子を迎へる爲に、設けられてあつたのであるから、萬一の場合に對する、準備だけは、出来て居た譯である。

徳川家定は、其後も健康すぐれず、新夫人の篤子は迎へたが、それは名ばかりの夫人で、閨中の御語ひは、更に無かつたほどであるから、子供の出来る譯もなく、今迄に、嗣子の無かつた通り、今後も、その出来る見込はない。於、此當然起つて来るのは、繼嗣を迎へる問題であつた。

ペリーが、やつて来てから、その他の國も、追々に使節を送つて、開國を迫るので、幕府の狼狽と困惑は、寧ろ氣の毒なほどであつた。兎に角、米使渡來後の日本は、内外多端の秋であつたといふて、可からう。

外夷は、競ふて開國を迫り、幕府は、徒らに姑息の手段を以て、一時遁れを、遣つて居るに過ぎず、攘夷黨の鼻息は、漸々甚太くなるばかりであつた。或は、此機會を利用して、幕府を倒さう、と爲る、諸侯や有志も、追々に殖えて来た。當時の幕府は、噴火山の上に乗つて居るやうなものであつた。而かも、肝腎の將軍は、多く醫藥に親んで

居て、大事を裁斷し得ない、とあつては、天下の前途が、思ひ遣れる。何うしても、今のうちに、疾く繼嗣を定めて置かぬと、將軍に、萬一の事でもあつた場合に、それこそ一大事が起る。併し、繼嗣を定めるとしても、直に將軍の代理が、出来る人でなければ、矢張り同じ事であるから、この人選は、相當に至難しいのであつた。

先づ其資格を定めるに當つては、年齢も相當であつて、且賢明の御方でなければならぬ。然ればといふて、普通の諸侯からは、迎へることが出来ない。何うしても、尾紀水の三家か、又は田安清水一橋の三卿か、そのうちから選抜する外はないのだ。都合よく註文通りの御方が、そのうちに在ればよいが、もし無い時は、どういふ事になるか。大概なところで堪へる外はなかつたのである。

相當な年齢で、直ぐにも相續が出来る、といふやうな、それで賢明な御方、といふのだから、却々に至難しかつたが、やうやくにして見付け出した。それは一橋刑部慶喜であつた。年齢は未だ十七八の弱輩ではあるが、普通の貴公子と異つて、諸侯の間にも噂されたほどに、賢明な生れであつた。何う捜しても、此他にはない、となつた。急ぐ事柄丈けに、慶喜が可い、となれば、直ぐにも決めよう、と焦る連中もあつて、問題は、終に具體化したのである。

實をいふと、慶喜に眼をつけたのは、齊彬であつた。先づ自分の腹を定めて置き、それから巧みに宣傳したので、熱心に動き出すものが、諸侯のうちにも出て来たので、存外に、慶喜説が、高くなつて来たのであるが、篤子姫の入興に就て、施毛を曲げた烈公が、此問題から機嫌を直して、齊彬との交誼は、舊の如くなつた。慶喜は、烈公の第七子である。

水戸の徳川齊昭、尾州の徳川慶勝、越前の松平慶永、佐賀の鍋島齊正、土佐の山内豊信、薩摩の島津齊彬、宇和島の伊達宗城、福岡の黒田長濬、之れに閣老の阿部伊勢守を加へて、之れを、天下の九名侯と稱へた。大概な問題は、この九人が纏まりさへすれば、何とか處置が決く、といふ位に、勢力のあつたことは事實だ。従つて、繼嗣の一條について、大に熱心なものと、稍や冷淡なものとの區別はあつたが、誰一人として、之れに反對するものはなかつ



た。そのうちで、越前の慶永は、最も熱心であつたが、其背後からは、齊彬が、煽りつけて居たのである。吉之助は、齊彬の愛臣として、諸侯の知る所となつて居たが、殊に、越前邸へは度々使ひにも行つて、慶永にも、深く信ぜられて居た。繼嗣のことについては、先づ島津家の向背を、判然させる必要がある。折柄、齊彬は、歸國して居たので、慶永は、吉之助へ使ひを出した。その使者の役が、橋本左内であつた。慶永の智慧袋とも謂ふべき左内が、西郷吉之助との初対面は、實に此時だつた。

一一

慶永は、田安家の生れて、福井の松平家へ、養子に貰はれたのであるが、慶永といふ名よりも、春嶽の方が、ひろく知られて居た。諸侯の間にも、重きを爲して、幕閣からは、特別の取扱をうけて居た。何うかすると、調子外れのこともあつたが、大體に於ては、越前の太守として、恥かしからぬ人であつた。

橋本左内は、越前家の侍醫の子であつた。幼少い時から、他に怖れられたもので、最早十八九の頃には、堂々たる老臣が、左内の將來に注目して、大に恐れたといふほどである。當時の俗から言へば、醫者、坊主、公卿、この三者を、極めて卑しきものとして、士人の間には齒せられなかつた。殊に醫者は、一種の幫間で、婚禮の媒介や、情婦の周旋、それから地所家屋の賣買杯、あらゆる世話方を引受けたもので、斯かる下劣な、醫者の中から、左内の如うな、國士の模範とも謂ふ可き、立派な人物の出たことは、實に不思議だ、といはれるほどであつた。

春嶽が、一般から豪く見られたのも、左内のあつた爲であつた。左内が、活動したのは僅の三四年であるが、その短い活動の月日が、却々長いやうに思はれた。其所が、左内の偉い所であつたらう。春嶽は、左内の畫策を、毎に採用ひて居たので、時流を抜いた、卓見家の如く思はれたのであつた。左内が、京地へ入り込んで、公卿紳士の間に、吹込んだ議論が、後年になつてから、種々に形體を更めて、假令へば、潮に干潮のあるやうに、絶えず動いて居たの

には、只だ驚くの外はなかつた。

吉之助は、田町の藩邸へ移つて、頻りに有志との往來を續けて居た。

左内が、訊ねて來た時には、壯丁を集めて、角力をやつて居た。吉之助は、十四歳の時、決闘をして右の腕を斬られた。療法で疵は癒したが、伸が利かなくなつた。それが爲に、武術を廢してしまつたが、角力は、好んで取つた。其日も、好きな角力に興じて居たのであつたが、越前邸から、左内の來たことを、執次のものから聞いて、何と思つたか、

『可し、此所へ御通し申せ』

執次は立去つた。間もなく案内されて來たのは、色の白い、瘦形の青侍であつた。

『さア、これへ………』

縁側へ布團を敷いた。

『角力で御座るか』

『左様』

と、いつた切りで、吉之助は、左内を、デロリと見た儘で、角力の世話をやつて居た。左内も黙つて見るばかりであつた。

やがて、角力も終つて、席を移して、挨拶を爲ると、意外千萬、それが橋本左内であつた。吉之助は、思はず眼を丸くした。察するに、執次の詞が、吉之助には、よく聞取れなかつたのかも、知れぬ。

多くの場合に、無頓着な吉之助は、好きな角力の最中であつたから、左内を、普通の使ひと思つて、鳥渡待たせた位にしか思はなかつたが、左内といふことが判つて、今更らに、面目が悪く、只管に陳謝するばかりであつた。左内は、一向氣にも留めぬらしく、そのうちに、談論は進んで、繼嗣問題に移つた。左内は、京都入説の必要を論じた。



「繼嗣問題が、公表される時は、必ず有力な反對が、起つて来るに違ひない。之れに備へるの覺悟は、今から必要である。將軍宣下も、繼嗣の御届も、畢竟は、京都の御意向に由つて定まるのであるから、足下は、一日も疾く上浴せられて、公卿縉紳の間に、勸説せられんことを望む。拙者は、江戸に居つて、同志を纏める事に勉めよう。東西相應じて事を謀らば、必ず成就するに相違ないが、寸前尺鷹、少しでも油断したら、此事は、必ず破れますぞ」といふのが、左内の意見であつた。其談論のうちに、京都の事情を詳説し、公卿縉紳の内幕を語つて、一々急所を指示されたので、吉之助は、唯だ敬服するの外なかつた。

齊彬は、歸國中であつても、慶喜を繼嗣とすることは、元來が、齊彬の主張であるから、一々その指揮を仰ぐの要はなかつた。翌日は、靈岸島の越前邸へ出かけて、春嶽に謁した。左内は、言ふ迄もなく、席に列なつて居た。此時に相談は決して、吉之助は、京都へ行くことになつた。

江戸の藩邸には、吉之助の味方として、岩下方平、高崎五六、奈良原喜左衛門、有村俊齋、田中謙助、伊知地貞馨、有村治左衛門、大山格之助、伊知地正治等の連中が居た。けれども、老臣には、一人の味方が無かつた。之れほどの大問題を、老臣の耳へも入れず、餘り先走つて、萬一にも失敗した日には、それこそ一大事である、と、此點に就ては、些か閉口したが、折柄、若年寄の鎌田出雲が、薩摩から出て來たので、吉之助は、直に出雲を訪ふて、この相談に及んだが、出雲は、よく問題の性質を理解して、

「大に遣れ」と、いつてくれた。本國の老臣は、出雲が引受けて、必ず纏めるから、それ等の事に心配なく、進んで大にやれ、と迄いふたのは、或は齊彬の内意をうけて來たものではあるまいか。吉之助は、京都へ向つて出發した。

篤子の一條で、暫らく滯京した時、知己も多く出來て居た。清水寺成就院の前住職月照とは、その際からの交際であつた事は、前にも述べた通りである。梁川星巖は詩人でこそあれ、勤王の大志を抱いて、夙に有志の間を往來して

居た、老志士であつた。頼三樹三郎は、山陽先生の遺子で、山陽の志をついで、朝廷の衰運を嘆くの一人であつた。吉之助の入京を聞いて、それ／＼に訪ねて來た。吉之助は、幕府改革の必要から、外夷の要求に對する處置、朝廷への奉公振り等に至る迄、一々その意見を述べて、慶喜を繼嗣とするに就ては、熱心に同意を求めた。同志の間にも、多少の議論はあつたが、終には同意して、大に力を盡さう、といふことになつた。近衛公は、島津家との關係もあり、篤子のことから、幕府との關係も生じて居るから、公卿の方の纏まりは、引受けてくれた。

時に、江戸からの急報があつて、阿部伊勢守の死んだことが判つた。

幕府の内部は、阿部が纏めて居たのだが、阿部の死に依つて、反水戸派の力は、確かに盛返へされて、或は繼嗣問題は、破れるかも知れない。

吉之助には、その消息が、多少は判つて居ただけに、阿部の死に就て、少なからぬ失望を感じたのである。

一一一

將軍繼嗣の問題は、阿部伊勢守の死に依つて、終に頓挫した。吉之助と左内の計畫も、水の泡となつた。阿部が居らぬと、幕閣の纏まりをつけ、大奥の反對を抑へつけるものがないから、結局は、慶喜の擁立も、其效はないことになるのだ。

徳川時代の大奥は素晴しい勢力を、有つて居た。大奥に反對の聲が起ると、閑老でも、位地の危いことがある。昔から婦女の力は、實に豪いもので、諸侯の御家騒動を見るに、どれも、婦女が原因になつて居る。大奥の女中が、將軍を動かす力は、また格別であつた。その大奥が、慶喜の繼嗣たることには、すべて反對であつた。篤子姫は、將軍の夫人として、控へて居られるにしても、未だ夫分の勢力といふほどのものではなかつた。大奥が、慶喜に反對するは、慶喜を嫌つて居るばかりでなく、實は、慶喜の實父が、水戸の齊昭だ、といふことが、慶喜の繼嗣たることに、



反對する唯一の理由であつた。

副將軍の格式を以て、宗家からも、敬意を拂はれ、一般の諸侯からも、重く見られて居た、徳川家第一の親藩たる水戸侯であり、後には烈公と謚されて、水戸歴代中の名君とさへ、仰がれたほどの齊昭が、何ういふ理由で、大奥の反對を受けるのか、それには、相當の事情がなければならぬ。

齊昭は、却て厳正しい人で、平生から大奥の女中を、物の數とも爲す、些しでも不都合があれば、遠慮なくヤツツける。御親藩といへども、大奥の内情に立入つて、彼是れいふことは出来ないのだが、齊昭は、一向構はずに、叱り飛ばす、と、いつた調子が、大奥のものには喜ばれなかつたのである。大奥の女中共が、將軍の寵を恃んで、動もすると御表のことに迄、容喙することがあつた。齊昭は、それが癢に觸つてならぬから、叱りつけて抑へようと爲る。殊に、天下は泰平の餘波で、驕奢淫逸に流れ、大奥の腐敗は、殆んど絶頂に達して居た。

齊昭が、大奥の長廊下を通る折柄、御局附の女中が、文箱を持つて来るのに出會つた。女中は、疾くもそれと見て、廊下の端の方へ寄つて、腰を曲げて、頭を下げたが、文箱の中結になつて居る、赤い紐の長いのが垂れて、紐の先について居る房は、廊下へ曳いて居た。

そんなものは、多少の眼觸りになつても、黙つて通り過ぎれば、何の事もないのだが、齊昭には、それを堪へる事が出来なかつた。足を停めて、ぢつと其文箱を、見詰めて居たが、

『それは、何ぢや』  
不意の質問に、女中は狼狽した。

『文箱で御座います』

『文箱は知つて居る。その廊下へ、曳いて居るのは、何かといふのぢや』  
『これは、中結の房で、御座います』

『大層長い紐ぢやのう、短うすれば文箱の二つ三つには使用へやう。大奥のものは、冗費を知らなくて、不可のう』

女中は、何とも答へられず、只だ顔を赤くして、黙つて居た。齊昭は、苦い顔をして、行つて仕舞つた。

女中は、泣顔をして返つて來た。有の儘を、御局に話したから、御局が怒り出した。けれども、對手が、水戸の大殿では、どうにもしやうがなかつた。此事が、それからそれへ、と傳はつて、齊昭の評判は、甚だ可くなかつた。

それであるから、虚榮虚飾の權化とも言ふ可き、大奥の女中が、齊昭を嫌ふことは普通りでなく、慶喜が、將軍の繼嗣になる、といふことは、齊昭の勢力となるのであつて、謂はゞ將軍の後見であるから、例の氣性で、大奥へ手入れてもされては、それこそ一大事である、といつたやうな、狭い見から、慶喜繼嗣の一條には、反對するのであつた。

乍併、單に反對する、といふのでは、反對が物にならないから、慶喜に相當する候補を押し立てねばならぬと、なつて、其人を求めたのである。紀州家の應福は、未だ十三歳の少年ではあるが、それにしようとして、決した。紀州家の家老、水野土佐守は、一種の人物であつた。繼嗣問題には、疾くから眼をつけて、隙があつたら割込まうと、考へて居たのだ。所へ、大奥側から、内相談をうけたので、渡りに舟と、喜んで承知した。大奥の連中は、急に運動の支度をはじめた。大目附の久貝因幡守、町奉行の石谷因幡守の二人が、肝煎となつて同志を募つたので、兩派の暗闘は、日一日と、酷くなつて來た。阿部伊勢守が卒去したので、紀州派の運動は、益々はげしくなつて來た。一橋派は、殆んど受太刀の有様となつた。

四

繼嗣問題が、斯うした事情から、深刻な争ひになつてゆく、その一面に於ては、例の條約問題が、頗る面倒になりかけて來た。朝廷と幕府の間には、黒い雲が、だん／＼重なり合つて、その形勢は、甚だ峻しくなつて居るのであ



つた。

安政の假條約は、既に締結されて、調印も済んだから、宿次奉書を以て、朝廷へ、此旨を申上げた。所が、朝廷に於ては、非常の御怒りて「前以つて、朝意を奉ぜず、幕府の專斷に由つて、肆まに締結びたる、條約に對しては、裁可を與へることは出来ぬ」といふ御沙汰であつた。幕府では驚いて、林大學頭を、京都へ遣はし、勅許を求めたけれど、公卿に、油を搾られて、逐ひ返へされた。此に於て、閑老の堀田備中守が上洛して、朝廷の纏りをつける、といふことになつた。朝廷の御眞意は、攘夷に在るのだから、その根本問題を解決させずに、すぐ條約の勅許を求めよう、としても無理であり、堀田の上洛が、無効に終つたのは、當然の事であつた。

斯かる間に、紀州派の計畫は、着々進行して行く。紀州家の水野が、非常な敏腕であつて、大奥を、悉皆取り込んで仕舞つた。御表も、將軍左右のものは、大概味方にした。諸侯のうちでも、齊昭を喜ばぬものは、すべて引込んである。恰好、閑老の堀田が、條約の一件について、上洛したのは何よりの幸ひと、此に大老を、味方から出して、先づ幕閣の勢力を握り、徐ろに繼嗣の問題に移らう、といふ計畫を立てた。

當時の幕府は、外夷のことやら、京都へ對することやらで、種々の問題が起り、頗る難局に立つて居るにも不拘、將軍は、毎に病弱と闘つて、自から政治を裁理する力が絶無であるから、何人か、代つて此難局に處するものを、必要とする事は、誰にしても認めて居たのである。先きには、齊昭を總裁にする、といふ説も出た位であるから、空席になつて居る、大老を定めて、將軍に代らせよう、といふのが、大奥と通じた連中の考であつた。それには繼嗣問題が絡んで居るから、反水戸派の人でなければ、不可といふのであつた。

其結果は、江州彦根の城主井伊掃部頭直弼が適任らうといふことになつた。

その裏面には、紀州派との聯絡があつたことはいふ迄もない。堀田は、江戸を離れる迄、更に此相談を受けて居なかつた。堀田が、京都へ着したのは、安政五年四月廿日、井伊が、大老に就任したのは廿三日であるから、随分迅

速に運びのついたもので、此一事は、紀州派の大成功であつた。

彼是れするうちに、堀田は、京都から歸つて來た。公卿に奪られた賄賂ばかりが、三千兩であつた。而かも何の功もなく、條約は矢張り勅許にならなかつた。歸つて來たら、井伊が大老で、内外を切り廻はして居るので、堀田には、手を出す餘裕がなかつた。殊に、失敗して歸つた堀田としては、何事も控へ目勝に、差控へ居た。井伊は、益々手腕を揮つて、鶏殿民部大輔を、駿府の町奉行に轉任させ、大番頭の土岐丹波守も、勘定奉行の川路左衛門尉も、同時に轉役仰せつけられた。紀尾水の御三家に對しては、溜間詰の内命を下す等、專斷に繼ぐに、專斷を以つてし、六月二日には、紀州慶福を、將軍繼嗣として、御届けに及ぶといふ、迅雷耳を掩ふに暇あらぬほどに、井伊大老の活動振り

は、凄いほど目覺しいものであつた。

吉之助は、堀田が、京都を出發した後から、すぐに江戸へ歸つた。けれども、幕府から此状態では、いかんとも爲ることは出来ぬ。靈岸島に、春嶽を訪ねて、左内と共に、相談に耽つて居る折柄、堀田が來訪した、といふことを聞いて、吉之助は、席を退いて、藩邸へ歸つて來た。

堀田が、春嶽を訪ふたのは、齊彬の出府を促さう、といふ相談であつた。その使者としては、吉之助が可い、といふことになつて、吉之助は、之れより支度して、國元へ、晝夜兼行で急ぐことになつた。



### 吉之助の奔走と齊彬の死

井伊は、世間の一部でいふが如き、大政治家ではなかつた。只だ意志の強い人であつたから、一たん斯うと思ひ詰たら、それを押切る力は、有つて居たのだ。條約問題に對する、すべての遺口が、よく證明して居る通りである。と、いふても、徹底した開國主義の下に、調印を斷行した、といふ次第ではなく、當時の狀勢が、外夷の威迫に、應へる道のなかつた爲に、詮方なしの調印であつた。之れを以て、直に開國主義の人として、有難く奉つてしまふのは、氣が早過ぎる、と思ふ。

大老に押擧げられたのも、實は繼嗣問題があつたからで、條約の一件から、擔ぎ擧げられたのではなかつた。折柄の宿題でありし條約問題が、上げも、下げも、ならなくなつた結果、捨鉢の調印が、いかにも、先見の明ありし如く、見られた迄の事であつた。

將軍家定の病は、日を逐ふて重りゆくので、有らゆる名醫に診けて、治療と介抱に申分はなかつたが、如何に將軍でも、天壽の盡きたものは、どうにも致方がない。もはや快復の見込みはない、となつたから、此に於て、一日も速く繼嗣を確定する必要がある。紀州慶福の御届けは出してあるから、頻りに朝廷へ、御裁許を願つて、漸く御届けの御沙汰が下つたが、それと同時に、意外の御沙汰があつた。

大老又は御三家のうち、誰れか一人上洛せよ、とのことで、これは外夷の一條もあらうが、繼嗣の件についても、何か至難かしい御沙汰が、下るのではなからうか、と、幕府の人々は、頭痛鉢巻の態であつた。

井伊は、當時の政治家として、卓出して居た人ではあつたが、少しく才識に任せて、遣り過ぎるの傾きがあつて、何事を決するにも、迅い代りに、何うかすると、專斷に流れる弊があつた。京都の御沙汰を受けると、先づ繼嗣問題について、慶喜の爲めに、力を盡くした、尾水越の三侯に、閉居を命じ、水戸家の當主慶篤と、一橋慶喜には、登城を差止めて仕舞つた。それから、若年寄の本郷丹波守と、勘定奉行の石川土佐守の二人は、御役御免になつた。京都へは、右の事情を具申して、上洛の難きことを申立てた。

そのうちに、家定は、終に薨去せられた。齡は未だ三十五歳で、篤子夫人は、嫁いたといふ丈けて、未亡人になつた。慶福の相續を、上奏に及んで、勅許を得た。十五代の家茂が、之れである。

吉之助は、鹿兒島へ到着した。齊彬は、磯の御殿に居られたので、早速に伺候して、春嶽の書面を差出した。齊彬は、一通り御覽になつて、

『阿部勢州殿の卒去は、返すも遺憾の次第ではあるが、天命なれば止むを得ぬ。それにしても、一橋卿の御迷惑は、嘸かしと察し入る。井伊大老の振舞は、聊か我意に募られしやうにも思はれるが、斯くて打捨て置かば、幕府は、終に倒るゝの外あるまい。其方の所存はどうか』

『此上は、畏れ多きことながら、幕政改革の勅命を請ひ奉り、朝廷の御威光に由つて、閣老の改任を行ひ、大老の自儘を抑へ、諸侯の心を統一して、幕府の大改革を終り、内外の大事件を、一氣に取片付ける外は御座りませう。い。若し、之れを拒むものあらば、即ち運動の罪は免かれませぬゆゑ、處置のつけやうは御座りませう』

『至極の良策と思ふ。其方取り敢へず、余の名代として、京都へ上り、朝臣の意見を叩くことにいたせ』



『ハツ、委細心得ました』  
 齊彬は、同志の諸侯へ、書面を認めて、之れを吉之助に與へた。  
 吉之助の屋敷へは、志を同うするものが、追々と訪ねて来る。奈良原喜八郎(繁)、仁禮半助(景範)、村田新八、有馬新七、柴山愛次郎、有村治左衛門等は、今後の策について、思ひ／＼の意見を述べて、西郷の意見も尋ねるのであつた。  
 既に旅装も整ふて、君命の下り次第に、京都へ向ふ支度は、すつかり出来た。所へ、不意に訪ねて来たものがあつた。それは、中村半次郎であつた。

一一

同じ藩士であるにも不拘、重い軽いの區別を割けて、重く扱はれるものは、軽い方のものを、酷く侮蔑む、といふ風が、どこの藩にもあつた。それが爲に、輕輩の一語は、武士の身に取つて、無上の恥辱として、憤慨するものも多かつた。

薩藩にも、上士と下士の別があつて、極く低いものになると、城下の屋敷町にさへ、住ふことを許さず、遙に町家を離れた所に、一部落をなさしめて置いた。俗に謂ふ、吉野村は、其一つであつた。

中村半次郎は、輕輩中に於て、更に輕きものであつた。城下外れに、一部落を爲した。吉野村に住んで居たもので、『吉野唐芋、紙漉武士』といはれた、その紙漉武士の一人が、中村であつた。けれども、流石に、後年の桐野利秋となるもの丈けあつて、那邊か異つた所があつた。紙漉武士といはれる位であるから、貧乏生活はいふ迄もなく、武術の修業も、思ふやうに出来なかつた。  
 けれども、負けぬ氣の中村は、豊前の彦山大權現へ祈願をかけ、その奥院へ籠つて、腕を研いたものであつた。夜

も更けて、木芽も眠る、といふ刻限になると、一本の木劍を携へて出かけ、立木の枝と、幹の分れて居る、俣を眼がけては、力にまかせて撃下すのだ。最初は、力ばかり入れて撃つから、手に響が強く、木劍を放すことが多かつた。それが漸々修練て来ると、氣合も共うち下す、木劍のさえて、木の股が双物で切つたやうにさける。後には、中村流の抜撃といふて、浪士の仲間て、評判になつたほどの手練は、斯うして磨き上げたのである。文久元治の頃、京阪の地を荒らし歩いて、通りかゝりの浪士と衝突しては、終に決闘になると、身構への一刹那に、一刀に斬りつける、その抜撃の迅さは、受けるも流すもあらばこそ、刀の閃くと、對手の斃れるのが、同時であつた。されば、中村の抜撃と聞いて、慄慄の浪士も慄へた、と傳へられてある。

序に在りて置くが、桐野は、謂ゆる劍術といふものは、少しも習はなかつた、只だ心得て居たのは、此抜撃の一手丈けであつた。その外には、度胸勝負で、我流にやつつけたのである。

それほどの人ではあるが、惜い事には、學問がなかつた。聊か思慮に於て、缺くる所があり、陸軍少將になつてから、或る人に向つて、

『もし、乃公に、日本外史が讀めたら、天下を取るが』  
 と、語つたほどに、學問の方は、實に駄目であつた。

明治戊辰の歲、會津の城が陥落て、藩主の容保は降伏した。此に於て、城の受渡を爲る事になつた。監軍の板垣退助は、城受取の役を、謹に振當てよいか、それについて苦心をした。由緒ある名城、而も順逆の大道は誤つたにもせよ、徳川宗家の爲めに、最後迄の働きをして、四十日の長い間孤軍奮闘、以て官軍を惱ましたのは、有繋に感服すべきである。今や策空しく力盡きて、終に降伏したのであるが、その取扱ひの上には、恥辱を與へぬやうにしてやりたい。殊に、此名城を受取るのだから、方式に外れた、所置を取るやうなことがあると、後日の笑ひを残す事にもなる。その適任は誰であらうかと、しきりに思索したのであつた。



時に、中村半次郎が、自ら其役に當らう、といひ出した。板垣も、中村の剛勇の士であることは、よく知つて居るが、果して此大役を、消化し得るや否は、少し怪しくも思はれた。と、いふて、足下では至難かしいとも、言へなかつたので、一應の心得を申渡して、中村に、此役を許した。中村は、名譽ある大役を引受けて、城中にはいつた。然るに、中村の取つた處置が、すべて壺にはまつて、少しも筋道を誤らなかつた。寛嚴宜しきを得て、立派にやつて退けたので、板垣も、胸を撫下すと、同時に、中村の才幹には、頗る感心した。

奥羽征討も終了を告げて、東京へ引上げた。中村は、桐野利秋となつて、陸軍少將に昇進した。某所の宴席で、この話が出た時、『桐野が、何うして城受取の方式を知つて居たか、實に不思議だ』といふて、之れを質したものがあつた。すると、桐野の答が面白い。

『西郷先生に従つて、江戸へ着いた時、戦闘は始まらず、毎日の雨天に、徒然ではあるし、困つて居ると、直ぐ近傍に講釋場があつて、軍談をやつて居るから、それを聞きに行くと、戦國時代の話で、何處やらの城の受渡しを軍談師が演べたのを聞いて、よく記憶えて居たから、會津の時は、その儘行つたのぢや』

と、いつて、大笑した。

『それにしても、文書のこととは、何うしたのか』

『そりやア、山縣小太郎が、皆やつたのぢやよ』

此問答で、事情は分つたが、それからは、桐野の評判が、一層良くなつた。すべてが明ツ放して、少しも偽り飾らぬところに、桐野の眞價はあつたのだ。

桐野の詞のうちにある、山縣といふ人は、豊後の竹田の生れて中川修理太夫の家臣であつた。小河彌右衛門、廣瀬武重等の同志と、藩論に背いて、勤王を唱へ、入牢を命じられたこともあり、軍學に精しい、立派な人物であつた。日露戦争で有名な、廣瀬中佐は、此山縣の訓育をうけて、那アいふ人格をつくり上げたのであるが、武重の子が、即ち廣瀬中佐である。

中村時代の桐野には、逸話が、頗る多く残されてある。美しい逸話もあるが、その半面には、殺戮を恣まにし、野獸の如き人でもあつた。幕末に、京阪の地方を荒した、浪士のうちに於ても、この人ほどに、人を殺したものは多くなかつた。明治の御代となつて、陸軍少將の地位を占め、陸軍部内の名物男、と呼ばれた頃、夜半になると、悪夢に襲はれて、何うも眠れないで弱つた。其處で、妾を抱へるが、大概は三晩と續かずに、逃げ出してしまふ。之が評判になつて、英雄は色を好むから、多く居附かないのだ、といつて、揶揄ふものはあつても、桐野は、苦笑して答へなかつた。

妾の居附かないのには、斯うした事情があつた。桐野は、夜半になると、必ず『うーむ、うーむ』と呻吟つて、布団の上を轉がるのが、毎夜のことであるから、同衾をして居る妾が驚いて、

『もうし、旦那さま』

と、揺起す。桐野は飛起きて、四邊を見廻し乍ら、

『また夢か、ハツハ、、、』

全身は、びっしより汗に、濡れて居る。

『夢を御覽になりましたのですか』

『うむ、左様ぢや』

『何んな夢を……………』

『まア、汗を拭いて呉れ』



妾は、夢の事を聞き度いなのだ。  
「呻吟されておいて遊ばしましたのね」  
「ウム」  
「どんな夢でした」  
「つまらぬ夢ぢや」  
「でも、何んな夢を……」  
「慶應二年の十二月ぢやつた。京都の三條通りで、ぶち斬つた奴が今出て來居つたのぢや」  
「エツ、それでは幽霊が生まれたのですか」  
「少しは怨みも受けるぢやらうよ」  
妾は、夜の明けるのを待兼ねて、驚いて逃げて了つた。

大概な妾は、三日と續かなかつたが、最後の妾で、お秋といふ婦人が、之れを辛抱し通した。此婦人は、よほど膽玉のしつかりした奴で、夢の話をする時、其後を聞きたがつて、面白さうにして居た。桐野には、此女は氣に入つたらしかつた。明治六年、征韓論が破れて、歸國する時、お秋を圍ふてある、下谷池の端の宅へ、やつて來て、菊一文の短刀を、記念に與へた。それが、十年の戦争の時分に、錦繪になつて賣出された。人を多く殺したものが、晩年になつてから、夢に襲はれることは、管に桐野ばかりではなく、實例は、他に幾何もある。桐野の物語が、少し長くなつたが、桐野の爲人の一斑は、ざつと斯うであつた。その桐野が、中村半次郎と謂つて居た、極く若い時分に、西郷を訪ねて來たのだ。西郷は、對手の身分に依つて、其取扱を、二三にするやうな人でないから、すぐ面會して、親切に話をしてやつた。中村は、心の内に「この人は豪い人だ。拙者が輕輩だ、といふのに、少しも卑ますずに、逢つて呉れた。此人の爲めには、死んでもよい」と、思つた。吉人も謂ふた通り「人生感意氣」で、西郷に逢つたものは、皆な此調子で魅せられてしまふのである。中村の歸つた後で、弟の吉次郎が、苞に入れたものを出した。「中村殿が、持つて來た、土産で御座る」  
「そりや、氣の毒な」  
吉次郎が、開けて見ると、芋が三本はいつて居た。薩摩は芋の本場だから、吉次郎は、思はず失笑した。「こりや、芋ぢやツた」  
吉之助の眼は、ピカリと光つた。  
「何を言ふか、馬鹿ツ」  
吉次郎は、縮み上つた。  
「人の志ぢや。贈物に、厚薄の別はない。中村殿は、赤貧の人だぞ。その人が、この厚い志、何として之れに酬ひやうかと、それに苦む可きが當然ぢや。笑ふといふことがあるか」  
千古を通じて、偉人として、現世にまで語られる人は、また格別なものだ。中村は後ちに之れを聞いて、泣いたといふ。西郷の後を逐ふて、城山一片の烟と消えたのも、一朝一夕の交りからではなかつた。

安政五年の七月、齊彬の命に仍り、吉之助は、愈々出發することになつた。幕政改革に就いて、京都の朝臣を動かさう、といふのだから、今度の入京は、却々の大役である。途次に、博多へ廻つて、黒田侯にも見えて、齊彬の意見を申し上げて、それから晝夜兼行で先づ大阪へ着し、土佐堀の藏屋敷にはいつた。此處には、吉井幸輔が、詰めて居るので、之を伴れて、京都へ來たが、吉之助は、少し考へがあつて、殊更と邸へは行かず、錦小路柳馬場で、鍵直といふ宿屋へ泊つた。此家の主人といふのが、武士も及ばぬ魂を、有つて居て、吉之助とは、豫ての知己でもあるか



ら、泊まり込んだのである。

吉之助の入京と聞いて、追々訪ねて来る、同志の銘々は、代る／＼に、吉之助が歸國後の事情を、詳しく物語つたので、幕府の成行も、大概は判つた。吉之助は、心ひそかに考へた。『姑息の改革は、百害あつて一利がないから、幕府は、寧ろ倒した方が可い。根本から洗ひ上げて、全く新しいものをつくるのが、結局は、皇國の利益かも知れぬ。幼い將軍を擁して、井伊大老初め、愚にもつかない幕吏等が、勝手氣儘まの仕放題では、實に沙汰の限りである。斯かる場合に、何んな改革を唱へた所で、何の甲斐もあるまい。それよりか、寧ろ幕府を廢して、王政復古の御代を、開いた方が、天意にも叶ふた順道であるから、先づそれが宜からう』と、吉之助の心の底は、既に此時に、倒幕と決したのであつた。

此頃の京都は、浪人や有志の落込む所て、天下大亂、國家騒動を祈る連中が、彼方に一團、此處に一組と、物凄くほど集まつて居た。攘夷開國、佐幕勤王、議論と立場に相異はあつても、畢竟は長い間、泰平に倦んで、血に渴したものと、功名に憧れるものと、有らゆる種類の人が、種々の目的を以て、集まつて來るのであつた。王城の地丈けに、佐幕派の勢力が、一番に弱く、皆な勤王論の傘の下に、肩を聳かして立つ。少しは無理でも、勤王何々と稱へて、暴力を揮ふものもあつた。

勤王派の横暴が、追々はげしくなるに伴つて、倒幕派の勢力も強くなつて來た。何時か之れが、江戸へ響くと、徳川幕府に取つて、等閑に出來ぬ事であるから、京都へ手を入れる、覺悟も決いて來た。伏見奉行の内藤豊後守を、新たに京都取締として、京極荒神口へ、新邸を造營する。大老井伊直弼の本城、彦根が京都に近いのを利用して、江戸との聯絡を取るやうに、其計畫も建てられた。

井伊の家臣に、長野主膳といふ怪物があつた。九條關白の執事、島田左近といふものと、兄弟のやうにして居る。九條尚忠が、佐幕派である關係から、百事は、主膳と島田が、力をつ一つにして、關白の役をつとめる事になつた。與

力の渡邊金三郎、嘉納繁三郎、目明しの文吉が、その下を働くのだ。文吉は、後に三條磯へ、首を曝らされた奴だが、近年まで生きて居た祇園の老妓、中西君尾は、文吉の娘で、井上馨が、文久年間に、情婦にして居たのは、即ち此君尾であつた。

吉之助は、倒幕の見込みが、充分にあると見たから、急飛脚を、國元へ走らせた。齊彬の上洛を、促がして一と仕事しよう、と爲るのであつた。京都に居て、巧く舵を取るものがあれば、天下の形勢は、必ず變ずるものと見たらしく、齊彬の上洛は、まさに幕府の死活が、岐るゝ所であつた。

國元から飛脚が來た。吉之助と藩邸と、兩方への書面であつた。披いて見て、吉之助は、喪神する迄に驚いた。『安政五年の七月八日、齊彬公は、自ら天保山の練兵を指揮して、終日、炎天の下に、御觀兵遊ばしたが、前日より下痢の氣味で、幾分か疲勞もして居られたのを、此日は推してのことであつた爲に、御歸邸の後、俄かに病革まりて、醫藥の手當甲斐もなく、十六日に卒去せられた』

といふのであつた。

吉之助の一代を通じて、此時位、悲痛の感に打たれた事は、二度とあるまい。倒幕の計畫は、假し破れても、再舉の望みがある。人間の逝つたのは、如何とも致方がない。千里の名馬も、伯樂を失ふては、街頭の馱馬に均しく、齊彬に離れた吉之助は、其前途に、果して何を夢見たであらう。



### 安政疑獄の發端

一

齊彬の卒去は、餘りに突然であつた。世子の間が四十三年、藩主となられて僅に六年、何といふ不幸の人だ。併し、長い世子の間は、藩主と同じやうに見られて、各藩の主人から、厚い尊敬を拂はれたことを思へば、藩主たるを將た世子たるも、いづれにしても、齊彬の身に取つては、大した、差はなかつたのである。只だ人間の壽命から考へて、僅に四十九歳では、短かすぎたやうにも思はれる。

朝廷に於かせられても、深く其死を惜まれて、贈るに從三位を以てし、大納言に叙せられた上に、猶且、照國の神號を賜ふた。城山の麓に在る、照國神社は、即ち齊彬を祀つたものである。

病の重きを知つて、齊彬は、久光を招き、懇々と遺言をせられた。それは『自分には、家督を譲る可き男子がないから、久光の子忠義を以て、家督を襲がせ、久光は、其後見として、長く島津家を、守つて呉れ』とのことであつた。此に於て、忠義は、島津家の當主となり、久光は、後見職として、藩の實權を左右することになつた。忠義は、茂久の事である。

齊彬を知る人は、皆な其早世を惜んだが、殊に烈公と春嶽の落膽は、最も甚だしかつた、と傳へられて居る。薩藩の家臣としては、吉之助の失望、これは亦格別であつた。謂はゞ自分を見出して、重く用ひて下された大恩人

でもあり、これよりは其恩に酬ゆ可く、大に天下の爲に、盡さうと考へた折柄、此人を亡くしたのであるから、一時は、其方向にさへ迷ふほどであつた。

失望の餘り、殉死の覺悟さへしたのであつたが、沈思黙坐、幾日かの後には、更に亦、豁然として悟る所があつた。『自分は、今天下の大事を、眼前に控へて居るのだ。齊彬公の御逝去は、悼ましいには違ひないが、生者必滅の理ならば、これも是非がない、自分は、君恩の御蔭を以て、諸侯にも、知遇を辱うして居るのみならず、今は多くの同志もあるのだから、此上は、一段の奮發を以て、亡君の御遺志を承け、朝廷の御爲に、粉骨碎心致すが、亡君に對する、萬分一の御報恩である』

と、嗟嘆の心を忘れ、失望の淵から、這ひ立つて、再び活動す可く、堅く決心をしたのであつた。

けれども、倒幕の事は、當分は望みがないから、これからは、徐ろに進んでゆく外はない。それにしても、自分の位地は低く、今迄は、齊彬公を背景として、幾分の信用も繋ぎ得たが、今後は、何人かを押立てる外に、策の立てやうはない。

吉之助は、千思萬考の末、月照を訪ねることにした。

月照は、大阪の生れで、元は醫者の子であるが、夙く佛門に入つて、成就院の住職になつた。當時では、弟の信海に、席を譲つて、隱居の身になり、公卿堂上方へ出入して、多くの信者を有つて居たが、殊に、近衛忠熙は、深く月照を信じて、何事の相談にも、與かつて居たのだ。

『オー、西郷さま。よう御出下された』

『ちと、御相談の次第があつて、まゐりました』

『それは、どういふ事ぢや』



『齊彬公に先立たれて、一切の計畫はみな、水泡に歸した譯で、此上に、もう一働き致して見たい、と思ふて、いろいろ考へても見たが、どうしても誰か一人、心棒として押立てる御方がなくては、折角の働きも、纏まりがつかぬ譯であるから、俺どんの考へては、水戸の御隠居様に、お願ひして見たら、と思ふが、貴僧の御考へはどうぢやらうか』

月照は、珠數を爪繰りながら、憤しやかに、吉之助のいふことを、聞いて居たが、

『それは、良い御考へぢや。只今の處では、水戸様の外に、此難局を押切る御方はありますまい』

と答へて、口の内に、何か唱へ事をして居る。

『それに就いて、貴僧にも、御力を貸して貰ひたいのぢや』

『世捨人の拙僧に……』

『井伊大老の爲めに、ひどく押付けられて、駒込の別邸に、蟄居して居られる齊昭公、それを引出すには、並一と通りの手段では見込がない。これには左府公を動かして、朝廷の御内沙汰を仰ぐ外あるまい、と存ずるのぢやが、貴僧は、どう考へられるか』

『名義は、どういふ事にいたすおつもりか』

『幕政の改革をいたして、外夷に對する處置を定むる、といふのぢや』

『うむ、可からう』

『お骨折下さるか』

『承知いたしました』

これで相談は終り、細かいことは後日として、吉之助は、歸つて來た。

月照は、近衛家を設けた。七月廿五日になつて、幕政改革の内輪を、齊昭へ下される事になつた。その御内輪を、齊昭へ、執次ぐ役は、吉之助であることは、改めて云ふ迄もない。此策謀は、可成り至難の事であるが、當時の吉之助としては、此外に、取るべき道はなかつたのである。齊昭の心一つで、決する問題ではあるが、果して其れが、どうなるか、疑問であつた。

井伊大老の妄斷を以つて、齊昭が、駒込邸へ押籠られた時、藩士の激昂は容易ならず、血氣の若侍は、小石川邸に打寄り、まさに不穩の事あらんとしたのを、御當主の慶篤侯が、漸くに説諭して鎮めた、といふほどであつた。疇癖の強い齊昭は、時事の日に非なるを慨いて、悲憤腕を扼することもあり、或は沈鬱して、一日を黙々として、送ることもあつた。

齊昭の侍婢に、登喜子といふて、五十二歳になる婦人があつた。妙齡い時から、一生奉公で、御殿へ上つたのだが、世に謂ふ男優りの女で、この度の變についても、入一倍の苦心をして、それとなく病氣を申立て、一時の暇を乞ふて、家を下つた。登喜子は、老母に打明けて、水戸家の内情と、齊昭の境遇を語り、自分の決心を告げた。その母は、既に七十六歳になつて居たが、登喜子の決心を聞いて、すぐ同意してくれたので、登喜子は、涙と共に、別れを告げ、旅の支度も勿々に、京都へ志して出發した。着京の後には、傳手を求めて、三條實萬卿に仕ふることになつた。斯うして、漸々三條卿に取り入り、朝廷の威光に纏つて、主人齊昭の閉居を解いて貰はう、とするのであつた。登喜子は、和歌を善くして、雅號を利恭といふた。

敷島の道辿る身はささ蟹の、雲井の庭にひかれ出にけり

玉鋒の道は荒れても進みゆく、やまと心の駒をたゆまし

この二首の歌によつて、三條卿の知る所となつた。吉之助は、三條卿の紹介で、豫て登喜子に逢ふて居たから、今度の江戸行についても、登喜子よりは、齊昭に、吉之助東下の事情は、前以て知らせて置いたのである。



幕府が、京都へ注意して居たことは、實に容易でなかつた。反幕派の進退に就ては、その一擧手一投足も、役人の帳面にはすぐ書入れられるのであつた。殊に、西郷の一派は、將軍繼嗣の件から、常に疑惑の眼を以て、注意されて居たのである。西郷も、能く其事情は知つて居るから、更に油断はなかつたが、今度の江戸行きは、その日のうちに知れて居たのであつた。

與力の渡邊金三郎は、その道にかけて、敏腕の評判ある人であつた。幕府の爲めになつて、勤王派の壓迫には、可成り功を擧げたが、勤王派の浪士には、蛇蝎の如く恐れ、終には、石部宿で、土州人の岡田以藏等に斬られて、首は、四條河原へ曝された。渡邊の手下になつて、探偵を遣つて居たのが、例の目明し文吉であつた。與力は、今の警部で、目明しは、刑事巡査である。文吉が、又た豪い奴で、これはと見込みをつけたら、決して適さぬといふほどに、不思議の腕を有つて居た。目明しの中でも、親分株の奴であつた。

『目明し文吉、罷り出でました』

『うむ、文吉が参つたか』

渡邊の役宅へ、文吉は、呼ばれたのであつた。

文吉は、席に着くと、すぐに口を開いた。

『旦那ツ、お見込みの通りでした』

『左様だらう』

と、金三郎は、得意の色を浮べた。

『彼奴は、明日の未明に、出立するさうですぜ』

『東か、西か、方角は何處ぢや』

『矢張り東ださうです』

『可し』

渡邊は、思案に沈んだ。

『手を付けませうか』

『用件の見込み、どう聞いた』

『判然はいたしません、近衛様のお邸へは、たび／＼出入もして居りますし、鶴飼親子も、二三日前から、入浸りぞ御座ります』

之れを聞くと、金三郎の眼は、鋭く光つた。

『ふうむ、而て見ると、何か大きい望みを有つて居るな』

『何しろ、彼奴の事ですからな』

流石に事馴れたもので、渡邊はすぐに察した。捕物に就ては、抜目のない男だが、吉之助の所屬が、九州第一の薩藩丈けに、確然な證據を掴まぬ限り、迂闊とは手がつけられぬのであつた。さればといふて、この儘ま江戸へ、手放すも残念と考へたのである。文吉は、極めて無雑作な男であるから、

『善かれ悪かれ、捕つて抑へて、一と責めしたら、白いか黒いか分りませう。取り敢へず、縛つて仕舞ひませうか』

『まア、待てツ、小諸侯なら格別だが、何しろ薩藩の家臣丈けに、不用意に手をつけて、後の祟をうけては莫迦らし

いからな』

と、言はれて見れば道理でもある。しばらく考へて、文吉は、少し乗出した。



「斯うしたら、何うでせう」  
 文吉が聲をひそめたので、金三郎の膝が進んだ。  
 「兎に角、彼奴を出發して置き、私の一了見から追ひかけた事にして、大津か草津の邊りて、縛つた上で調べたら、必定書いたものゝ一枚や二枚は出ませうから、それに故障をつけて引立てたら、どうでせう。萬一も手掛りがなかつたら、私の失策として、何とか胡麻化しはつきませう」  
 「流石ぢや。然らば左様して貰はうか」  
 此に於て相談は極まつた。

昔も今も、探偵吏の了見は、みな同じ事である。人の迷惑は、いくらでも堪忍する、といった調子でなければ、此役目は勤まらぬのかも知れないが、見當をつけられたものは堪まらない。今でも、擧動犯とか浮浪罪とか稱へて、先づ拘留處分にして置いて、それから見込みの事件について、調べを爲るといふのだから、間違へられた所で、喧嘩にもならねば損害も取れぬ。見込み違ひ丈けてば、免職にもならずにすむのだから、捕まつたものは斷念める外ないのだ。吉之助は、身にふりかゝる大難が、眼前に迫つて居るのも、知らぬが佛で、鍵直の勝手口から、こつそり出發したのである。

早曉、東の空が、漸く白んだ頃だ。京都を離れて、大津街道を急ぐ、肌觸りのよい夏の朝風に気分も爽快しくなつた。急げば間もなく逢坂山、道側の掛茶屋で、しばらく休んだが、勧められる儘に、轎を雇つた。見え隠れに、尾いて來たのが、目明の文吉であつた。部下の二人も、姿を變へて、見張つて居る。吉之助は、網にかゝつた鳥と同じだ。吉之助は、纏て轎に乗つた。重いので四人が擔ぎ、肩替は、二人附いて居る。

酒代の廻りがよかつたか、轎夫の足は、存外はやく、大津へ着くと、休む間もなく、すぐに轎を代へて、飛ぶやう

に急がせた。その晩は、草津の迫りと、豫て定であるので、とある旅館へはいつた。入浴を終り、食膳に對ふと、隣室の騒ぎが酷いので、手を拍つて、下婢を呼んだ。

「お呼びなさいましたのは、此方で御座いますか」

「うむ、さうぢや」

「只今、もう一人のが、すぐまゐりますから……」

と、いつて、すぐ行かう、とした。座敷の受持が違ふのであらう。

「これ／＼」

「ハイ」

「給仕をしろ、といふのぢやない。鳥渡聞き度いことがあつて、呼んだのぢや」

「ハイ」

「隣室の客が、大分騒がしい。何事か起つたのか」

「はア、それで御座りますか、急病人が御座いまして、お医者様が、來たので御座います」

「急病人……何んな病人か」

「吐いたり、瀉したりするもんですから……」

「コロリか」

「何で御座いますか。もしか、それだと大變だ、といふので、騒いで居るのです」

「左様か」

下婢は、行つて仕舞つた。吉之助は、身體こそ大きかつたが、病氣は大嫌ひであつた。殊に、流行のコロリは、恐ろしい病氣だから、流石に薄氣味悪く思つて居た。



受持ちの下婢が、徳利を持つた来た。

『旦那さま、お待ち遠う御座いました。臺所が、混合つて居たので、遅くなつてすみませんでした』

『徳利は、其處へ置いて、お前は、帳場へ行つて、勘定書を貰つて来るのぢや』

『御勘定は、明朝で宜しう御座います』

『泊まるのではない。これから出立するのぢや』

『御泊りぢやないのですか』

『急に用事を、思ひ出したのでな』

『明朝はやく出立になりましたら、如何で御座います』

『まア、いゝから勘定書を、取つて来てくれ』

『へー』

下婢は妙な顔をして、立つてゆく。しばらくすると、番頭が出て来た。

『エー、お疲れさまで……何か下婢が疎忽でも、いたしたので御座いますか、幾重にも御託を申し上げますが、どうぞ御泊りを願ひたいもんで、へー、へツへ、へ、へ、へ』

『イヤ、決して左様なことではない。急に思ひ出した用事があつてのことぢや』

『それでは、何うも致方が御座いませんですが、この後は御最負を……』

と、頻りに愛嬌を振撒きながら、勘定書を出した。吉之助は、支拂ひを濟ませ、食事も匆々にして、その旅館を出た

が、實は病人と隣り合の爲に、出て来たのであるから、直ぐにも何處かへ泊りたいのだ。少し来ると、柏屋といふ旅

館があつた。

『エー、お泊りさまで、へい、有難う存じます』

客引の世辭を聞流して、

『お前の家には病人は居るまいな』

と、訊いた。

客引は、變な顔をした。

『病人は居りませんです』

『然らば、泊つて遣はす』

『有難う存じます』

下婢の案内で、六番の座敷へ通された。

『御飯は……』

『最早濟んで来たのぢや。すぐ寢かして呉れ』

『ハイ、それでは、只今お床を……』

茶を飲みながら一呼吸した。隣室から漏れて来る、私語が何となく、氣になつたので、密と立つて、襖越しに聞

くと、

『今も言ふ通り、却々手強い奴だから、翌朝は、しつかりやつてくれ』

『そりやア親分、大丈夫です』

『兎に角、隣室ぢやア、名代の西郷だからな』

流石の西郷も驚いた。自分の事に就て、打合をして居るのであつた。尙ほ耳を澄まして聞くと、彼等は、京都から

従つて来たらしく、親分といはれて居る奴は、慥かに目明し文吉である。危い哉、若し彼の病人がなかつたら、

と思ふと、流石に慄然とした。



また身仕度をして、帳場の前へ、出て来た。これを見た番頭は、丁寧に頭を下げた。  
 「那邊へか、おでまして……」  
 「イヤ、出立いたすのぢや」  
 「御出立で御座いますツて……」  
 「急に思ひ出した用事があつてな。これは少くないが、茶代の印ぢや」  
 いくらかの金を投げ出して、急ぎ外へ出たが、暗きに紛れて、大津の宿を、立ち去つた。

一一一

目明しの文吉は、翌朝はやく起きた。未だ日は昇らず、四邊は薄暗かつた。部下と共に支度して、柏屋を出かけると、西郷の泊つてる旅宿へ、先づ部下を遣つて、西郷の状況を聞かせた。すぐに部下は、呼吸をはずませながら、かけ戻つて来た。

「親分ツ」

「何だ、騒々しい、静かにしろ」

「大變てすぜ」

「何うした」

「逃られやした」

「エツ、逃げたと」

「ヘイ、昨夜のうちに出發たさうです」

文吉は、思はず額を抑へた。

「サアしまつた。張込みをつける迄には及ぶまいと、油断をしたのが、此方の失敗だつた。今更に仕方がねえ、遠くは行くまいから、それツ、追ひかけろ」  
 血眼になつた文吉等は、東を指して、西郷の後を逐ふのであつた。

吉之助は、費用を厭はず、早輪を雇つて、乗替へく急ぐほどに、四ツ時(午前十時)には彦根に着いた。

煙草一ふく、吸ふ間もなく、新足の人足を選んで、驕を急がせたが、恰で、宙を飛ばやうであつた。八ツ時(午後三時)には、柏原へ着いた。所が一つ、此に困つたことは、これから赤坂へかゝる間に、關所がある。嚴重しいのは評判の關所で、街道第一である。さて、之れを何として通つたものか、薩藩士西郷吉之助で通るのは、何の造作もないが、それでは逐ふて来る、文吉等に、行先を教へるやうなものだ。西郷も、これには殆んど困つて、道側の石に腰を下して、獨り思案に沈んで居ると、一人の馬子が、馬を曳きながら、遣つて来た。吉之助の前を、通り過ぎようとしたが、足を停めた。

「やア、西郷の旦那様ぢやねえか」

不意に聲をかけられて、吉之助も顔を上げて見た。

「オー、六藏か」

「旦那様、何うしたで御座えやす」

京都の邸へ、出入して居た、博勞の六藏といふ奴であつた。存外の正直者で、西郷も、幾分か眼をかけてやつたので、六藏は、それを徳として居るのであつた。うまいものに出逢つたと、心のうちに喜んだ。

「お前に、少し頼み度いことがあるから、此處へかけてくれ」

腰掛の石を、半ばゆづつた。

「旦那様、私し之れで宜いだ」



六藏は、傍の草の上へ、腰を下した。  
『何で御座えやすかな』

『外の事ではないが、邸を出る時に、關所切手を、忘れて参つたのぢやが、今ま此處へ来て、始めて気がついて、先きを急ぐ御用で、困つて居る所ぢや。これから邸へ取りに歸ると、御用が缺ける。さればといふて、この儘では通ることも出来ず、何とか、お前に、工夫がなからうか』

六藏は、暫らく考へて居たが、

『よろしう御座えやす。御邸では長年、御恩になつて居りやすから、斯う致しやせう。失禮では御座えやすが旦那様が、私のやうな馬子になつて、私しと一途にゆくので御座えやす。私し、關所の役人は、皆んな知つてるだから、何とかして胡魔化すべえ。旦那様、馬子になれやすかね』

西郷は、手を拍つて、

『これは、至極の妙案ぢや。何うぞ左様して呉れ』

『それぢや。私しの家へ寄んなさいませ。どうせ、關所の傍だて……』

『よし〜』

これから、吉之助は、六藏の家へ行く。馬子の姿に變つて、衣服大小その他の物は、荷造をして馬の脊に載せた。何う見ても、本統の馬子としか見えぬ。六藏は笑ひながら、

『旦那様ツ』

『何ぢや』

『馬子にも衣裳だて、よく似合ひやしたよ』

吉之助は、思はず失笑した。

『ハツハ、、、お前は、面白いことをいふのう、馬子にも衣裳とは、斯ういふことを、いふのぢやないぞ』

『左様かね、けれども、馬子に見えたら可かつべえ』

『そりや、さうぢや。馬子に見えんでは、困る』

『けれども、旦那様、關所へ行つたら、黙つて居なせえよ、あにか云ふと、お武士だからね』

況して、語は、國の手形ともいふて、隠しても隠せぬは、薩摩訛りである。百事は六藏まかせて、關所も通りぬけた。

赤坂へ来て、それから大垣へぬける。名古屋へ出てから、東海道へかゝつた。鳴海の宿へ着くと、折よくも、兼ねて知己の水戸藩士、飯島といふ人に逢つた。これも江戸へ歸るのだと、聞いて、吉之助は、其供廻の一人となり、水戸の家来として、江戸へ乗込んだ。

目明しの文吉は、手を空しくして、京都へ引返したが、此時の事は、よく繰返しては、口惜しがつたといふことだ。

四

小石川の水戸邸には、安島帯刀といふ人が居た。家老を勤めて、御隠居の齊昭には、非常の御氣に入りであつた。たへて吹く嵐の風のはけしきに、何たまるへき木々のしらつゆ

これは、後に安島が、有名な安政獄に引ツかゝり、切腹した時の吟咏である。吉之助は、豫て安島とは、親しく交つて居たから、此人に依つて、齊昭へ、内勅を傳へ、併せて其出蓋を促がす覺悟であつた。著府して直ぐに、安島にも逢ふたが、考へた通りには運ばなかつた。

齊昭は、例の繼嗣の問題で、井伊大老に、酷く極めつけられて、今では駒込の邸に、閉居の身の上となり、それからといふものは、謀叛人同様の取扱ひで、幕府からは、隠し目附をつけて、出入の人を、誰何して通す、といふ有様



であつた。御當主の慶篤でさへ、登城を差止められて居るので、折角に燃え上つた、勤王攘夷の説も、これが爲めに、一時消えてしまつた。藩士の中には、既に脱藩して、公儀の御汰沙も、藩命も、更に受付けぬものが、多くあるの

で、その處置にさへ、苦んで居る、といふ場合に、内勅を受けた所で、容易に動くことは出来まい。殊に、重役間の意見も區々であつて、一向に纏りもついて居なかつた。安島にも、遣つて見たい氣はあるのだが、乗切つて御請を爲るには、事情が許さなかつた。事情を聞いて見れば、無理に押付けた所で、何の詮もないのであるから、吉之助は、空しく引取つて来た。

斯うなると、内勅の處置に困つた。事の成らぬを知りながら、長く手元へ、留めて置くことは、畏多い事だ。しかし、自分は、もう少し江戸に居て、形勢を見て行き度くもある。其處で、兎に角、近衛公の許へ迄、この内勅を、返して置くのが、よいと考へた。無暗の人に、頼むことは出来ぬので、困つて居た所へ、有村俊齋が、訪ねて来たので、事情を打明けて、之れを頼むことにして、吉之助は、江戸に留まることになつた。

京都の方では、西郷からの音信が遅いので、關係者の心配は非常であつた。近衛三條兩卿の苦心から、水戸家の留守居、鶴飼吉左衛門を招いて、更に齊昭へ、御沙汰を下す事になつた。固より人目を憚かる密使であるから、吉左衛門の伴、幸吉を以て、之れに當らせることになつた。今度は、幕政の改革だけではなく、攘夷實行の御沙汰も、加はつて居た。幸吉は、直ぐに支度をして、江戸へ向つた。

幸吉は、水戸家のもの丈けに、よく藩の事情にも通じて居たから、小石川の邸へは行かずに、駒込の方へ、やつて来て、直接に拜謁を願つた。従つて、何の故障もなく、齊昭へ、密勅を渡すことが出来た。齊昭も、御請けした上に、幸吉は、御賞に預かる、といふ上首尾であつた。

幸吉は、吉之助を訪ねて、この始末を話した。吉之助も、非常に喜んで、充分の相談を遂げ、東西相應じて、事の運びをつけやう、と、約束が出来た。幸吉は、京都へ、引返す事になつた。吉之助は、獨り笑聲に入つて、これも出

五

發の支度にかゝつた。京都町奉行の小笠原長門守は、部下の與力からの訴へて、猶注意して居ると、何事か判らぬが、水戸家と公卿の間に、秘密の計畫があるやうに見えたから、密偵を放つと、鶴飼幸吉が、江戸へ密行したことを、嗅出して来た。吉左衛門と近衛公が、度々の會合で、何か知らぬが、容易ならぬ密書を持つて、幸吉の出府と迄は判つた。この上は、猶豫して居られぬから、それ／＼に手配りして、幸吉の歸りを、途中に待ち受けて、引つ捕へようといふことになつた。目明し文吉は、草津へ急行して、網を張つて、幸吉を待ち受けた。前の失敗は、之れて埋合せをつけるつもりであつた。神ならぬ身の幸吉は、終に文吉の爲めに、捕へられて仕舞つた。

これから、大疑獄の幕が、開くのである。

幸吉が捕はれて、事は、頗る面倒になつて来た。何しろ徳川隨一の親藩、水戸家が、内勅を受けて、宗家の徳川を苦めるとは、甚だ怪しからん、とあつて、水戸家へ對する感情は、甚だ面白くなかつた。幸吉の就縛に由つて、詳細いことも解つて来たので、關係して居る範圍も、存外に廣い、といふことが、薄々判つて来たから、幕府に於ても、一大決心を以て、京都の大掃除にかゝることを、いよく極めたのであるが、それには此上もない、適役の大老、井伊といふ人物が居たので、事件の火の手は、非常に大きく廣がつたのである。

井伊は、將軍繼嗣の一件から、非水戸派に、擔がれた大老である。井伊の役は、水戸を叩きつけるのが、第一の仕事であつた。開國とか攘夷とか、そんな至難かしいことは、しばらく措いて、先づ齊昭を葬り、水戸派を、叩き潰してしまへば、大老就任の第一義は、終つた事になるのである。如何に強辯な人でも、井伊が、開國の首唱者である、といふことは、立證し得るものではない。開港の條約に調印した、といふのは、當時の狀勢から、餘儀なくされたも



ので、假し井伊でなくも、誰れでも、當時の大老たるものは、調印する外はなかつたのである。單に此一事を以て、井伊を、開國の首唱者たるが如くに、論斷するのは大早計たるを免かれぬ。島田三郎の開國始末を見ると、井伊は神様のやうに、偉くなつて居るが、彼の出版で、島田は、洋行費を産み出したので、書籍は賣れなかつたが、洋行費は出來たのである。島田も、存外不思議な、魔法を使ふ男であつた。そんな次第で、稀れに賞めるものがあつても、それは容易に、信用の出來る事ではない。

井伊が、酷く壓迫を加へた、水戸の隠居へ、内勅が下つた、といふのであるから、井伊の驚きは、言ふ迄もなく、殊に、攘夷の意味が、含まれて居ることでは、萬一之れが問題になると、それこそ、幕府の大事である。先んずる時は、人を制し、後々時は、人に制せらる、といふ諺もあるから、一刻も速く、壓へつけるのが上策である、と、獨り自ら決して、京都へ、手入をすることになつた。

越前鯖江の城主、間部下總守を、井伊が拔擢して、閣老の一人にしてあるのだ。先づ下總守を、京都へ急行させることになつた。仲仙道から微行して、他知らず入洛する計畫で、それ／＼手配もついで、既に江戸を發して、京都へ向つた。

京都の勤王派にも、江戸からの急報で、間部下總守が上洛する、とのことは、既に知れて居たので、過激な主張を爲る連中は、總州を、途中に要撃して仕舞へ、といふのであつたが、溫和派は、何の用事で來るのか、其爲す所を見てから、然る後に、一撃を加へても遅くはない、といふのであつた。相談が區々で、更に決する所がなかつたのは、其一派を指揮する、大人物の無かつた爲めである。そのうちに機は逸して、總州は入洛して、本能寺へ宿した。所司代の酒井若狹守と、打合せも済んで、此に愈々大捕縛を行ふことになつたが、世に謂ふ、安政の大疑獄なるものが、是れである。

吉之助は、鶴飼幸吉の出發した後から、之れも京都へ遣つて來た。水戸の隠居を起させるには、もう一と押し、押さ

なければむづかしいから、近衛三條兩卿の手から、直接に誰れかを、隠居の所へ使はして、みツしり説きつける必要がある、といふ見込で、其運動を爲すべく、京都へ乗込んだのであるが、間部總州が、江戸を出たことは、吉之助は、全く知らなかつた。

(これ迄は、吉之助として述べて來たが、次回からは、すべて姓を呼んで、西郷と改める事に爲る)



### 安政疑獄の側面

一

京都は、元來住みよい所である。人も、山も、水も、すべてが落付いて居て、何となくゆつくりした感じを與へる、實に不思議な土地といふ可きだ。

昭和の現代になつても、昔の落付いた風が、多く残つて居る。一言に申さば、京都の人は、舊弊を守つて、少しも現代化しよう、といふ者は、有つて居ないともいへる。それほどに、保守的な土地であり乍ら、文明の機關は、逸早く取入れてしまふのだから、實に可笑しくもなる。

電車でも、また電話でも、すべてが、一番に速く、取り入れられたのみならず、鴨川の沿岸には、不風流な土堤を築いて、喧ましい電車を通はせたり、或は比叡山を削つて、ケーブルを布き、空中索道で、人間を運んで見たりして居るが、一たび其家庭へ入ると、昔の儘の京都風なのだから、實に振つて居るではないか。

要之、京都の人間は、二重性格の持主ではないか、とも思はれる。商取引の状況から、生活必需の日用品賣の習慣、毎月五日の懸取の有様まで、一切が舊式を、逐ふて居るのだから、いよ／＼不思議である。殊に、花柳界の昔氣質に至つては、今の新人が、豫想し得ぬほどだ。それが、七八十年前の幕末時代には、果してどうであつたらうか、著者などは、土地の故老について、よく其時代の事を聞かされて、う／＼ととりとなつたものである。氣永て、優

しくて、美しい女に、晝となく又夜となく、取巻かれ乍ら、灘の銘酒に、顔を赤くして、長い刀を振廻しては、血を流した人達の事を、しづかに思ひ浮べて、其時代に、生れなかつたのを残念に思つたことが、いくたびあつたか知れない。

祇園、島原、先斗町と、世に聞えし、遊里には、料亭が軒を並べて、晝も夜も、此處ばかりには、不景氣の風も吹かぬらしい。四條の橋を渡つて、祇園にはいると東側に、井筒屋といふ貸席があつた。何時も、關東の武士が、出かけては飲む、茶屋である。この家の藝妓に、春香といふのがあつた。歳は漸く廿を二つ三つ、越したばかりの賣盛りで、藝もよければ顔も美しかった。座敷の取持ちが巧くて、氣性が、淡泊して居る、といふ評判が高く、此處では、流行ツ妓の一人であつた。

今宵も、例の關東武士ばかりで、飲めや歌への大騒ぎであつた。興を助ける藝妓は、舞妓を加へて、十人餘りだが、その中には、春香も呼ばれて居た。

『これツ、一ぱい飲まんか』

春香に向つて、盃を献した。

『有難うおます』

春香が起たう、とするのを抑へるやうにして、

『いや、起つには及ばぬ。それ投げるぞツ』

『まア、旦那はん』

と、いふうちに、飛んで來た盃は、春香の胸に當つて、疊の上に、ぱつたり落ちた。

『きつい御方やア、ホ、、、』



「何を言ひ居る。はやく飲まんか」  
 嫣然し乍ら、春香は、盃を取上げ、漉々うけてぐツと、飲み乾した。  
 「イヤ、美事々々、春香は、却々話せるぞ。今度は、この大きいのを遣はずぞ」  
 吸物の椀を取つて、さしつけた。  
 「有難うおます、頂戴いたしやす」  
 それも一息に飲んでしまった。

「流石は、評判の春香、えらいぞく。さア、その勢ひで、唄へく」  
 春香は、やがて三味を取つて、調子を合せると、すぐに唄ひ出した。音締といひ、聲といひ、惚れくするほどの調子だ。粹な端唄や、京都に流行る、小唄などを聞分ける、人達ではなかつた。  
 「今の流行のものを唄へ、古いものはつまらん」  
 客の註文に、一段と聲を張り上げて、

「何を九條々々、關白やめて、水戸の流れを見てくらせ」  
 と、唄つたのは、その頃の流行唄であつた。

例の「何をくよく川端柳水の流れを見てくらす」といふ、昔からのを變へて、誰れやらが作つたのが、いつとなく廣まつたのである。九條關白が、佐幕派で、井伊大老と、東西相通じて、種々な策略をやるので、何となく評判がよくない。水戸は勤王派だ、といふので、頗る評判がよかつた。

「これツ……黙まり居れ」  
 と、一人の酔武士は、胸間聲をあげた。春香は三絃をひかへた。  
 「貴様が、今唄ふたのは何だ。怪しからん女だ。その分には濟まれんぞ」

と、いつて立ちかゝつた。春香は、すました顔で、  
 「それは御無體でおます。流行歌と言やばつたさかい。唄うたのでおますがな」  
 「假令ば、左様申したにもせよ、その歌の文句は何だ。我々に對して無禮千萬な、さア、許さんぞ。前へ出る。ぶち斬つてくれる」  
 荒くれた武士が、大刀の柄に手をかけて、ぢり／＼とつめ寄つた。一座は白けて、他の藝妓等は、顔色かへて逃げ出したが、春香は、ニコリと笑つて、盃を取り上げた。

一一

平生は、優しい春香が、今宵は、どうした譯か、却々に負けて居ない。酒の上と行掛りもあつたであらうが、春香の身邊を、取圍いた武士は、要が女一人を、何と思つてか、刀に手をかけて居る、莫迦な奴もあつた。

「オヤ、お腹立ちだすの……オホ、、、、、」  
 「何が可笑しい。それへ直れ」  
 春香は、度胸を据ゑて、坐り直した。  
 「何ないに、なるのでやす」  
 「斬つて仕舞ふのぢや」

「お斬りなはる。女を斬つて、功名になりなはるなら、さア斬んなはれ」  
 斯うなつては、後へ退けぬ。一人の武士が、閃々と抜いた。遠くから見て居る、藝妓や仲居は、恐ろしいが儘に、仲裁も利けず、只だ狼狽して居るばかりであつた。斯うなると、抜いた刀は、血を見ずには濟むまい。折柄、廊下にはげしい足音が聞えた。座興半分に感しかけたのを、春香に居直られて、まさか斬ることもならず、といつて、抜い



た刀の處置がつかぬので、少し困つて居た所へ、襖を開けて、この座敷へ、飛び込んだ奴がある。

『ヤツ、文吉か』

『へい』

『何用あつて、此席へまゐつたか』

『火急の御用で参りやした。それにしても、此場の有様は、どうなすつたのですか』

『イヤ、心配いたすな、此女郎が、無禮を働いたので、手打にいたさう、と存じた所だ』

文吉は、眼を圓くして、  
『旦那方にも不似合な、藝妓風情を斬つたとて、何の甲斐にもなりません。女には、能く後で申聞けますから、何卒御勘辨願ひます』

仲裁は、時の氏神だ。實は、武士も弱つて居た所だから、文吉の來たのは、此上もない好都合であつた。

『助け難き奴なれど、他ならぬ文吉の口添へなら、今日の所は許してやる。命冥加な女郎だ』

『有難う存じます、本人には、私から申聞かせます』

文吉は、春香の傍へ寄つた。

『オイ、春香ツ、何うしたもんだな。我儘も大概にするが宜いぜ。お客様を怒らせるのが、お前達の商賣でもあるまい。己れが來なけりやア、既んでのことで命まで失くす所だ。併し旦那方が、勘忍して下さつたんで、まア可かつた』

首席らしい武士は、文吉に向つて、

『火急の用事とは、何だ』

『左様でした。肝賢な御用が、後廻しになつちやつた。……お前達は、氣の毒だが、少しの間、あちらへ行つて』

『親分さん、いろ／＼御厄介になりました……』

立上る春香を見て、文吉は、

『未だ歸つちや不可ないよ。話した後で、飲直しになるのだ』

『ハイ』

春香は、軽く會釋したが、武士には、聲もかけずに、立つてゆく。

『何と、剛情な女郎では御座らぬか』

『加茂川のチヨロ／＼水で、晒らした女にしては、珍らしい度胸だ』

文吉は、微笑を漏して、

『その度胸に惚れ込んで、彼の鵜飼が、愛妾なんです』

『エツ、さては彼れが、吉左衛門の女か、ふーむ』

膝を進めて、聲を低めると、文吉は、私語やうにして、

『總州様、御着と御座ります』

『何ぢや。總州侯の着京とか』

『へい、それも忍びの御着でした。いづれ浪人共は、片ツ端から引ツ縛るので御座りませう。鵜飼の伴幸吉は、私の手で、縛つて仕舞ひました』

『ふーむ、幸吉を、左様か』

『吉左衛門は、籠の鳥も同様、もう長いことでは御座りませぬ』

『而て、薩藩士の西郷吉之助は、いかゞいたしたか』



「彼奴も、明日頃は、江戸から着く、といふ報知がありました。既う手當がしてありますから、何の造作も御座いません」

語るも聞くも、秘密のことばかり、四邊を憚る忍び聲であつた。隣りの室で、怪しの物音が聞えた。文吉は、思はず顔色變へて、起上つた。

「やツ、誰れか……」

襖を開ける刹那に、廊下の向ふを、バタ／＼／＼かけてゆく。後姿は、慥かに春香であつた。氣早の武士は、駈け出さうとするのを、文吉は押止めて、

「何となされます」

「密談を立聞きする、怪しの女。ひッ捕へて、一と詮議せにやならぬ」

「まア、おまちなされませ。何も彼も、私の胸に御座ります。どうせ一筋縄ではゆかぬ女、何とか工夫を爲ねばなりません」

何か知らぬが、跡は、ヒソ／＼耳語いて、文吉は、一足さきに外へ出た。

二二

その頃の藝妓には、よく斯うした女が居て、胸のすくやうな舞臺を見せたものだ。それは、京都にばかりでなく、江戸の方にも、少なからず在つたものだが、東京となつてからの藝妓は、すつかり變つて、どれも、これも、現金主義の女ばかりになつて、意氣や張を以て、突ツ張らう、と爲るものは、殆んど無くなつてしまつた。何しろ藝妓のくせに、コールドのカバーを、穿いて歩く奴があるのだから、實に厭になる。

春香は、元來が武士の娘であつた。はやく父を喪ひ、病身の母に育てられて、苦勞のうちに人と成りし、薄命の婦人である。藝が身を、扶けるほどの不幸と、昔の人の言つた通り、家の貧苦を救ひ、母の醫藥を充分にしよう、といふ心からの藝妓稼業だから、浮いた／＼で面白く、只だ色戀の爲に、日を送るといつたやうな、世間にもありふれた藝妓とは、少し違ふのであつた。それと知つて、手折つて見たさの一念から、通つて来る客も多く、春香の全盛は、人も羨むばかりであつたが、何時の頃からか、鶴飼吉左衛門の世話を受けることになつて、品行は、愈々堅くなる。けれども、相變はらずの全盛は、流石に、祇園の名花ぞと、噂の高かつたほどあつて、現時の所謂不見轉とは、大に違ふ所があつた。

現時の藝妓でも、總べてが駄目だ、といふ次第ではない。さかんに不見轉が行はれるうちにも、藝妓の本性を失はぬ偉いのも、稀にはある、といふことだ。藝妓といふものは、如何なる場合にも、自分の心を抑へて、他の機嫌を迎へるのだから、實に至難かしい稼業だ、多くの客の中には、無論堪らないほど、厭な奴も、あるには違ひないが、それを顔色に出さずに、快く遊ばせて歸すのが、藝妓の商賣であつて、客に唄はせるにしても、自分が唄ふにしても、客をテレさせるのが、一番に悪い。盃一つさすにも法があり、拳を賭つにも則がある。無暗に飲ませても不可ないが、矢鱈に騒ぐのも不可ない。その呼吸が鳥渡むづかしいのだ。本式の修業を、積んで來なければ、その邊の呼吸は解らない。

昔の浪花に、寸切の小萬といふ名妓があつた。その抱へ妓を教ふるに、數ヶ條の心得を書いて、部屋へ張り出した。そのうちに、斯ういふことが書いてある『如何に寒い時でも、寒むがつては、いけない。如何に暑くとも、肌を脱いで、いけない。客の前で、他の惚けを言ふては、いけない。風泣をしては、いけない。符牒や隠語は、いけない。物を欲しがつては、いけない』その他、遊藝の心得もあるが、それは略して置く。小萬は、此心得を以て、抱へ妓を引廻したのだ。現時の藝妓は、この通りにならぬ迄も、少しは慎んで貰ひたい、と思はれる奴が、多いのだから困る。尤も左様なると、客の方も、改良しなければ駄目だ。



祇園、清水、智恩院と、京洛名所のつらねにもある。此處は、祇園の山添道、夜は大部更けて居た。四邊はしんとして、梢をゆする風の音ばかりが、夜半の寂しさを破る。

『オイ春香、此處まで来りやア、此方のものだ。もう大概に往生しなせえ』

『それは妾を……』  
『知れたことだ。丁度去年の櫻時、長野の旦那の御供をして、彼の井筒屋で、飲んだ時から、そつと身に沁む戀風に、時代のやうだが寝ても起きてても、忘れたことは無えのさ。今夜も、お前の危ない所を助けたのは、矢張り可愛さからの親切だ。こんなに思ふ心中男、満更ら憎いこともあるまいぜ』

芝居もどきの口説臺詞で、春香に迫る文吉は、年甲斐もない厭な奴だ。春香は、隙を見て逃げようとするのを、文吉は、力盡ても従はせよう、としての争ひ、春香の肩先へ手をかけた。

『アレ、誰れか来て下さい。人殺しく』  
聲を限りに叫びながらも、女の一心、力に任せて、ドンと突いた。不意を突かれて、文吉が、よろける刹那に、木の根に足を捉られ、崖下へ、ズル／＼と落ちた。その間に春香は、駈け出した。

往來の途絶えた深更のことで、救ひの人も来ず、夢中にかける春香は、息も喘ぎ／＼、何處を何う抜けて来たのか、五條の橋へかゝつた。折柄、向ふより一人の武士が、寒さ凌ぎの頭巾に、顔を包んで通りかゝつた。夢中で駈けて来た、春香は、その武士に突當つて、思はず足を停めた。

『無禮者ッ』  
『御免やす』  
『春香ではないか』

『エッ』  
春香は、怖々ながら振返つた。

四

西郷が、京都へ乗込んだ時は、既に鶴飼吉左衛門は、奉行所へ引致れて居たのだが、水戸邸ではどういふ理由か、深く秘して居たのである。更に一乗寺村に、梅田雲濱を訪ねて、西郷は、異様な感を起した。偵吏のやうな奴が、徘徊して居たので、雲濱に、之れを話すと、雲濱は、一向平氣であつた。用談は濟ませて歸つたが、どうも不思議ならぬ、自分の後からも、尾行て来る様子であつた。鍵直方へ、歸つた後も、その家邊を、ウロ／＼して居る奴があつた。そこで西郷は、ます／＼變に思つた。月照の所へ行つたら、多少の消息も判るだらうと、身支度をして出かけよう、とした所へ、はいつて来たのは、例の有村俊齋であつた。

『おう、有村殿か』  
『變事て御座るぞ』

『何ッ……變事とな』

『確實には、判らぬが、間部總州が入洛して、所司代や奉行との往復も、大部はげしいと聞くが、何事か起きたのではあるまいか』

『ふーむ、江戸を出る迄、左様いふ状況はなかつたが、總州は、もう着京たのか』  
『左様、極くの秘密でな』

『は、ア、さては事の破れか』  
『事の破れとは、何事ぢや』



「水戸家の一條ぢや」

「うむ、内勅のことか」

「それより外には、これといふ心當りはない」

「成程」

「己どんは、これから成就院へゆく。足下は、藩邸で待ち居れ」

「よろしい。それぢや、また後刻……」

俊齋は、起ち上つた。

「怪しい奴が居るから、注意して行け」

「なアに……」

威勢のよい俊齋は、笑ひながら出てゆく。

西郷は、鍵直を呼んで、戸外の様子を窺はせると、俊齋が、宛も事あり氣に駈け出したので、偵更は尾行ていつたものか、幸ひ一人も居らぬ、といふ。裏口から密と出て、忍び足に、軒並びの四辻へ出た。天は、薄曇を流したやうで、何となく厭な晩であつた。急ぎ足になつて、態と五條の通りへ出た。道を迂廻つてゆくのは、萬一の場合を慮つてのことだ。

五條の橋上へかゝつた時、向ふから駈けて来る女があつた。避けようとした刹那に、もう近づいて居た。靜かに左りへ避けると、ドンと肩へ當つて、行き過ぎようとした。

それは春香であつた。

「西郷さまどすか」

「この深更に何としたのぢや。殊に既足のやうぢやが」

「大變なことが……」

と言ひかけて、四邊に氣兼ねする様子だ。

「幸ひ、人通りはない。何ういふ仔細か」

春香は、今宵の始末を物語つた。西郷は、それで悉皆判つた。總州の入浴も、その爲めであつたか、幕府は、大決心を以つて、勤王の志士を、捕へるに違ひない。前後の事情から察するに、餘程の決心でやるらしい。鶴飼は、既に捕られて居るのだらう。何うも邸の様子を、可怪しいと思つた。それにしても、自分の處置と、月照の身の上、一刻も疾く、成就院へ行つて、相談を遂げねばならぬ、と覺悟の臍の緒を極めた。

「それは、定めて心勞であつたらう。鶴飼氏には己どんから話して置く。貴女は、直ぐに家へ歸るが可い。この事は誰れにも語るな、よいか」

「ハイ」

「送つてやる可きぢやが、少し急ぐ用事もある故、これで御無禮する」

春香は、祇園を指して行く。西郷は、月照の許へと急いだ。

五

成就院へ來た時は、既う初更を過ぎて居た。月照は、折悪く不在であつた。弟の信海も居らず、近藤正愼も、未だ歸らぬ、との事であるから、一と先づ、鍵直へ、引返して來ると、伊知地龍右衛門と、北條右門が、歸宿を待つて居た。

「やア、騒動々々」

と、兩人は、西郷を見て、ひとしく叫んだ。



「叱ッ」

西郷は、兩人を制して、座に着いた。

「愈々始まつたか」

「貴下、知つてなはるか」

「總州の入浴は、よもや、普通事ではあるまい」

「勤王の同志は、片つ端から捕へられる、といふことぢや」

「而て、少しは判つたか」

「梅田も、頼も、既にやられた、と聞いたが、其外のもの、どうか知らぬ」

「左様か」

折柄、忙しくやつて、来たのは、例の俊齋であつた。

「一大事ぢや。ヤツ、皆な居るか」

どれも、修養の足りない、只だ威勢のよいばかりの連中、喧騒か憤慨か、その外に能はないのだ。西郷は、有鑒に沈着して居る。

「幕府の方針が、此に至るは、止むを得まい。態々閣老まで、上落させる位であるから、その決心は尋常事ではなからう。梅田、頼が捕へられたのは、諸侯の家臣でないから、誰に憚る所もなければ、何の遠慮も要らぬが、我等は、幸ひに九州の大藩、島津の家臣ぢやから、迂濶手は下せまい。けれども、やがては同じ運命にならう。履み止まつて、飽迄も幕命と抗争ふか、それともに、一時この場合を避れて、後日の計畫を爲さうか、いづれが可いか」といふて、相談をかけた。矢張り西郷は、西郷丈けあつて、先きから先きを考へて居る。俊齋は、腕を扼して、「不埒千萬なるは、幕吏の奴等ぢや。この上は、速かに同志を集め、總州旅館へ斬込んで、先づ彼の首を打ち落し、

酒井所司代、小笠原奉行の輩も、片つ端より撃つて取り、佐幕派の奴輩の膽玉を寒からしむるのが、最上策と考へる」

と、事も無氣に言放つた。俊齋の元氣は、何時も熾んなものである。西郷は、微笑を含んで、

「有村殿が、相變らずの元氣は、面白いことぢや。敵の不意に乗する一策としては、それも可からう。併し、今度の事は、幕府が、大決心を以つて、始めたに相違ないから、輕卒に手を出すのは、却つて敵の陥穽にはいるやうなものぢや。己どの考へては、窃かに國元へ引上げて、更に復た思案を盡し、再學をはかるの外に、良策はあるまい、と思ふ。今に及んで、總州を襲ふは、時機が後れて居る。徒らに元氣に任せて、死地に飛込むことは、大に慎まねばならぬ」

西郷は、教ゆるが如く、また諭すが如く、理義を明かにして、俊齋の突飛りを抑へた。相談の結果は、立退くことに決した。

只だ一つ、心懸りは、月照の身の上であつた。公卿縉紳と、勤王浪士との間に、よく周旋の勞を執つたものは、月照である、といふことを、幕吏も知らぬ筈はない。何とかして此事を、はやく知らせてやり度いが、若し既に知つて居て、身を隠したのなら、それで可いとしても、一度は逢つて、將來の相談を、遂げて置き度い、と、西郷の胸は、それやこれやが、今は紊れた糸の如くであつた。

廊下を、駈けて來るものがあつて、足音が、障子の外で止まつた。

「西郷様へ、御使が見えました」

「何ぢや。使ひが見えたと、其處を開けても、よい」

樓婢は、障子を開いて、文箱を出した。受取つて見ると、近衛家の老女、村岡の手紙だ「殿下が、逢ひ度いと仰せられるから、直ぐに來て貰ひ度い。それから、月照も、既に來て居る」とのことであつたから、西郷は、直ぐに近衛



公の御殿を、指して急ぐことになつた。

六

僧侶ながらも覺悟のよい、月照は、既に身の危きを悟つて、近衛公へ、現世の訣別に來たのであつた。元來が、蒲柳の質で、事に堪へぬ風ではあつたが、夙に勤王の志を抱いて、幕府の専恣暴戾を、憤はるの餘り、進んで、志士浪人と、交り結び、また、詩歌の會に事寄せて、公卿精神の邸に出入しては、頻りに幕府の失政を算へ、王室の式微を慨くところから、忽ちにして勤王僧の名も高く、自然に具はる氣品と、熱烈の意氣とは、既に有志の知る所となつて、月照の名は、幕府の帳面へも記入されて、いつも偵吏の注意を受けて居たのだ。殊に、公卿と有志を結びつけたのは、多く月照の力であるから、幕府の憎しみも一段とはげしかつた。今度の大捕縛については、月照も、全く一番に、捕られる筈であつた。

然るに、間部總州の入京と、小笠原奉行の擧動が、何うも可笑しいと思つて、近衛公の注意から月照を呼寄せて、幕吏の擧動を搜つて見ると、梅田や頼が、捕られた事も判り、そして之れからは、主人を有つ藩士の身の上である、と云ふことも、悉皆知れたから、従つて、月照の身も、危いものと思ふ外なかつた。

此處は、近衛家の奥御殿、忠熙卿と相對して居るのは、例の月照である。卿の背後に、控へて居るのが、女丈夫の村岡であつた。

『卿、現世の御暇申上げます』

月照の詞は沈んで、その態度さへ、何處となく痛切しかつた。忠熙は、思はず手を振つて、

「それは悪い御分別ぢや。假し、幕府が如何に、慘手を用ゆればとて、僧侶の身にまでは及ぶまい。只だ此一時を過ごせば、後は何とでもなるであらうから、先づそれまでは、西郷に頼りて、一たびは、薩摩へ落延び、また來む春を待つがよい。そのうちには機會を見て、朝廷へも願ひ、幕府へ、赦免も請ふて遣はさう。左様いたされては、如何ぢや」

月照は、珠數つまぐり乍ら、眼を閉ぢて、何の答へもなかつた。老女の村岡は、之れも頻りに、薩摩行きを勧める。其處で、月照も、心を取直して、卿の仰せに、従ふことになつた。それでは、西郷を呼んで、相談に及ぼうと、村岡に申しつけて、態と村岡の名で、鎌直へ、使ひを走らせたのである。

聽て、西郷が來た。忠熙卿から、此事情を打明けて、月照の身を頼んだ。固より西郷も、人知れず月照のことは、心配して居るのであるから、否應のある可き筈はない。殊に、自分も、京洛には居られないのだ。兎に角、その晩のうち、近衛邸を立退くことになつた。

月照が、平生から懇意にして居る、御幸町三條上る所の、竹原好兵衛といふ人があつた。その家へ、一先づ隠れることになつた。忠熙卿に、御暇乞を申上げると、卿も、涙を浮べて、月照の手を取り、別れを惜ませられる。吳々も、西郷へ御頼みの御言があり、月照へは、旅費として十兩、外に懐劍と浴衣とを下さる。月照も、西郷も、盡きぬ名残を惜みつゝ、忠熙卿の御前を辭して、竹原方へ立退いたのは、夜半も過ぎて、既に黎明近い頃であつた。

この生別は、やがて死別になる。

西郷は蘇生つて、再び御目にかゝつたが、月照は、終に之れが、今生のお別れになるのであつた。九月の十九日から、大捕縛が始まつて、苟も幕命に抗したものは、罪の有無に論なく、片ツ端から、ミシ／＼捕つつけたのであつた。之れが世に名高い、安政の大疑獄、井伊大老の暴斷として、幕末の歴史を賑はしたが、井伊も、亦た之れが爲めに、櫻田門外の鬼となつた。



# 月照薩摩落

月照の立場からいへば、薩摩落といふことになるが、西郷の立場からすれば、薩摩へ歸るのであつて、一概に、薩摩落の條へ入れるのは、或は穩當でないかも知れない、けれども、西郷は、月照と同じやうに、幕府から逐はれて、薩摩へ逃込むのであるから、その境遇は、全く異なるのであつた。

一面から見れば、月照の御供であり、また一面から見れば、遁れる序の道伴とも、いへる譯だ。其點に於て、此物語の興味もあれば、叙述の價值も、有るといふ事にならう。

而かも、落人の結局は、武士と坊さんの心中となつたのだから、一段の面白味も、加はる筈である。從來の拙著、南洲傳には、此一項丈切放してあつたのを、今度は、すつかり書直して、完全なものに改めたのであるから、著者としても、大に満足の出来る事になつた。

一たび政權が、武門に委ねられて以來、歳を逐ふて、王室の威光は、只だ薄れゆくばかりであつた。頼朝から、家康へ、移る迄四百年、その間の戰亂は、殊更に説かずとも、王室は、有るか無しの状態であつた。所謂將軍政治が、強行はれるやうになつてから、武門の跋扈は、殊に甚だしくなり、終に徳川氏の世となつては、君臣の分なきも、殆んど認められず、天下は、徳川氏の天下として存するのみであつた。將軍家の寺院は、飾るに黄金を以てし、將軍の出入は、王者のそれと異ならず、騎香の限りを盡したが、王城の頽廢は、更に顧みられなかつた。

然れども、盛衰榮枯は、自然の數であつた。如何に全盛な徳川氏でも、一度は、必ず衰滅の時が来る。長く泰平が續くと、先づ人心が倦んで、騎香に流れ易く、徒に物慾のみ盛になつて、世は澆季になる。學問をするにしても、實際の應用を離れて、所謂死學問になつてしまふ。楓橋夜泊の詩を、三年も費して、講義を終つたとか、一字か二字の意味を、一年もかゝつて學ぶやうになる。こんなことが結局、武士の根性を柔弱にして、元祿の頃には、士風の頽廢、其極に達した。

元祿の時代は、徳川氏の文學が、尤も旺盛を極めた時だ、と、人はいふが、けれども、著者に云はせると、文學も旺んであつたが、其文學者の一部は、當時の士女をして、魔道に逐込んだともいへるのだ。物堅い武士が、柔弱な遊を覚えて、鎧をつける身體へ、紅絹裏の衣物を着たり、竹刀を持つ手で、三絃を弾いたり、實にいやらしい風が流行出して、竟には女郎と墮落をやらかす、藝者と情死をする、つまりは、追剥も行れば、強談もはじめた。武道の類廢は、此時代から始まつて、嘉永の頃には、もはや救治す可からざるものになつてしまつた。

それと同時に、眞面目に、學問を修めたものは、やうやく王道の尊ぶ可きことを知り、建武中興の夢を見るやうになつて來た。また蘭學を修めて、西洋の文化に、憧がれる連中が、何時か知らず、幕府の政道を非難するやうになつて來た。折柄、外國の黒船がやつて來る。有司は驚く、四民は狼狽する、浪人はさわぐ、學者は威張る、といつた調子で、幕府の基礎は、端の方から崩れはじめ、殆んど手のつけやうが無くなつた。

斯うなると、外國人は、いよく威喝して、通商貿易を許せ、と迫り、各藩の間には、攘夷論が起つて、幕府は、内憂外患の板挟みとなつた。攘夷論は流れて、倒幕説に合し、勤王の志士は、劍を執つて、四方より起つた。

時勢の流れほど、強い力を、有つて居るものはなく、如何なる力を以てするも、時勢の流れを抑へる事は、至難



しい。

それに沿ふてゆくものは榮えるが、それに背くものは、倒れる。古往今來、その事例は、内外の歴史に、いくらてもあるが、どうかすると、その解らない政治家があつて、力押に押付けよう、として、惨目な失敗を爲る。幕末の井伊大老が、則ち其一人であつた。

安政の大疑獄を起して、幕府に反對するものを、一時に押付けよう、としたが、却て、それが爲めに、幕府の倒れる、機運を速進したばかりでなく、自分も、此事が因をなして、櫻田門外の雪と共に、はかなく消えてしまつた。徳川の治世、三百年を通じて、此疑獄ほどに、酷い物はなかつた。江戸の事は、幕府が處理し、京都の事は、朝廷の支配に屬して居るのであつた。それにも不拘、井伊は、朝廷に迫つて、公卿を處分せしめ、宮家、攝家に迄、其手を加へて居るのであつた。或は、婦人を拘禁し、或は、水戸の藩臣を捉へて、烈公の罪を糺さんとし、亂暴狼藉を極めた。梅田、頼、橋本、吉田、安島、鶴飼等の志士を苦め、有らん限りの彈壓を加へたけれど、幕府の倒潰は、終に免れ得なかつたのである。

一一

薩摩落と極めて、竹原の家へ引上げた、西郷と月照は、これから旅の支度にかゝつた。

月照には、一人の下僕が、従いて居る。名を重助と謂ふて、子供の時から、拾ひ上げられて、月照は、育の親の如き、深い因縁を有つて居たのである。

成就院を出る時から、何となく月照の容子が、平生に變つて居るやうに思はれて、近衛邸に、待つて居る間も、それが氣懸りてならなかつた。

竹原の家へ來てから、月照は、重助に、寺へ歸れといふたので、重助は、いよ／＼變に思つた。

「旅へ、お出かけの御容子でありますが、どうぞ私しも、お伴下さるやう、お願ひ申します」

「イヤ、お前は、これから寺へ歸る事にするが、よいのぢや」

「どちらへ、おいでになるので御座いますか」

「少し遠い所へ、ゆくのぢや」

「それならば、猶更お伴下さいませ」

月照は、黙つて考へて居る。

「私は、あなたに別れて、生きて居る氣がありません。どうぞ、お伴下さいませ」

「お前は、今夜に限つて、なぜ其様な無理をいふか」

「無理かも知れませんが、ぜひ御供にお伴下さるやう願ひ上げます」

兩人の押合を、聞いて居た西郷は、堪りかねて口を入れた。

「お上人、重助どんを、伴れて行つて遣はしなさい」

「左様いたさうか」

「旅行は長いのぢやから、お上人の用事を爲せる爲にも、伴れて行く方が、よいでせう」

「それでは、伴れてまゐる事にいたさう」

重助は、雀躍して喜んだ。

「有難う御座います」

一行は、これで三人になつたのだが、西郷の考では、もう一人は欲しいのであつた。つまり、先導と用心棒に、誰れか伴れて行かう、と思つて居たのだ。やうやく考へつて、有村を伴れてゆくに極めた。所へ、有村が訪ねて來たので、まことに好都合であつた。



『オイ、有村どん。あんたも、一しよに行くのぢや』

『うむ、承知いたした』

『道案内と、途中の用心頼む』

『心得た』

『すぐに出立いたさう』

『乗物は、何といたすか』

『轎を一挺、これは竹原どんの心配で、もう来る筈ぢや。あんたと、俺どんは、歩いて行くのぢやよ』

『よし』

『あんたは、一步先きに立つ。俺どんは、一步後から、行くことにいたさう』

『よし』

いよく支度は出来て、出かける事になった。

垂轎が来たので、月照を、それへ乗せた。茶色の法衣を着し、その上に合羽をはをつけて居る。重助は、轎側に付添ひ、俊齋は、先きに立つて、三間ばかり離れた。四辻のところへ来ると、かけ抜けて、左右の横町に注意し、少しも異しい事があれば、右の手を擧げて知らせ、何事もなければ、その儘進んでゆく。つまり斥候のやうなものである。西郷は、轎に遅れて行くのだが、もし追ひかけて来るものがあれば、それを引受けて防ぐうちに、俊齋は、轎を護つて遁れる、といふ段取になつて居るのだ。

安政五年の九月十日、東の空は、漸く白んで来た。途を、竹田街道に取つて、伏見へ出よう、と云ふのであるが、實に危いことであつた。此翌日から、酒井若狹守は、浪士の取締を嚴重にして、その出入は、嚴重に誰何することになつて居たのだ。一匹の逸で、月照は、京都を出ることが、出来なかつたかも知れないのである。

京都に在つて、事無き時は、成就院の前住職で、公卿縉紳の間を往來し、浪人や志士の間にも、相當に尊敬されて居た、月照が、今は日蔭の身となつて、轎に姿を隠し、人に護られて、見も知らぬ、九州の一隅、鹿児島へ落ち行くとは、人の浮沈ほど、哀にも又果敢ないものは、多くあるまい。

一里餘り来ると、寂しい驛があつて、柳屋といふ茶亭が、今、表戸を開けて、客を迎へる支度の最中であつた。先きへ駈け抜けた、有村が覗いて見ると、幕府の捕吏らしい奴が、二十人ばかり、腰をかけて居たので、驚いて引つかへした。

『大變て御座るぞ』

『何事か』

『彼の茶屋に、捕吏が居りますぞ』

流石の西郷も、これには弱つたやうであつたが、忽ち覺悟が伏いたらしい。

『その茶亭で憩むことにしよう』

『これは怪しからん事ぢや。好んで捕吏の居るところへ、行くのも馬鹿らしい。君子は危きに近寄らず、といふこともある』

『併し、跡へ戻ること出来ず、といふて、駈け抜けることは、猶なるまいから、もし疑ひを受けたら、また其時の考も出やう、運命を試みる爲にも、捕吏の居るところへ、休んで見るのが、よい』

俊齋も、之れを聞いて、手を拍つた。

『これは面白い。仰せの如く、やつて見よう。萬一にも、事が面倒になつたら、吾々の運命も、之れまでとあきらめ